
これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～

ラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～

【Nコード】

N1115Y

【作者名】

ラルド

【あらすじ】

友達の相川 歩がゾンビになってから全てがおかしくなった。ただの人間である藤島 春樹はどんな日常を送るのでしょうか。

第一話

今年も夏がやってきた。

俺が高校に入って初めての夏だ。

俺は暑さには耐えられるほうだが、窓際に座っている男に目をやる。

「おい歩、大丈夫か？」

机で突っ伏している歩に声をかける。

「大丈夫じゃあねえよ」

突っ伏しながら返事をする。それもそうだろう。なぜなら彼は……

ゾンビだから……

ちなみに俺はゾンビではない。人間だ。

俺の名前は藤島^{ふじしま} 春樹^{はるき}。なぜ彼がゾンビだということを知っているのかというと、最近この町で頻繁に起きている連続殺人事件に関係している。

今から一か月前、午前一時頃に俺はコンビニへ出かけた。

親は家にはいない。去年から海外旅行へ行ってしまったのだ。

近くのコンビニの前まで来てみると、相川 歩がわけのわからない

ことを彼の目の前にいる少女にやっていたのだ。
歩もおかしいが、少女の格好もあきらかにおかしい。

——なぜ鎧に籠手なんだ？

そんなことを思っていると、歩と目が合った。
俺は携帯を取り出して……

「もしもし警察ですか？ コンビニの前に幼女に手をかけようとしている高校生がいるんですけど」

「ちよつと待てーっ！」

歩は必死になって俺のところへ駆け寄る。

「冗談だつて。誰にもかけてねえよ」

そう言つて歩に携帯を見せる。確かに誰にもかけていない。

「ビックリさせんじゃねえよ」

冷や汗を垂らしながら言う。

歩とは高校で知り合い、両方とも両親が海外旅行へ行っていることがきっかけでそのまま仲良くなつてしまった。

そんなコントをしていると、先ほどの少女が俺たちの前へやって来た。

彼女はスカートの中からボールペンとメモを取り出して、そのメモを俺達に見せた。

『面白かつた』

どうやら、さっきのやり取りが面白つたらしい。

『だから二度とするな』

どついう意味だ？ まあ別にこんな奴とやるのも嫌だからいいけど

……。

そんなこんなで彼女は一言もしゃべらなかつたが、それなりに充実した時間を過ごせた。

俺達は適当なところで話を切り上げ、歩が「じゃあ、またな」と手を振り、一緒に帰った。

『気を付けて』

彼女手を振りかえそうともせず、ただ、生暖かい風に銀色の髪をなびかせていた。

俺は歩と別れて家に帰ろうとしたが、歩いて五分経ったところに気が付いた。

——そういえば、アイツの買ったもの、俺が持ってたっけ。

きつと彼女と話をしていたそのことを忘れていたのだろう。急いで歩の家まで走った。

しばらく走っていると、ある家の前で足が止まった。

その家は、ドアが開きっぱなしだったのだ。

しかも、玄関には見慣れた人が血を出しながら倒れていた。

「歩っ！」

俺は急いで彼の元へ駆け寄った。血だらけになっている体を起こした。

そのときに、誰かが俺の元へやって来た。
コンビニの少女だった。

『彼から離れて』

メモに書いて俺に見せた。

『彼を助ける』

自分でもよくわからないが、彼女の言うとおりにして歩から離れた。
彼女は歩の耳元で、俺に聞こえないようにささやいた。
ささやいた直後、いきなり目の前が真っ白に光った。
そして、死んだはずの歩が目を覚ました。

「春樹に……お前。……俺は、生きているのか？」

歩の胸元を見ると、傷がぱっくりと開いているのに平気な顔をしていた。

『死んでいる』

メモには残酷な返事が書かれていた。

『私が死なないようにした』

メモに付け加えた。

「お前は何者なんだ？」

俺は彼女に問いかけた。

『ネクロマンサー』

普通はそんなことを言われても信じないだろう。だけど、死んだはずの人間が蘇ったとなると信じせざるをえない。

「待てよ。犯人は俺が生きているってわかっているのか？ もしかしたらまだ俺を探しているんじゃないか？ ——俺はまた命を狙われるんじゃないか？ 春樹もこんなのに巻き込まれて大丈夫なのか？」

今の歩は明らかに気が動転している。

「落ち着け！ 俺のほうは顔も見られてないから大丈夫だ」

なんとか歩を落ち着かせた。

『心配ない 私が一緒に居る』

なぜだか、彼女の言葉には、それなりの重さがあった。

『私も命を狙われている だから 一人で居ない方が良い』

こうして、俺の友達、相川 歩は、ゾンビとなり、ネクロマンサーの『ユークリウッド・ヘルサイズ』通称『ユー』と一緒に住むこと

になった。

そして、ここから奇妙な日常が始まっていくのであった。

第二話（前書き）

2話目です。毎日投稿できるようにがんばりたいです。

第二話

話を戻して放課後、いつものように帰りの支度をする。

「春樹君。早く帰りましょう」

幼なじみが俺に言ってきた。

彼女の名前は橘瀬奈^{たちばな せな}。幼稚園の頃からの幼なじみだ。

肩くらいまで伸ばしてある髪、顔は綺麗に整っており、かわいいというより綺麗という言葉が似合うだろう。

穏やかで優しい性格。

そして、男全員が目に残ってしまふほどの豊満な胸が特徴的だ。

そのせいか、男と話すのが苦手になってしまい、唯一話せるのが俺だけだ。

俺としか話せないせいで、俺が他の男達にとばっちりをつけるのだが……。

「ああ、分かった」

俺は立ち上がり、教室を出る前にまだ机で寝ている歩に声をかけた。

「先に帰ってるぜ」

「おう、また明日な」

寝ながらの姿勢で手を振る歩。そして、そのまま瀬奈と家まで帰った。

帰り道、俺は嬉しそうにしている瀬奈を見ながら歩いていた。
俺は週に一度、彼女の家にお邪魔して夕食をご馳走になるのだ。
俺達の両親が昔からの友達だったらしく、瀬奈の両親は俺のことを
息子のように扱ってくれる。
歩いているうちに、いつの間にか別れる場所まで来たのだ。

「それじゃあ、またお家で会いましょう」
「おう、楽しみにしてるぜ」

瀬奈に別れを告げて自宅へ帰る。
そして、自宅についた後にやらなくてはいけないことが一つだけあ
る。

玄関に置いてある竹刀を掴んで庭へ向かった。
じいちゃんから毎日やれと言われているメニューをやらなくては
いけないのだ。

じいちゃんの名前は藤島 彦一。ふじしま ひこいち この世界では剣聖と呼ばれるほど
の剣術の達人だ。

そして、俺はじいちゃんからその剣術を教わっている。一ヶ月に
一度は家に行き、そこでいろんなことをおしえてもらうのだ。
自宅にいる間は、このメニューを毎日かかさずやっている。

自主練が終わったところには既に六時を回っていたので、急いで着替
えて片手に竹刀が入っている布を持ち、瀬奈の家へと向かう。
竹刀を持っていく理由は、歩がゾンビになってからも殺人事件は続
いているので、護身用にと持って持ってきた。
自宅を出て五分で、瀬奈の家に着いた。

「おじゃましまーす」

「こんばんは、春樹君」

瀬奈が玄関の前まで来てくれた。
リビングに入ると、テーブルの上には夕食がのっており、おじさんとおばさんが椅子に座って待っていた。

「「こんばんは、春樹君」」

橘夫妻は笑顔で俺を迎えてくれた。

みんなとご飯を食べるのはけっこううれしい。

俺は遅れたことを謝ったが、気にするなと言い、許してくれた。

瀬奈の隣に座り、みんなで手を合わせた。

「「「いただきます」」」

四人の声リビングに響いた。

夕食も食べ終わったころになると、七時三十分になっていたので帰ろうと思った。

その時瀬奈が玄関まで送ってくれた。

「最近殺人事件が起きてるけど大丈夫なんですか？」

「大丈夫だって。あの竹刀も持ってきたし、俺が強いこと知ってるだろ」

「でも……」

どうやら瀬奈は俺をこの家に泊ませたいらしい。

さすがに年頃の男女が一つ屋根の下で泊まるのはマズイからなあ…

…。

俺は瀬奈の頭を撫でた。

「あつ」

撫でているとなんだかうれしそうな顔をする瀬奈。
昔からこれが好きだったんだよなあ。

「心配するなつて。また明日、会おうな」
「は、はい！」

満面の笑みを俺に向けて言った。
俺は少し照れくさくなったので、さつさと靴を履いて竹刀を片手に持ち、玄関の扉を開けた。

自宅へ帰る途中、俺は歩を見かけた。

「おい、あゆ……」

歩を呼ぼうとしたが、後ろについてきている女の子を見ると、なぜか裸に学ランというおかしい格好だったのだ。
歩も俺に気づいたらしく、しまった、という表情が見える。

「お前……、とうとう小学生に……」

「違うからな！ お前の言っていることは全部間違っているからな」
「！」

「よし、今すぐ自首しろ。罪は少し軽くなるぞ」
「いやだから誤解だからぁー！ー！」

「おい、アユム。さつきから何をやっているんだ？」

先ほどの学ラン少女が歩のところへやって来た。

「春樹、紹介する。コイツは魔装少女のハルナだ」

「はぁ……魔装少女ねえ……」

「アユム、こんな一般人に言っても信用してもらえないぞ」

「いや、信用する」

「うそ、マジで？」

それはそうだろう。なんせ歩はゾンビだし、その同居人も異世界人だからなあ。

「まあ、ここで話すのも何だし、とりあえず家で話すよ」

そんなこんなで歩の家にお邪魔した。

「お邪魔します」

本日二回目のお邪魔しますだ。

リビングに入ると、ユーが正座でテレビを見ていた。

「ひさしぶりだな、ユー」

「久しぶり」

ユーと会ったのは歩がゾンビになって以来だ。

それ以上何も話はせず、一緒にテレビを見ていた。

歩が着替えを終えてやって来た。ハルナはまだ来ていない。

「よし、とりあえず、さっきの出来事を話すぞ」

——墓地で偶然ハルナがメガロという化け物と戦っているところに遭遇し、偶然歩がハルナの魔力を奪い、偶然歩が魔装少女になり、そして現在に至ると。

そんな簡単な説明を受けて納得してしまうのも、俺がこの状況を理解してしまったからだろう。

いつの間にかハルナもユーをにらみつけながら座っていた。

「アユム、ご飯まだ？ お腹すいたんだけど？」

『肉がいい』

「はいはい。今すぐ作らせていただきますとも。春樹、お前も食べるか？」

「いや、俺はもう済ませてきたからいらないぞ」

「わかった。ハルナ、ユー。豚キムチでいいな？」

「うん！ それでいい！」

『素敵』

二人とも喜んでいる。異世界ではそんなものはないのだろうか。

「豚キムチですか……。私は味噌汁を頂きたいのですが」

知らない声でしたので、声がしたほうへ顔を向けると

美人の女性が座っていた。

第二話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。次も是非読んで下さい。

第三話（前書き）

今のところ、毎日投稿継続中です。

第三話

今、俺達は夕食を食べている。俺はいらないと遠慮したが、結局出されてしまったので仕方なく食べている。

「ええと……どちら様？」

ポニーテールで瀬奈と同じくらい胸が大きい美人の女性に尋ねてみた。

「私の名はセラフィムです」

……、自己紹介終わりかよっ！ 歩とハルナもそう思っているだろう。

「それだけ？ 好きなものとか特技とか、趣味とかあるじゃん！」

代わりにハルナが突っ込んでくれた。

「好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返しです」

質問には答えてくれたが、なんだよ秘剣、燕返しって……。

「なんでここにいるんだ？」

歩が彼女に質問する。

「任務です」

「どんな任務だ？」

「ユークリウッド・ヘルサイズ殿に、お力をお借りしたい」

ユーの方に目を向ける。しかし、ユー本人はどうでもいいような感じだった。今でもご飯を食べていた。

ネクロマンサー、魔装少女。ここ最近、おかしな奴ばかり現れている。

次はなんだ？ 吸血鬼か？

「私の任務は、ヘルサイズ殿の同意のもと、同行を求めることです」

「どこに？」

「忍者の里です」

「それじゃあ、君は忍者なのか？」

「はい、私は、吸血忍者です」

マジかよ。ほとんど当たってるじゃないか。忍者という単語を忘れていた。

ユーがメモに何か書き、俺達に見せた。

『歩 春樹 追い返せ』

「その必要はないんじゃないか。ユー」

歩が反論する。

『かまわない いいから追い返せ』

どうやら無駄らしい。

「ところで、あなたは、ヘルサイズ殿の何なのですか？」

セラ——セラフィムは長いので短くした——は歩を見てユーに尋ねた。

「俺はユーの保護者というか、まあ……」

『下僕』

おかしい妄想をしている間にユーの回答がだされた。そのせいで、落ち込んでしまった。

「では、彼は」

俺を見て言う。ユーはなんと答えるだろうか。正直、歩と同じレベルは嫌だ。

『友達』

おお、なんかうれしい回答だ。とりあえず、歩より上だと分かったのでよかった。

「友達ならば仕方ありません。ならば、こいつと同じように私が下僕になります。私のことはセラとお呼びください」

歩を差しながら真剣な表情で、セラは言った。

そして、ユーは『下僕』と書かれたメモに何か付け加えた。

『下僕は 一人でいい』

「でしたら、あなたはいいですね。どう見ても頭が悪そうだし」

「そこまで言うことないだろ。おい、春樹も何か言ってるやれよ」

「ま、確かにそうだな。彼女の方が優秀そうだし」

「確かに、アユムはバカだからな！」

『確かに』

「お前ら全員俺の敵だぁー！」

ここには歩の味方はいなかった。

「でしたら、あなた。私と勝負をしませんか？」

俺を指で差しながら言う。

「どういうことだ？」

「このバカの代わりにあなたと戦うと言っているんです」

「どうして俺なんだ？」

「あなた、かなりの剣の達人ですね。その体つきを見れば分かります」

「なっ！」

驚いた。まさか体を見ただけで分かるとは……。

「なにより、こんなバカと戦うより、あなたと戦うほうが有意義です」

「確かに、こんなバカと戦うとセラさんがかわいそうだもんね」

「はい、ですのでこのバカの代わりに勝負してください」

「おう、いいぜ。異世界の人と戦うなんて貴重な経験だ。このバカに代わって戦ってやるぜ」

「お前らさっきからバカバカ言ってんじゃねえー！」

歩の叫びが家中に響いた。

第三話（後書き）

やっと春樹が戦います。

春樹はチートでもないのに戦闘描写をうまくかけたいです。

第四話

どこか人のいない所でやりましようと言われたので、歩がハルナと出会った墓地へ移動した。

墓地がきれいだったことに歩が驚いており、ハルナによると、魔法の力で壊れたものや、記憶を消去できるらしい。

「あなたの剣はどうするのですか？」

「心配するな。外に出るときは毎日持ってきている」

そう言つて、持ってきた竹刀を布から取り出し、セラに見せた。

「竹刀戦つのですか？ それなら、もう勝負は見えていますね」

「ま、普通はそう思うだろうな」

俺は竹刀を軽く振った。

そうしたら、竹刀が突然刀に変化した。

これを見た三人——ユーは来ていない——は驚いていた。

「まさか、あなたも魔装少女なのですか！」

「ちげえから！ 男の魔装少女はアイツだけで十分だ！ 俺もよく知らないが、じいちゃんがくれたんだ。あの人、こういうカラクリが好きだからな」

「まあ、いいでしょう。それでは、始めましょう」

「あーちよつと待て。一つ、聞いていいか？」

戦闘が始まるところで、歩が声をかけてきた。

「なんですか？」

「吸血忍者とやらは、人を殺すのか？」

「殺しはしません、少し血を分けてもらっただけです」

「それを聞いて安心した」

歩が俺達から少し離れる。

俺を心配したのか、それとも自分を殺した犯人を聞いたのか、もしくは両方なのか、俺には分からないが安心していた。

「それでは、改めて始めましょう」

セラの瞳が赤になり、全身を覆うような黒いマントが現れた。どうやら戦闘態勢に入っただけらしい。

「いきます」

その一言で、セラの姿が消えた。

俺は全身に悪寒が走り、咄嗟に一步下がった。下がった瞬間に、俺の胸元が浅く切られていた。

『好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返し』

歩の家で自己紹介したことを思い出した。

秘剣、燕返し——かの有名な佐々木 小次郎が得意とする剣技だ。一度切りつけた後、二太刀目に真の一撃を放つ技だった。

切られた痛みを我慢して、二太刀目の攻撃は避けられないと反応したので咄嗟に刀で防御した。

案の定、セラの二太刀目は防ぐことができた。避けていたらやられていただろう。

「人間にしては見事です。まさか一回目で私の燕返しを防ぐとは」
「そいつは、どうも」

つば競り合いをしながら会話をする。どうやら彼女の剣は葉っぱで出来た剣だった。

そのままつば競り合いのまま、刀を離し、セラが前のめりになったところで背中に回り込み、地面に思いっきり叩きつける。

だが、さすがは吸血忍者。そんなんではやられたりはしない。

俺は急いで刀を取り、後退する。

「甘く見ていました……。まさかあそこで剣をすてるなどとは……」

セラはまるでダメージがないかのように平然と立ち上がった。

そして、彼女の背中から、緑色の翼が生え、上空に飛んだ。

「秘剣、燕返し。——八連！」

上空から八つの斬撃を飛ばしてきた。もはや燕返しですらない。

俺は斬撃を一つ一つ受け止め、攻撃を防いでいるが、完全には防ぎきれず、所々で体に傷ができる。

三、四、五……、刀で受け流すのはいいが、そろそろ刀も限界に近づいてきた。

——さつき、ピキッって聞こえたからなあ。

七、八！ やつと終わった。

斬撃が地面へいったので、俺は土煙で隠れている。

そのせいか、セラが俺を探すために少し高度を下げた。

——このチャンスを逃すわけにはいかない！

俺は墓石を踏み台にして、セラにめがけて跳んだ。

土煙から出た俺に気づいた時にはもう遅かった。既に背後を取られ

ていたのだ。

「藤島流——紫電！」

相手の頭に向かって刀を振った——もちろん、みね打ちで——。
モロにくらったセラはそのまま地面に激突した。

「くっ！」

さすがに頭を叩いたので、簡単には立てなかった。
俺はセラの背後に着地し、そのまま首筋に刀をおいた。

「俺の勝ちだな」

「参りました。油断していたとはいえ、負けは負けです」

「本当に俺の勝ちだぜ」

念のため、もう一度言う。

「はい、私の負けです」

「ふうー。いやー、あぶねえあぶねえ。見事に騙されてくれてよかったぜ」

そう言つて、俺は刀を離す。

地面に落ちた刀はバラバラに崩れてしまった。

「なっ！」

それを見たセラが目を見開いた。同じく歩とハルナもびっくりしていた。

「正直言つてあぶなかつたぜ。頭をたたいた後、完全に割れかけてたんだからな」

「い、今の参つたは無効です！ もう一度勝負をお願いしたい！」

「おいおい、俺は二回も聞いたんだぜ、俺の勝利を。お前は二回ともはいと言つたんだ」

「くっ」

見事に悔しがっている。これで帰ってくれるだろう。

「わかりました。それでは、私は家に帰らせていただきます」

俺を最後に睨みつけながら、消えていった。

「お前、かなり強かつたんだな」

歩が俺のところに来て、感心する。

「伊達に子供のころから鍛えてないぞ」

「そついえばお前、傷は大丈夫なのか？」

ハルナもやってきて俺の傷を触る。

「いつつつてー！ー！」

最初にやられた胸元の傷があつたのを忘れていた。くそつ、意識してきたらだんだん痛みが出てきたぞ。

「やめろ！ 触るな！ チビ！」

「むっ！」

怒ったのか、さらに強く傷口に触れてくる。
俺は痛みに耐えきれず――

そのまま気絶した。

目が覚めると、そこは歩の家だった。どうやら客間で寝ていたらしい。

携帯の時計を見ると、夜中の一時だった。
胸の傷を見たが、なぜか傷口はなかった。

「目が覚めましたか」

「うおっ！」

いきなりセラが出てきた。

「って、なんでお前がいるんだよ？ 帰ったんじゃないのか？」

「いったはずです。家に帰ると」

「ああ、なるほど！ 歩の家なのか――ってここに住むのかよ！」

「はい、任務を果たすために。そういうことなので、私は不本意ながらクソ虫の下僕になることにしました」

クソ虫ってのは歩のことだろう。

「そういえば、切られた傷はお前が治してくれたのか？」

「いいえ、その傷はヘルサイズ殿が治しました」

「そうだったのか。後でお礼を言っとかないとな」

明日にでも言っておこう。

「そして、もう一つ、やらなくてはいけないことができました」

「へえ、なんだ？」

「あなたを倒すことです」

「あれはほとんどお前の勝ちだぞ」

「それでも、負けは負けなので」

どうやら吸血忍者ってのはプライドが高いらしい。

「はいはい、わかりましたよ。またいつか、戦ってやるよ」

「約束です」

そう言つて、彼女はこの場から消えた。

俺も今日はここで寝ようと思い、もう一度寝なおした。

第四話（後書き）

紫電——相手の頭上まで飛び、頭にめがけて高速で打ち下ろす剣技。
初めて剣技を書いてみました。他にもいろいろ書くようにします。

第五話

本日は土曜日。俺は起きるのがめんどくさいので、午後までずっと寝ていた。

二時になってやっと起き、リビングに行くと、みんなそこでテレビを見ていた。

「みんな、おはよう」

『おはよう』

「よう、刀の。遅かったじゃないか」

「まったく。とつくに昼は過ぎていますよ」

「やけに遅かったじゃん。体は大丈夫なのか？」

俺は座り、みんなと一緒にテレビを見た。

「っていうか、なんだよハルナ、『刀の』って」

「あんたの名前、忘れたからそう呼んでいる」

「昨日、名乗っただろ！」

「私は天才だから人の名前覚えるのがめんどくさいんだよ！」

これ以上言うのはよそう。なんだか、ハルナに言っても無駄なような気がする。

「ユー、昨夜はありがとな。傷を治してくれて」

『気にしなくていい』

ここで話が途切れたので、テレビを見ることにする。

ちょうど天気予報が放送され、今日の夕方から雨が降るらしい。

——雨？

「ヤバい！ 洗濯物取り込むのを忘れていた！」

昨日は家に帰っていないから、洗濯物がそのまま干されたまんまだった。

「悪いが、これで帰らせてもらっ。また来るからな！」

俺はダッシュで家に帰った。

だんだんと雨がパラパラと降ってきた。

ようやく家に着いたが、すでに洗濯は取り込まれていた。扉には鍵がかかっていなかった。

きっと瀬奈が入っているのだろう。

「ただいま」

「あっ、おかえりなさい。春樹君」

やはり瀬奈だった。

「洗濯物取り込んでくれたのか？ ありがとな」

「え、別にいいですよ。そ……それに、これってま……まるで新婚さ——」

いきなり瀬奈の声を遮るかのように、俺の携帯が鳴った。相手は歩だった。

「もしもし？」

「春樹か？ 実は織戸が連続殺人事件の生き残りの子に会わせてくれることを言うのを忘れていたんだ。お前も来るか？」

「わかった。いつ集合なんだ？」

「四時くらいに地元の病院で」

「了解」

携帯を閉じる。

連続殺人事件。なんで俺がその事件に関わりたと思ったのは、不謹慎だが、こういうトラブルみたいなことが好きだからだ。

そのおかげで、俺は異世界人と会うことができた。これ以上に面白いことはないだろう。

時刻は二時半。まだまだ時間はある。

「瀬奈。俺、夕方ころに出かけるから、帰るときは鍵をかけなくていいぞ」

「え、は、はい……」

「あと、まだ時間があるから、宿題教えてくれ」

「は、はい！」

集合時間まで、瀬奈は宿題を終わらせていたので俺の宿題を手伝ってもらった。

四時、俺は歩の言われた通り病院の入り口で待っていた。雨はもうやんでいる。

今回もスピアの竹刀を持ってきた。

待つこと五分、歩と織戸が二人でやって来た。

「あれ？ 春樹まで来てたのか？」

「歩に誘われたんだ」
「そういうこと」

そして、三人で病院へ入った。
ちなみに織戸というのは、簡単に言つとツンツン頭の変態だ。歩を
通して仲良くなつてしまった。

入院している子の部屋に入ると、そこには女の子がこちらを見てき
た。

「あ、織戸先輩！——え？ あ、いかわさん？」

歩を見るなり、顔を赤くした。

「おいつ、京子！ 髪型はツインテールにしとけつて言つといただ
ろ？ 相川はツインテールに萌えるんだぞ！」

織戸に言われ髪を結ぶ京子。

そしてツインテールにして、事件の出来事を話してくれた。
彼女を襲つたのは、青く、きれいな目、年齢は彼女と同じくらい。
それを聞いた俺と歩は耳を疑つた。顔を見合わせ、彼女に聞いてみ
る。

「妙なガントレットを付けた、銀色のサラサラヘアー？」

歩が言い、彼女は「そうです！」と肯定した。そして、今度は俺が
聞いてみる。

「襲われたのはいつなんだ？」

「たしか……五月二十六日の深夜です」

おいおい、その日は歩がゾンビになってユーと初めて出会った日じゃないか。

俺はなんとなく窓側へ行き、窓を開ける。

そのときベッドの下から何かが出ているを見た。

しゃがんでベッドの下を見ると、木刀が置いてあった。

「なんで木刀が？」

「我が家に伝わる伝統の品です。なんちゃって」

ジョークを言う京子。歩は微笑ましい表情で彼女を見ている。

でも、俺はあの木刀が気になったが、これ以上の詮索は彼女のプライベートに関わるかと思ったのでやめた。

病院から出ると、織戸が歩に向かってお礼を言った。

「別に、俺は何もしてないぞ？」

「京子は相川の顔が見れただけで満足してんだよ」

歩は照れくさくなって、織戸から目をそらす。

「はん。こんな奴のどこがいいんだか」

どこかで聞き覚えのある声がした。

声のする方向に顔を向けると、ハルナが立っていた。

しかもその格好は、ワイシャツとピンクのヒモパンだけだった。

「お前、なんて格好してんだよ」

あきれた様子でツッコむ。

「お、おい相川、春樹、なんだこの極上美少女は？」

織戸は呆然と立ちすくんでいた。

「こら！ こつち見んなっ！」

ならそんな格好するなよ！ と心の中でツッコむ俺。

今思うと、ハルナが来たってことは、近くにメガロがいるのだろう。俺は、まだ一度もメガロを見たことがないので、かなり気になる。

メガロは学ランを着ているのが特徴だと歩から聞いた。

ハルナは、上を指して俺達は空を見上げた。

そこには、学ランを着た巨大なシロナガスクジラのメガロが浮かんでいた。

第五話（後書き）

また、春樹が戦つかもしれません。
明日も投稿できるように努力します。

第六話

「おいおい、ありや何だよ？」

俺は上を見ながら初めて見るメガロに驚いた。でかすぎだろ。

歩が最初に戦ったメガロは熊って聞いたけど、これって勝てるのか？

「あれがトリプルAランクのメガロ、常敗無勝のシロナガ！」

「何だよそれ！ 常敗無勝って一度も勝ったことがないのかよ！」

「間違えた。えと……えゝあー悪魔男爵シロナガ！」

適当に答えるハルナだった。

「ハルナ、春樹！ 織戸を頼んだ」

「わかったけど、お前アレに勝てるのか？」

「いいから早く倒せよな！ あたしのために！ あたしだけのために！」

「お前はもう黙ってる」

俺はハルナの頭を叩いて織戸に近づいた。

「当身！」

「ふっ！」

織戸を気絶させた。そして、そのまま織戸を肩に担いだ。

「俺にはどうしようもないから、後は頼んだぞ」

「わかってる」

歩は走って病院の屋上まで跳んだ。

「おい、ハルナ。ここから離れるぞ！」

とりあえず、俺達はここから離れることにした。

病院から数メートルの所まで離れた。

歩のほうは、見てみるとどうやら苦戦している。

助けてやりたいのは山々だが、俺達にはどうすることもできない。そんなとき、ハルナの近くの木にあるチェーンソーを見つけた。よく見ると、あれは昨日の夜に歩が持っていたやつじゃないか。

「あつ、そうだ！　これを渡さないと魔装少女になれないんだ！」
「そういう大事なことは早く言えよ！」

織戸を適当な場所に置き、チェーンソーを持った。

「これを歩の所に持っていけばいいんだな」
「あたしも行くぞ！　結界を張ることくらいはできるしな！」
「よし、行くぞ」

病院の屋上まで向かった。

「おい、歩！」

屋上に到着してすぐ、苦戦している歩にチェーンソーを投げ込んだ。

「げ、これってまさか」

「変身方法は教えたとおりにやれよ！」

ハルナが両手を上に掲げ、結界を張っていた。

「——っそ！ ノモブヨ、ヨシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ」

呪文を唱えると、歩が光った。そして、光の中からは変態が出てきた。

「くっそお！ このコスプレだけは嫌だったんだよ！」

歩が近づいてきたので、俺は距離をとった。

「近寄るな変態」

「チックシヨーーー！」

歩はやけくそになってシロナガに向かって飛んだ。

魔装少女になると空も飛べるのか。

シロナガを切ろうとしても、敵がでかすぎるため、深くは切れなかった。

しばらくすると、また屋上に戻ってきた。

「アユム！ 早く倒せよな！ もお、無理いつ！」

どうやらハルナも限界らしい。

どうしようかと考えているときに、セラが屋上にやって来た。

「あれ？ どうしてセラフィムがいるんだ？」

「ヘルサイズ殿に頼まれて来たのですよ。それにしても、歩。その格好はとても気持ち悪いですね。」

「ああ、その意見には同意だ。その格好はとても気持ち悪い」

「いちいちもう一度言うなよ！」

「とりあえず、あれを倒せばいいんですね」

そう言っつて、緑色の翼を羽ばたかせシロナガに向かった。

歩もセラに付いていく。

そして、セラがシロナガの首下半分を切り、歩が全力で蹴った。

シロナガはベッキとは折れず、爆発した。

急いで俺とハルナは下に降りて歩たちの元へ向かう。

「おい、大丈夫か？ セラフィム、変態」

「ええ、大丈夫です」

「俺、もう泣くぞ」

歩は魔法で建物の修復と記憶の消去を行った。

「あれ？」

「どうかしたのか？」

首をかしげる歩に聞いてみる。

「お前の記憶も消そうとしたんだが、なぜか消せない」

「まあ、いいじゃん、それくらい」

軽く受け流す俺だった。

「春樹！」

セラが木の葉を剣に変えて両手に持った。深紅の瞳は俺に向けていた。

いや、違う！

俺は後ろから殺気を感じ、瞬時に肩にかけてあるケースを手に取り防御した。

竹刀に何かが当たった。この感触は、もし防御しなかったら心臓を貫かれていただろう。

相手を見ると、そいつは学ランを着たアリクイだった。

本日二匹目のメガロだ。

第七話

「あれは、ヘビー級メガロ、モハメド・クイ」

ハルナが言うと、アリクイは俺から離れて、軽くフットワークをとる。

「おい歩、また変身しろよ」

「あ、魔装少女になれるのは二十四時間に一回だけだから」

マジかよ。

セラを見してみるが、翼は消えており、少し疲れているように見える。

「セラフィム、大丈夫か？」

「いいえ、血が足りないせいか、力が出ません」

セラはどうやら戦えないらしい。

「しょうがない。歩、二人で戦うぞ」

「足引っ張んなよ！」

竹刀を刀に変え、アリクイに向けて構える。その隣で歩がボクシングのような構えをとっている。

「ハルナ。一つだけお願いがあります」

「な、何だよ。変なことなら、蹴るからな」

「あなたの血がほしい」

後ろからそんな言葉が聞こえ、二人は何かをしている。

俺はその光景は見え、アrikuiと戦っている。
何だか、ハルナが嗚咽のような悩ましい声を出しているから余計気になる。

アrikuiを蹴り飛ばして、ハルナ達のほうを見てみた。
その光景を見ると、なんだかこっちまで恥ずかしくなってきたので戦闘に集中した。

アrikuiは素早い動きで俺達を攻撃してくる。
幸い俺は何とか見えているから防げるが、歩のほうは見事にボコボコにされている。

ゾンビでも、動体視力までは上がらないらしい。

「危ない！」

俺は歩を突き飛ばし、さっきまで歩がいたところには何かが出てきた。

それは、アrikuiの舌だった。

最初の攻撃も舌だったのだろう。

俺は反撃をするために、アrikuiの懷に潜り込んだ。
上段から刀を振ったが、避けられてしまった。

だが、避けられた瞬間にもう一度構え、相手の腹を突いた。

「藤島流——おいかけ追懸！」

相手の腹を貫いた。

けど、アrikuiは腹に喰いこんでも平然としていた。
刀を抜き、アrikuiから距離をとる。

「お待ちせ致しました」

やっとセラが来てくれた。

「遅いぞ。俺ももう疲れたから、後は頼んだぜ」
「わかったます」

ボコボコになつてゐる歩を引きずりながら、ハルナの所まで避難した。

「木の葉の如く舞い飛ぶ剣、即ち――」

木の葉が大きな剣に変わる。

「飛剣、百鬼漸殺」

一瞬でアリクイがやられた。――やっぱり強ええんだな。
一瞬でケリをつけるセラに関心を持つ。

俺は手を挙げ、セラは何も言わずに俺の手を叩いた。

「歩、彼女のこと、どう思う」

「いきなりなんだよ。まあ、あの子は嘘を言っているようには見えなかったがな」

「そうか……」

帰り道、京子という少女が気になったので歩に聞いてみた。

正直、俺はユーが犯人とは思えなかった。それに、彼女のベッドの下にあった木刀。いったいあれは何なのだろうか。

「それじゃあな」

「なんだ？ 飯食ってかないのか？」

「今日はコンビニの弁当が食いたい気分なんだよ」

そういつて俺は歩と別れる。

家に着くと、家には電気が点いていた。

「まさか……」

扉を開け、台所まで行くと、瀬奈が料理を作っていた。

「あつ、春樹君。おかえりなさい」

「ああ、ただいま、ってお前帰ってないのかよ。親は大丈夫なのか？」

「はい、お父さんたちには言っておいたので今日は泊まってきます」

「はあ……しょうがねえな」

今までも何回かあったので、もう諦めかけている。

コンビ二弁当はまたいつか食べようと思い、出来上がった料理を二人で食べた。

途中、歩からメールが来たので携帯を開いてみると『助けて』と書いてあったが、後からまたメールが来て『心配いりません』とセラが書いたメールが送られてきたので無視した。

第七話（後書き）

追懸おいかけ——上段から刀を振り降ろし、相手が避けた所構えなおして、
突く技。

二つ目の剣技を書けました。もう少し書いていきます。

第八話

「春樹君、一緒にボウリングへ行きませんか？」

昼飯と一緒に食べている瀬奈から誘われた。

「なんでいきなりボウリングなんかに行こうと思ったんだ？」

「友達からボウリングのタダ券をもらったんです。使わないのももったいないので、お昼食べてから行きませんか？」

「家に居ても暇だからな。よしっ！ 行こうぜ」

——いい気分転換にもなるしな。

すぐに昼飯を食べ終え、着替えをして、竹刀をケースに入れて準備ができた。

今日は平穩に過ごしたかった俺であった。

ボウリング場に着き、早速ゲームを始めた。

ゲームが後半までやると、何やら近くで聞き覚えのある声がする。

「げっ！」

歩と織戸だ。

さらにハルナ、ユー、セラの三人までもいた。

まさかあいつらもここまで来るとは思ってもみなかった。

「どうかしたんですか？」

瀬奈が心配して俺に聞いてくる。

「大丈夫だ、問題ない」

「？」

焦りながら言う俺に首をかしげている。

なんとか誰にも気づかれずに終わらせたかったが、その願いは早くも打ち碎かれた。

「おい、あそこにいるの『刀の』じゃねえ？」

ハルナが大声で叫んでくる。

——終わった。

早くも俺の平穏が終わった。

「春樹、何をしていますか？」

「セラフィムか。見ての通り、ボウリングをしているんだが」

「そんなことは分かっています。あなたの隣にいる人は誰かと聞いているんです」

隣に座っている瀬奈を見ていた。

「春樹君、あの人、誰ですか？」

「はあ、紹介するよ。彼女はセラフィム。今、歩の家に居候している人だ」

「どうも」

頭を下げるセラ。

「そして、彼女は橘 瀬奈。俺の幼馴染だ」

「橘 瀬奈です」

彼女も同様にお辞儀をする。

「じゃ、そういうわけで」

早くここから抜け出したかったので、瀬奈の手を掴み、帰ろうとした。

だが、セラが俺にこう言ってきた。

「ここで会ったのも何かの縁です。勝負しませんか？」

ピタリと足が止まってしまった。

勝負と言われてどうしようかと迷ってしまった。

「どうしたんですか？ 別に逃げてもいいですよ」

「上等だ、やってやるうじゃねえか！」

見事に相手の罠に引っかかる俺だった。

結果は惨敗。俺は三回ぐらいしかストライクを取っていないが、セラは全部ストライクだったのだ。

——っていうか、それって反則じゃね？

スプリットの時なんて、ボールが直角に曲がってたぞ。

「私の勝ちですね」

ふふっと笑うセラだった。かなり悔しい。

「ま、あれはしょうがないだろ」

俺を慰める歩。歩達もこの試合を見ていたようだ。

「おいおい、お前まであの美女たちのことを知ってんのかよ！ただでさえ橘さんと付き合っているというのに」

「付き合ってねえよ！」

織戸は羨ましそうに俺を見てくる。マジで気持ち悪い。

「アユム！服買って！」

ハルナが歩に抱きついてきた。どうやら、ボーリングでパーフェクトを出したらしい。

結局、みんなで衣服売場まで行くことになった。

ハルナは歩を連れまわし、衣服を見ていた。

俺の後ろにいるセラも物欲しそうに服を見ていた。

「欲しいものがあたら買ってやるよ」

「いいのですか？」

「まっ、ボーリングに負けたからな。それくらいのことはいいぞ」

「あ、ありがとう」

笑顔で俺に返してきた。なんだか照れくさくなる。

「春樹君、私もいいですか？」

「はあ、お前のもついでに買ってやるよ」
「ありがとう、春樹君！」

瀬奈も嬉しそうに服を選びに行った。

途中でセラと一緒に服を選んでいたのが目に入った。ちゃんと話せていて、安心した。

俺も服を買おうかと適当に見ていたが、偶然歩とユーがエレベーターに乗っていくのが見えた。
気になってエレベーターの前まで行き、エレベーターが止まった先は屋上だった。

何か大事な話をするんだなと思い、もう一度服を見に行った。

いろんなものを買い、デパートの入り口でみんなと別れた。
俺は今、瀬奈と二人で帰っている。

「今日は楽しかったですね」
「ああ、お前も友達ができてよかったな」
「はい！」

意外とハルナ達と会話が弾んだらしく、今でも嬉しそうな顔になっている。

適当に話をしている内に、瀬奈の家までついたようだった。

「それじゃあな」
「ご飯、食べていけないんですか？」
「今日はコンビニで済みたい気分なんだよ」

昨日食べられなかったので、今日こそ食べたいと思った。

別れを告げて、コンビニまで向かおうとしたが、突然歩からメールが来た。

『ピザでもとろうと思うんだが、お前も来るか？』

一発でOKメールを送った。コンビニはいつでも買える。だが、ピザは高いから一人暮らしの俺にとっては、ほとんど食べられないものなのだ。

行先をコンビニから歩の家に変えた。

第九話

「ピザ食いに来たぜ！」

速攻で歩の家へ行き、力強く扉を開けた。

「はっ！」

玄関には鏡の前でネコミミを付けながら「にゃー」とポーズをとっていたセラがいた。

——見てはいけないものを見てしまったような気がする。
俺はそーっと出て行こうとしたが、セラに手首をものすごい力で握りしめてきた。

「忘れなさい」

「い、いや……」

「忘れなさい」

「……はい」

今日のことは胸にしまっておこうと思った。

「やったーあーっ！」

大はしゃぎになるハルナ。

テーブルの上には、シーフードとエビマヨ、さらにササミのピザが置いてある。

かくいう俺も、早く食べたいという衝動に駆られている。

「ピザなんて何時振りだろうか」

早速手を伸ばす。シーフードのピザはともうまい。

隣に座っているセラを見ると、何故かピザとにらめっこをしている。

「何してんだ？」

「私は和食以外を口にすることがありませんので、恥ずかしながら少々怖いのです」

「いいから食べてみろつて。早くしないとなくなっちまうぞ」

俺の言葉に従い、ピザを食べてみるセラ。一口食べたなら、美味いと思ったのかどんどん食べ始める。

「素晴らしいですね。これほどとは……」

セラもお気に召したので、みんなでピザをお腹いっぱい食べることができた。

「アコム、携帯貸して」

「ほらよ」

食べ終わったハルナが誰かに電話をするらしい。

「あ、大先生ですか？——え？あ、そうですか。でしたら、リフレイン年ライジング組の出席番号六三四五二六三七九のハルナから電話があつたことだけ、お伝えください」

「なんだよお前のクラス！——クラス何人いるんだよ！」

思わずツツコンでしまった。なんだよ、リフレイン年ライジング組

って。

どうやらハルナは、この世界にあるアーティファクトのことで電話をしたらしい。

「なんだ？　アーティファクトって？」

歩が尋ねてみた。

「たしか……名前はキョウドウ……キョウフ……恐怖っていう名前だったような」

「それって形があるものなのか？」

「当たり前だろう！　こう、四角くて柔らかくて」

歩は俺達を見て「知ってるか？」と聞いてみたが、俺にわかるはずもないので、首を横に振った。

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

「俺が出るよ」

俺は立ち上がり、玄関まで向かった。ピザを奢ってもらったし、それくらいはしておこうと思った。

扉を開けると、二足歩行のドーベルマンがいた。

「どうも、自分はケルベロス・ワンサードと言います」

——絶対にツツコまないぞ。

なんとか我慢してる俺。

「何の御用ですか？」

「あなたはまだ生きているのでいいのですが、相川　歩さんと呼ん

でくせんせんか？」

「はあ……」

とりあえず歩を呼びに行き、そのままリビングでくつろいだ。

「誰だったのですか？」

「ん？ 二足歩行のドーベルマン」

そんなことを言っていると、突然歩が肩をおさえながらユーの元まで来た。

「ユー！ すまん。いきなりだが治してくれ！」

ユーは無表情のまま左手のガントレットを外し、歩に手を当てた。すると、出血は止まり、傷は癒されていた。

——これって、俺がセラと戦った時にも治してくれた能力なのか？

「ユークリウッド・ヘルサイズ様ではありませんか。最近見ないと思ったら、こんな所に」

ドーベルマンは歩とユーを交互に見て、何かを悟ったらしく座りだした。

「まったく、あなたの仕業ですか……。そうとわかっていたらこんな所には来なかったのに」

『忘れてた』

「もう、俺とは戦わないのか？」

「はい、ヘルサイズ様がしたことなので」

なんだかよくわからないまま、さっきの戦いの件は終了してしまっ

た。

「わかってますか？ 相川さん。ヘルサイズ様があなたの傷を癒した意味」

「はい？」

『大丈夫 耐えられる痛み』

「ヘルサイズ様は対象物を治す代わりに、自分がその分の痛みを請け負うのです」

——ってことは、俺が以前治してもらった傷もユーが請け負ったってことか？

「ユー、すまんかった」

「俺も、悪かったな」

歩と俺の二人でユーに謝る。

『かまわない』

本当に申し訳ない気持ちになった。

「でしたら、私はそろそろお暇させていただきます。そうそう、この近くで人が殺されかけているので、その魂も連れて行こうかな」
「ちよつと待った！ 俺も連れてってくれ」

急に歩が言い出す。確かに、ドーベルマンの後を追えば歩を殺した犯人が分かるかもしれないからな。

そして、歩はドーベルマンと一緒にどっかへ行ってしまった。

歩が出かけてから十分くらいが立った後、俺もそろそろ帰るよと言って自宅に向かった。

いつものように竹刀は持ってきている。いつ襲われるかわかったもんじゃない。

人は誰もいなかった。今、ここを歩いているのは俺だけだ。

だが突如、背後からすごい殺気が襲ってきた。

急いで横っ飛びをし、さっきまで俺のいた場所には俺の心臓を刺そうとしていた刃物があった。

夜で顔は見えないが、そいつから距離をとった後、竹刀を刀に変え構えた。

「驚きました、まさか私の金縛りが効かないなんて」

「誰だ、お前？」

声からして、明らかに女の声だった。だが、肝心の顔が見えない。

「今日はもう、殺すのはよししょう。さっき犬のメガロと男性を殺して満足しましたので」

どうやらドーベルマンは殺されたらしい。

だが、歩がゾンビだとわかっていなかったのは幸運だ。まだ生きているだろう。

「それでは」

彼女は消えた。さっきまでの殺気はもうなくなった。

俺は安心したのか、膝が急に笑い始めた。

「やべえな」

恐怖とかそういうもんじゃない。きっとこれは武者震いだろう。
次に会ったら、戦ってみたい。そう思ってしまったのだ。
俺は家に直行し、すぐに寝た。

第十話

俺は朝、早めに起き、歩の家へ向かった。
昨日の夜の出来事をみんなに話した。

「お前、よく生きていたな」

「ああ、今でも不思議に思ってるぞ」

「それで、連続殺人の犯人は女性なのですね？」

「確かに声は女性だった」

犯人の特徴を教えると、今度は歩がユーのことについて話してくれた。

デパートの屋上でのこと、昨日俺が帰った後のことだ。

まずユーの能力は、ユーの言葉を聞いた人間は無差別にその言葉の通りになってしまうこと。

そして、彼女はメガロ側の人間、つまりメガロは冥界で作られているということだ。

「なるほどな……」

ユーの正体を知り、うなずく俺。

『嫌いになった？』

「んなわけないだろ。お前は俺の友達だ」

ユーはこれ以上何も書かなかった。

「とりあえず、そろそろ学校に行こう。ないうちに」

時計を見たが、まだ六時にもなっていない。

「俺もついでに行くか」

俺と歩は立ち上がり学校へ行こうとするが、ユーが新たに何かを書いてテーブルを叩いた。

『今日はここにいろ』

命令形だった。学校をサボるわけにはいけないので無理だと言った。

学校ではのんびりと授業を受け、何もイベントは起きないまま放課後まで過ぎていった。

途中、織戸と歩から京子の見舞いに誘われたので一緒に行くことにした。

「悪いな、今日は用事があるから先に帰っててくれ」

「なら、私も一緒にいます！」

「いや、その用事は夜までかかるし……最近殺人事件もあるし、お前は家に帰ってろよ」

「殺人事件？ そんなの、最近起きていませんよ」

「え？」

俺は瀬奈の言葉に耳を疑った。

——どういうことだ？

最初は疑ったが、時間もないので後で考えようと思い、瀬奈を強引に帰らせた。

病院まで到着し、京子の部屋まで行く。京子は歩が来たことを喜んでいた。

「あ、相川さん、これ……」

京子は歩に何故か豆腐を渡してきた。

——そういえば、登校中に歩が言っていたなあ。ハルナのアーティファクトが京豆腐だと……。

そんなことも思ったが、俺はもう一つのことを疑問に思った。

——似ている。

昨日の夜、俺に話しかけてきた女に……。

ここで言ってもきつと頭がおかしいと思われるので明日にでも聞いておこうと思った。

「どうかしたんですか？　もしかして熱でもあるんじゃない」

京子は俺の額に触り、熱を測ろうとするが、ないことがわかりすつと手を戻した。

「そろそろ帰るわ」

歩が呟き立ち上がる。俺も歩に続く。

「あ、じゃあお見送りします」

京子がそう言い、ベッドから降りた。

織戸はトイレへ行き、先に退室する。三人で病院の入り口まで向かう。

京子は俺達が見えなくなるまで手を振っていくつもりなのか、ずつと俺達のことを見ている。

歩は大先生とかいうやつに電話をする。

隣にいても聞こえなかったので、電話を切った後に聞いてみた。

なんでも、手に持っている京豆腐を九時に墓場まで持っていくという内容だった。

今日は歩の家で泊まることにした。ユーに言われたのでここにいることにした。

『変わったことは？』

特になかったので、二人で首を横に振る。

その後、何も言わずにテレビに目を戻した。

みんなが居間に集まると歩は九時に墓場で大先生に会いに行くと伝えると、みんなに言った。

「俺も行つていいか？ 大先生っていう人に会ってみたいし」

「別にかまわないけど」

俺は歩と一緒に墓場まで向かった。

墓場まで着くと、卒塔婆の陰に人がいた。

「大先生ですよね？」

歩が陰にいる人に言った。

だが、その人は返事をせず、歩に向かって刃物で突き刺した。

「なっ！」

「こんばんは。相川さん、藤島さん」

につこりとほほ笑み、俺は歩を掴み彼女から離れた。

「あなたは何回殺せば、死ぬのですか？」

見たことのある木刀と剣を両手に持ち、目を細める。

あれは、ある人の病室にあったものと同じものだった。

そして、彼女の正体は——京子だった。

「やっぱり、あの連続殺人事件の犯人はお前だったのか、京子！」

俺は竹刀を構え、歩はなんとか立ち上がり、京子を睨みつけた。

「俺を殺したのは、お前だったのかよ！」

第十一話

「ノモブヨ、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ」

どこかで聞き覚えのある呪文だ。

唱え終わると、京子の服装がコスプレ衣装に変わった。

あれは、魔装少女の服装ではないか。

ここで俺は、瀬奈の言っていたことを思い出した。

『殺人事件？ そんなの、最近起きていませんよ』

京子は記憶操作で事件のことを誰も知らないようにさせたんだ。なぜ、俺が記憶を操作されなかったのかは今は置いて。

「歩、お前、動けないのか？」

「どうやら、そうらしい。なんでお前は動けるんだ？」

「俺だってわかんねえよ」

さっきから動けない歩を掴み、京子から逃げようとするが、やっぱり魔装少女は速い。

一瞬で俺の前まで来たのだ。

「どうしてあなただけ、結界が効かないのですか？」

「さあなっ！」

刀を振るい、京子に攻撃するが防がれてしまう。

その瞬間、俺は歩を遠くまで蹴り飛ばした。蹴り飛ばした先は、いつの間にか来ていたハルナのもとへ。

京子は空いているもう一方の木刀で俺の横っ腹を殴る。

ギリギリ、木刀の軌道に合わせてバックしダメージを軽減したが、歩の元まで吹っ飛ばされた。

――骨は折れていないが、ダメージはかなりくらってしまった。

「しっかりしろ！ 春樹！」

どうやら歩は動けるようになったらしい。ハルナが結界を解いてくれたのだろう。

「で、アユム。こいつ誰？」

「俺を殺した魔装少女様だ」

「アユムの敵？ …… だったら、あたしの敵だな」

今度はハルナと歩が京子に立ちふさがった。

「へえ。ミストルティンはどうしました？ 素手で戦うつもりですか？」

京子は俺達の間合いを詰めようとするが、歩が俺とハルナを掴みその場からと跳んだ。

「逃がしません」

のんびりとした声で俺達を追い、木刀で薙ぎ払おうとする。

「なめるなよ！」

俺は掴まれたまま刀で防御したが、やっぱり打ち勝てないので地面まで飛ばされるが、歩が着地し俺とハルナの負担を減らしてくれた。

「まだ動けるのですか？ それなら、一気に殺してしましましょう」

京子は剣を上に掲げ、剣の先には巨大な火の球が現れた。
火の球は、俺達に向かって飛んできた。

今動けるのは俺だけ、ハルナは気絶しているし、歩は着地に失敗したのか、うまく立てないでいる。

——ああ、もうっ！ くそっ！

歩とハルナを持ち、火の球が当たらない所まで飛ばした。

「春樹！」

歩の叫ぶ声が聞こえる。ああ、なんでこうなるんだか。
ここで俺は死ぬのだろう……。

後悔はしていない。やるだけのことはやったんだ。

でも、できるならもう少し人生を楽しみたかったなあー。

火の球は俺の目の前まで飛び、爆発した。

「これで一人目ですね」

「春樹——！」

歩の叫び声が聞こえた。

——ってなんで聞こえるんだよ！ 俺、死んだんじゃないのか？

「あれ？」

なんで生きているんだ？

しかも、俺は何もダメージをくらっていない。

——どういうことだ？

京子を見ているが、彼女も驚愕していた。

「なんで……、生きているんですか。あなた、まさか人間なのに魔法抵抗力が高いのですか！」

何言ってんだ？ 魔法抵抗力？ なんだそれ？

「ごく稀に存在する魔法抵抗力。それは高度な魔法も効かないと、昔聞いたことがあります。まさか、あなたがそのような能力を持っていたとは」

後ろを振り向くと、セラが木の葉の剣とチェインソーを持ってやって来た。

「セラフィム、来たのか！」

「ヘルサイズ殿に言われて加勢に来ました。とにかく、あなたが生きていてよかった」

俺に向けて嬉しそうにほほ笑んだ。

セラは俺を掴み、歩の元まで向かう。今日の俺って、掴まれてばっかじゃないか？

ハルナも目を覚ましていた。

「歩、敵は人間——ですか」

「心配するな。あれは人間の皮を被ったバケモンだ」

歩がセラに言う。そういえば、吸血忍者って人間を殺せないんだっ
たな。

歩もつまいことを考えるなあ。

「あれ？ その目……私と同じじゃないですか」

おいおい、今度は目が赤くなったぞ。彼女は吸血忍者なのか？

「知りません。私とはまた、別の力を感じます」

確かに、セラとは雰囲気が少し違う。

そして、セラの言っていた別の力が現れた。

それはメガロがよく吹く紫色の風だった。

——今度はメガロの力かよ。

「では、いきますよ」

京子は竜巻を出してきた。まためんどくさいものを……。

「こうなったら、歩、とつとと変身しろ！」

「ぐっ！ やっぱり、しないとダメ？」

「いいから、しゃがれ！ みんな死ぬぞ！」

「ああーもう、分かったよ！」

俺は歩を説得させるのに成功した。

「ノモブヨ、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ」

歩が光だし、その中から出てきたのは、やっぱり変態だった。

「いつ見てもその姿は変態ですね」

「うん、変態だな」

「とつとと消えろ、このクソ虫」

「春樹のが一番傷つくわ！」

「相川さんにそんな趣味があるとは知りませんでした、変態！」

あ、相川が崩れた。なんとか立ち上がりセラと歩で京子に向かった。歩は竜巻をうまく避け、京子の前まで向かった。

チェーンソーと木刀でつばぜり合いになるが、歩はチェーンソーを捨て、京子に抱きついた。

そして、セラが歩ごと京子の心臓を刺す。

京子はそのまま崩れ落ちた。

「終わったようですね」

セラが俺に近づき、そのまま俺の胸に飛び込んだ。

「セラ！」

セラの後ろを見ると、背中に剣が刺さっていた。

「一回死んでしまいました——ですが、残念です」

そこには死んだはずの京子が立っていた。

第十一話（後書き）

少しオリジナル要素を入れてみました。
別に春樹はチートではありませんので。

第十二話

「セラフイム、大丈夫か！」

「ええ、一応大丈夫です」

セラの無事を確認してほつとする。

「おいおい、死んだはずなのになんで生きてるんだ？」

俺は京子に聞いてみる。

「私はゾンビではありませんが、あと十回ほど死ねますから」

「まさか、生体の宝珠！」

「なんだ、生体の宝珠って？」

歩が何かに気が付いたハルナに聞く。よく見ると、歩はすでに変身が解けている。

「生体の宝珠は死んだものを生き返らせるアーティファクトだ。生きているものに使うと一度だけ死を無効にしてくれる」

「なんだよそのRPGとかにありそうなヤツ」

思わずツツコンでしまった。

「なるほど……だから人間を殺しまくっていたのか。殺した人間を魔力に変えて宝珠を作ったのか」

「相川さんって意外と詳しいんですね。変態のくせに」

また歩が落ち込んだ。いいかげん慣れるよ。

「やっと来てくれましたか。お待ちしてましたよ」

京子が後ろにいる人を見ている。後ろを振り向いてみると、そこにはユーが立っていた。

やがて、俺の前に行き、そして歩の前まで行った。

京子は火の球をユーにぶつけてくるが、それを片手を払うだけで消してしまった。

——やっぱりユーって強いのか？

そんなことを思っていると、京子は次にユーの元へ向かい剣を縦に振った。

ユーはまた片手で防御するが、すぐに膝を崩してしまった。

京子は不思議がつており、ユーのプレートアーマーを蹴り飛ばした。

——あれ？ ユーって強いのか？

疑問に思ってしまった。

「……なるほど。その籠手は、藤島さんと同じように魔法を消し去る効果があるようですね。ですが、扱う人間が弱すぎます」

京子が呆れている。ユーのほうはハルナからチェインソーを奪い、誰にも聞こえないように何かを唱えていた。

——まさかユーまで変身するのかよ。

予想通り、ユーはプレートアーマーの内側に例のコスプレ衣装が着られており、魔装少女になった。

チェインソーを持ちながら、京子に突っ込んだ。

「……そうか、ハルナの魔力を奪ったのは俺じゃなくてユーだったのか！」

歩が謎が解けたようにユーのほうを見て言った。

ユーは魔装少女になっても京子の足もとには及ばず、また俺達のほうまで吹っ飛ばされた。

「ユー、俺も一緒に」

『逃げる邪魔』

ユーは地面に書き、俺達に見せた。

『せめて 動くな 絶対』

最後にそれを書き、また京子の元に向かった。
もしかしてユーは……。

歩はユーをほおっておけないのか、ユーの元まで行こうとするが、俺とセラが歩を止める。

「やめろ。お前が言っても邪魔になるだけだ」

「どうということなんだ？」

「春樹の言つとおりにしなさい。ヘルサイズ殿の力を忘れたのですか？」

「それがなんだって——」

やっと歩が俺とセラの言いたいことに気づく。

そう、ユーの能力は言葉を聞いた者は言葉通りになる。

つまり、ユーは京子にこう言っただろう。

死んで——と。

いきなりユーの場所が光りだした。きつと言葉を発したのだろう。

「あでっ！」

空からユーが降ってきて、俺の頭に直撃した。しかもプレートアーマーを付けていたのもものすごく痛い。

「大丈夫か！　おい！　ユー！」

歩が必死で呼びかける。脈はあるが、目は覚まさない。

「まだ死んでいませんよ……その人の魔力を手に入れるために、わざわざこの姿で戦ったのですから」

耳に血を流した京子が近づいてくる。

——こいつ、まさか耳を切ったのかよ。

京子は自分の心臓を刺し、また復活した。その時にの傷もなくなっていた。

「さあて、パーティーを続けましょう」

笑う京子にかなり腹が立ってきた。

みんなも怒りを表に出しており彼女に向けた。

「みんな、行くぞ！」

俺が叫び、みんなが京子に突っ込んだ。

歩とセラとハルナが先陣をきり、攻撃した。

しかし、三人は吹き飛ばされるが、俺の存在に気づき、攻撃を防御する。

京子は俺を押し返そうとするが、あえて俺はここで一步引き躲す。勢いがついたせいで前のめりになった瞬間に俺は京子の背後に回り込み、全力で斬る。

「藤島流——風車！」

京子は体制を崩しながら復活するが、俺は復活した瞬間にまた斬りつける。

「お前が復活する瞬間に切る！ さて、あと何回切れば死ぬんだ？」
「たかが人間なんかに……」

また斬りつける。そして、京子のコスチュームが消え、黒マントだけの姿になった。
どうやら魔力が切れたのだろう。

「あ……ああ……うああああ！」

京子は俺から逃げる。だが、今度は歩が京子の前に立ちふさがる。

「……ありがとう。お前に殺されたおかげで人生が変わったよ」

京子は悲鳴すら失い、ただ歩の言葉を聞いている。

「——だから、今度はお前の人生を変えてやる」

歩は全力のパンチを京子に放った。盛大に吹っ飛び、地面に着いた時には彼女はもう動かなくなっている。

「終わりましたね……」

セラが傷を抑えながら俺の元によって来る。

「大丈夫か？」

「いいえ、しばらく歩けそうにありません」

「しょうがないな」

俺は後ろを向いてしゃがんだ。

「おぶってやるよ」

「しかたないので……あなたの言葉に乗りましょう」

俺に体重を預ける。背中にかかる胸の圧力を感じながら立ち上がる。隣では歩がハルナをおぶっている。

俺達はユーの元に戻った。

「「ユー」」

「ヘルサイズ殿」

「おい、根暗マンサー」

ユーは俺達の声聞き、目をゆっくりと開ける。

「なあんだ、生きてんじゃん」

ハルナは残念そうにしていたが、アホ毛をピコピコ動いてたので本当は喜んでるのだろう。

『終わったの？』

「ええ、春樹と歩がやってくれましたよ」

セラが言うと、ユーは満足してくれたかのような表情に見えた。歩は京子を見たが、彼女はまだ逃げようとするので、最後のとどめの一撃を繰り出そうとしている。

歩は拳を振り上げ、京子に下ろそうとしたが、突然誰かが現れ歩の腕を掴む。

「おい、止めるなよ。こいつは生かしておく訳にはいか——」

歩は後ろを向いていたので気が付かなかったが、振り向くと声を失った。

「あなたがアユムさんですねえ？　ウチの生徒に何するんですー？」
「だ、大先生」

ハルナが動揺していた。
この女が大先生？

第十二話（後書き）

風車——相手の刀を押さえ、押し返そうとする相手の力を利用して
一歩引き、前のめりになった瞬間に背後に回り込み斬る技。

第十三話

歩は大先生につかまれた腕を振りほどこうとするが、彼女の力は強くてほだけそうもない。

「大先生、腕を離してくれ。京子はこの世界でやってはいけないことをしたんだ」

「んー、信じるにはあ、材料が少なすぎますねえ」

大先生は小さなポケットから日本刀らしきものを取り出し、歩を斬ろうとした。

「楽しいダンスだった」

突然京子から男の声をだし、歩と大先生を吹き飛ばした。

「そんな……なんで……」

声を出したのはユーだった。俺はユーを見ると、その声に怯えている。

「元気そうで何よりだ、ユークリウッド。まだ何もするつもりはないから安心してくれ。」

京子は霧に包まれ、この場から立ち去ろうとする。

「では、皆さん。また会いましょう」

「どうやら、歩さんが正解のようですね。逃がしませんよあー!」

大先生は京子を追って消えた。歩も追いかけようとするが、ユーに抱きつかれて、動けなくなった。

ユーは震えてる。きつと、追いかけるとマズいのだろう。

「ユー、さっきのアイツは誰なんだ？」

俺が質問すると、ユーはしゃがんで文字を書く。

『あれは あの霧は 私が消滅させたはずの――』

『ゾンビの力』

あの日から数日が経った。

大先生は俺たちの話を信用してくれて、今では京子を捕まえるために搜索を続けている。

これで、誰にも知られぬまま連続殺人事件が終了したわけだ。そして今、俺と瀬奈は歩に呼ばれ一緒に来ていた。

「「おじゃましーす」」

早速居間まで行くと、テーブルの上にはなぜか石鹼が山積みされていた。

「来てくれて助かった。実は、プリンを作りたくてだな」

「ああー、だからコレを買ってきてくれて言ったのか」

袋の中身を見る。中には卵や牛乳など。俺には何を作るのか分からないので、歩の言うとおりにしていた。

「セラさん。こんにちは」

「ええ、こんにちは」

セラと瀬奈は友達のように接している。

「瀬奈もセラフィムも仲がいいな」

俺は素直に感想を言った。

「春樹、今まで気にしていましたが、あなたは どうして『セラフィム』と呼ぶのですか」

「え？ だって『瀬奈』と『セラ』って呼び方が似てるじゃん。だからお前のことをセラフィムって呼ぶんだよ」

「そ、そういうことだったのですか」

セラがほっと息を吐く。どういうことだろう？

「ほら、アユム！ さっさとじゃんじゃんバリバリ作るぞ！」

ハルナが急かしてくる。どんだけ作るつもりなんだよ……。

「では、私が牛乳を唐津焼に——」

は？ 唐津焼？ 牛乳で陶器でも作るつもりかよ！

「よし、セラ。お前は風呂でも沸かしてこい」

セラは歩の言葉にすね始めた。

「なあ、セラってもしかして……」

「ああ、ものすごく料理が下手くそだ。以前、俺が食べたとき、死にかけた。お前に『助けて』ってメール送っただろ」

ああ、あの時のメールはそういうことだったのか。

「ま、みんながいれば、さすがのセラフィムも変なものを入れないだろうし、一緒に作ってもいいんじゃないか？」

「お前が言うなら別にいいが」

セラはパツと表情が変わり、俺の両手を掴んできた。

「ありがとうございます！」

「お、おう」

「むっ」

少し照れくさくなり、瀬奈のほうに顔を向けるが、何故か彼女はムスツとしていた。

『歩——プリンを』

「ユー、プリン作れるのか？」

『まず 牛乳を唐津焼に』

「よし、お前は食器係な」

ユーの危ない行動を歩がなんとか止めてくれた。

——ユーも料理が苦手なのか。

「どうやるんだ？」

中身が入っているボールを前に、いきなりつまづいてしまった。
率直に言おう。俺も料理が苦手だ。

セラよりはひどくないと自信はあるが、それでもプリンを作れるほどの技術なんてものはない。

「まずは、泡立たないように回すんですよ」

瀬奈が見本を見せてくれる。言われたとおりにしてやってみるが、力加減が難しい。

「こつやるんですよ」

瀬奈は俺の後ろに立ち、俺の手と一緒に泡だて器を持ち、かき回してくれる。

背中に瀬奈の豊満な胸が当たり、正直うまく回せない。

「あ、セラさん。何入れようとしてるんですか！」

セラを注意しに、俺から離れる。ひとまずホツとする俺。
順序はすでにオープンで焼く過程までいき、ようやく終わったと一息つきにテーブルへ向かう。

ユーも座っており、のんびりとしていた。
歩も休みに来たのか、ユーの隣に座った。

「なぜ、ユー。お前はこの生活をどう思ってるんだ？」
『嫌いじゃない』

ユーもなんだかんだでこの生活を気に入っているらしい。
それを聞けて安心している歩。

しばらくすると、オーブンが焼き終わった音を出した――さてと、プリンが焼けたんか。
俺はプリンが出来上がっているのを見に行った。

第十三話（後書き）

やっと一巻分が終わりました！

このまま二巻分も毎日投稿していけたらいいです。

第十四話（前書き）

2巻目がようやく始まりました。

第十四話

七月からは夏休みだ。

だが、それを楽しむためには期末テストで赤点を取らないようにしなければならぬ。

俺の成績は、はつきり言つてヤバい。下の上といったところだろう。赤点なんて、中間テストとかでよくとっている。

なんとしても赤点をなくして、夏休みをエンジョイしたい。

「……というわけで、教えて下さい。瀬奈様」

「別にいいですよ」

さすがは優等生。お前がいなかったら夏休みはずっと学校へ行つていただろう。

「よし！ 早速帰つて一緒に勉強しよう」

俺は瀬奈の手を引いて一緒に帰った。

帰り際に教室の人からは「リア充、死ね」だの不快な言葉が飛び交うが、そんなのを気にしていたら時間の無駄だ。

勉強会は俺の家で行われた。

俺は明日の教科を教えてもらい、出そうなところを丸暗記した。

「春樹君、やればできるじゃないですか」

瀬奈が褒める。どうやら俺は、やればできるほうらしい。

そんなことをずっとやっている、既に夜の九時を過ぎていた。

「瀬奈、そろそろ帰ったほうがいいんじゃないか？」

「そうですね。親もそろそろ心配しますし……」

瀬奈は名残惜しそうに言った。

俺だってそうさ。できるならこのテスト期間は俺に勉強を教えてほしい。

瀬奈を送り、家まで帰ろうとすると、ふと、あることを思い出した。
——そういえば、ハルナって天才だったんだよな。

俺は歩にメールをして、急いで家まで戻った。勉強道具を持ち、歩の家に直行した。

「よう、勉強を教えてくれ！」

チャイムもせず、居間に入ると、そこには勉強を黙々やっている歩と、偉そうに立っているハルナ。歩の隣で勉強を見ているユーに、テレビを小音量で見ているセラがいた。

「よう、来たか」

歩は手を止め、こちらを見る。

「なんだ？ 刀のも天才美少女ハルナちゃんの授業を受けに来たのか？」

「ああ、頼みます。教えてください天才美少女ハルナちゃん」

もう、なりふり構ってられない。赤点を避けるためならこんなこ

とだって耐えてやる。

「しゃーなしだな。早く座って聞けよな！」

ハルナ先生の指示に従い、勉強を開始した。

歩に聞いたところ、最初は訳の分からないことを言っていたが、ユーのおかげでまともになったらしい。

「セラフイム、お前地理とかは得意か？」

「ええ、数学とかはダメですが、古文と地理くらいなら」

「だったら、明日教えてくれ。明日も今日と同じ時間に来るから」

「？ どうしてもっと早く来ないのでですか？ 早くてもかまいませんが」

「それまでは瀬奈に教えてもらうんだ。あいつも教えるのがうまいけど、時間があるからな」

「……わかりました。明日、教えましょう」

「サンキュー！ 助かったぞ、セラフイム！」

お礼を言つと、顔が赤くなるセラ。そんなに恥ずかしくなるようなことを言つたつけ？

とりあえず、今日はハルナ先生の授業を受けることにした。

——ヤバイ、完璧だ。

テスト当日、数学のテストは絶好調だった。

まだ二十分も余裕があり、見直しも大丈夫だった。

これも瀬奈とハルナ先生のおかげだな。

歩の家では意外にも、瀬奈とハルナが言ったテストに出そうなどころが偶然一致して、同じところをやったくらいだったので、充実し

た勉強だった。

残りのテストも、順調に進んだ。

「帰ろうぜ、瀬奈。今日も教えてくれるか？」

「はい、私は大歓迎ですよ」

さすがは瀬奈。寛大でいらっしやる。

靴箱まで向かうと、そこになぜか人だかりができていた。

「セラフイム？」

「春樹と瀬奈ですか。歩の教室はどこですか？」

「ああ、それなら俺と同じクラスだ。案内しようか？」

「ええ、お願いします」

俺と瀬奈は、教室に戻ることにした。

廊下を歩いていると、ものすごい視線がセラに集まっている。俺には殺意のこもった視線が集まってくる。

セラはそれでも凜としており、俺の後をついてくる。

歩の元まで案内すると、織戸が興奮してこちらにやって来た。

セラは織戸をゴミ虫を見るような目で見た後、歩の元へ向かった。

どうやら、ハルナから弁当を預かって来たらしい。

結局、歩とセラ、俺、瀬奈の四人で帰ることになった。

歩はゾンビなので日差しに弱く、セラに引きずられて帰る。

瀬奈は歩を心配そうに見ている。

「気にするな。歩はDMなんだ」

「えっ、そうだったんですか？」

「ちげえよ……。俺は太陽に弱いんだ」

引きずられたまま、弱弱しい声でツツコむ。

そのまま歩達と別れて、俺の家に着くと、早速瀬奈と勉強を開始し

た。

二日目は国語と地理なので、そこを教えてもらった。

黙々と勉強をしている中、突然チャイムが鳴りだした。

「はい」

俺は扉を開けると、そこにはセラがいた。

「どうしたんだ？」

「勉強を教えに来ました」

「え？ だって勉強は九時からじゃ」

「それだと短すぎますので、私が早めに来ました」

別にいいかと思い、セラを家にいれた。

「こんばんは、セラさん」

「瀬奈も元気そうで」

なんだろう、セラが来て空気がガラリと変わった。

「瀬奈。あなたはもう帰っていいですよ。親が心配するでしょう」

「大丈夫ですよ。今日は泊まるって言っておきましたので」

「あれ？ そうだっけ？」

「はい、言ってますでしたか？」

言っていない。そう断言できる。

だが、二人の先生に教えてもらえるのは結構いいかもしれない。

教えは二人ともうまかったので、かなり身に付いただろう。
明日のテストも楽しみだ。

第十五話

二日目、三日目と順調にテストは終わり、最終日もなんとか終わった。

瀬奈とセラがつきつきりで教えてくれたおかげだ。

テスト期間はほとんど寝ていなかったなので、とっとと帰って寝ようと思った。

今、俺は一人で帰っている。家に向かっている途中、セラが屋根の上を跳んでいるのが見えた。

「おい、セラフイムー！」

俺の声に気づき、跳ぶのをやめてこちらに来た。

「春樹、実は歩とハルナがメガロと戦っているので加勢しに来たんです。あなたも来ますか？」

「ええー、別にいいよ。早く寝たいし」

「そうですか……来ないのですか……」

そんなさびしそうな顔をするなよ。俺が悪者みたいじゃなか。

「しょうがない。何処に行けばいいんだ？」

「この近くの住宅街の裏です」

なんだ、意外と近いじゃん。

「春樹、武器はどうしたんですか？」

「京子の戦いでスピアもなくなったから、俺戦えないぞ」

「心配しないでください。いざとなったら私があなたを守ります」

頼もしい言葉を聞きながら、目的地まで着いたが、既に戦闘は終了していた。

歩とハルナだけでなく、もう一人誰かがいた。

そいつは、何故かとんこつラーメンを持っており、とんこつスープがあちこちに散らばっていた。

「セラフィム！ ひっさしぶりだなー。元気にしてたか？」

そいつはセラの元にやってきて、馴れ馴れしそうに背中をバシバシ叩いた。

セラは無言でそいつの足を払い、腕を固めた。

「近寄らないでください」

セラは厳しい言動でそいつに言った。

近くで見ると、よく見たら俺達と同じくらいの少女だった。

「歩、大丈夫か？」

「春樹まで来たのか。俺もハルナも大丈夫だ」

変態の服装のまま、俺に近づいてくるので少し離れた。

「で、コイツは誰なんだ？」

「名はメール・シュトローム。吸血忍者ですが、私とは敵対している派閥の人間ですよ」

俺の問いに簡潔で答えてくれるセラ。

——ってなんだよ、メールシュトロームって。RPGに出てくる技名じゃん！

そんなツツコみは置いて、その派閥というのは、吸血忍者の頭領をユーの力で蘇らせるための派らしい。

どうやらセラの所属している派閥が保守派。メールとかいう少女が革新派だという。

「アユム、メガロも倒したんだし……そろそろ帰ろ——」

「おい、大丈夫か？」

「触るな！」

歩の手助けに反発するメール。そりゃそうだろ、こんな服装だしな。俺の隣でハルナが歩に話しかけるが無視されてしまう。

「お前、どこ中だよっ！」

歩の胸倉を掴むメール。歩も負けずに言い返してきた。

「俺は高校生だ。お前こそどこ中だよ！」

「馬鹿にすんなっ！俺だって高校生だっつーの！」

そんなくだらない口げんかをしている中、ハルナが無視されたことにキレて、歩に近づいた。

「アユムのバカっ！あたしを無視するなよな！」

歩の背中を押し倒す。そのせいで、メールも巻き込まれてしまい歩に押し倒される形になった。

「ぶーーーーっ！」

思わず嘖いてしまった。なぜなら、歩とメールが

キスをしてしまったからだ。

固まっている歩を、ハルナが蹴り飛ばし、俺が蹴り上げ、セラがかかと落として地面に沈めた。

今、俺達はうんこつスूपでメガロを倒す対策を教えてもらうために、メールに秘密基地を案内させてもらっている。ちなみに、ハルナは歩の衝撃シーンを見てから、逃げるようにしてどっか行った。どうしてうんこつスूपがメガロに効くのだろうか。かなり気になる。

廃ビルに到着し、中に入るとそこには十人程度の吸血忍者がいた。少し歩くと、大きな機械が目に入った。どうやらこれは、うんこつスूपを降らせるための装置らしい。

「くだらないですね。ではこれで失礼します」

セラはここに居るのがあまりよくないようで、とつと帰りたいらしい。

ここは敵対している派閥の基地だし、帰りたい気持ちもわかる。

「セラフイム。なんだか、この装置をぶっ壊すって言っている奴がいるんだが、知ってるか？」

「知りません」

「ほんとに？」

「はい」

メールは、これ以上追及はせず、よかったと笑った。

「最後に、セラフィム、こっち派に来ないか？」

「嫌です。失礼します」

セラは先に外へ出て行った。

俺と歩もセラを追い、家に帰ることにした。

帰り道セラは不機嫌な様子で、早足で俺達の前を歩いている。

「あの装置って、大丈夫なのか？」

今まで無言でいたので、何か話そうと思い、セラに聞いてみた。

「ええ、それなら私の上司が対処してくれるでしょう」

「ふーん。それならいいんだけど」

「いいえ、メールのことで問題があります」

メールと言われて、即座に歩を見た。きっと、あの時のキスのことだろう。

吸血忍者のキスは、婚儀の際に行うものだという。だから、あの時点で婚儀は終了したらしい。

しかも、吸血忍者は自分の感情よりも掟を優先してしまうほどのものだという。

「あなたはメールを愛しているのですか？」

「いや、別に——」

「でしたら、どんなことをしても避けるべきだった」

また無言で歩く俺達。

「それじゃあ、俺が今ここでセラにキスしたら、俺と結婚するの？」

「ええ、愛すると誓います」

俺の目を見て真剣に言う。

セラは顔が赤くなり、また背を向けた。たぶん、俺も顔が赤くなっているだろう。

「まあ、できればの話ですが」

セラは前を向きながら、俺に言った。

第十六話

七月七日、今日は七夕だ。

一人暮らしの俺にとつてはどうでもいい日だが、今日は歩に七夕をやるう誘われて家に行くことになった。

家に着くと、何故か外に笹が置いてあった。

「来たぞー」

居間まで行くと、何故かみんながポニーテールにしながら短冊を書いていた。

「お前ら、何の真似だ？」

「いいから、刀のもやれよな！」

ハルナから強引にゴムを渡される。

だから歩は俺を誘ったのか。後でシメる。

みんなが俺のほうに視線を向ける。まさか、やらなくちゃいけないのか？

みんな、うんと頷いた。

「しょうがない」

髪は短いので、歩みたいに小さくしか結えない。

「んで、お前らは何をお願いしたんだ？」

テーブルの上に置いてある短冊を見ると、そこには奇妙なものが書かれていた。

『福神漬けの海に入りたい ユー』

『この世の気持ち悪いものが根絶されますように（ゾンビ等々）セラ』

『地球がゆで卵になりますように ハルナ』

ツッコみたいが、なんとか堪えた。

「勝手に見んなよなっ！」

ハルナに短冊を取り上げられてしまった。
しょうがない、俺も何か願い事を書くかな。

『ゾンビが滅亡しますように 春樹』

「お前、絶対にふざけてるだろ！」

「春樹、いい願い事ですね」

「セラまでひどくないすか」

ギャグはもうやめといて、まじめに書いておこう。

『何事もない、平和な生活 春樹』

これが一番無難だろう。

ハルナ達に見られないようにしながら、笹に短冊をつるした。

この後、ハルナが訳の分からない儀式を行い、それなりに楽しい七夕を過ごせた。

七月十日、いよいよテストが返ってくる。

一時限目が始まる前、顔の知らない女性が俺を訪ねてきた。

「藤島 春樹だな」

「そうだけど」

「話は聞いているな。これが例のモノだ。相川 歩という者に渡し
てくれ」

「はあ……」

彼女は俺にメガネケースを差し出してきた。

それをどうして歩に渡すのかはよくわからないが、とりあえず渡せばいいのだろう。

名前を聞こうとしたが、彼女の携帯電話が鳴り、聞ける状況じゃなくなつた。

「私だ。そうか——それがどうした？ ……そんなことくらい自分で判断しろ！ 痴れ者がっ！」

携帯を片手に、どこかへ行ってしまった。
それにしても……このメガネはなんだ？
なんとなく黒縁のメガネをかけてみる。

「春樹君、おはようございます」

「ああ、おは——ぶっ！」

瀬奈にあいさつをしようと彼女を見たが、なんと下着姿だったのだ。
慌ててメガネを取り外すと、瀬奈はちゃんと制服を着たままだ。

——エロメガネかよっ！

心の中でツツコみを入れた後、数秒考えてからもう一度メガネをかけてみた。

俺だって男なんだ。女性の体も気にはなる。

「?」

瀬奈は俺の様子に首をかしげている。

瀬奈の体は、何もしみや傷などのないきれいな肌だった。

そして、上下とも下着が黒だったのだ。彼女の大きな胸が強調されるような感じのブラだ。

——こいつ、意外とエロいのか?

これ以上はマズイと思ったのでメガネをはずす。

瀬奈は俺を不思議そうに見ている。

「春樹君、大丈夫ですか?」

俺の額に手を伸ばす瀬奈。俺はさっきの光景を思い出してしまい、瀬奈から離れた。

「い、いや……大丈夫だから……心配すんな……」

瀬奈は安心したのか、自分の席に戻った。

はあ……と、ため息が漏れる。

——今のうちに渡しておくか……。

あのエロメガネはちよつと名残惜しかったが、歩にこのことを簡潔に教えて渡した。

放課後になり、もう夕日が沈みかけている頃だ。
今日は瀬奈に誘われたので、一緒に帰ることにした。

「今日は、夕食食べに来ますよね」

「あ、ああ」

「今日は私も作りますから期待しててください」

「そ、そうだな」

今日の俺は、瀬奈を見ると朝のことを思い出してしまい、つい言葉が濁ってしまう。

だが、もう一つ驚いたことがあった。

吸血忍者のメールがこの生徒だったらしい。

なんでも、高校では吉田 友紀という名前で通っており、織戸からはトモノリと呼ばれているそうだ。そのせいで、歩もトモノリと呼ばれるようになってしまったとか……。

突然、携帯が鳴りだした。歩からだ。

内容は、ゲーセンに来ないか？ だった。

ここからゲームセンターは近い。朝の煩惱を払うにはいいかもしれない。

「瀬奈、一緒にゲーセン行かないか？」

「別にいいですよ」

進路をゲーセンに変更した。

第十七話

ゲームセンターを少し回っていると、ようやく歩を見つけることができた。

「春樹、俺と勝負しろ！」

エアホッケーで勝負をしたいらしい。

「なんでいきなり」

「歩は私やハルナに負けたからですよ」

「ああ、なるほど」

セラが教えてくれて理解した。

ようするに、歩はせめて一勝したかったのだろう。

「別にいいぞ」

台の端に立ち、勝負を開始した。

訳の分からない必殺技を言いながらホッケーを打ってくるが、そんなものは俺には効かない。

俺は、一度も点を取られずストレート勝ちだった。

歩がもう一度勝負と言うが、もう一度やってやっても結果は変わらずストレート勝ちだ。

「残念だったな。頭の中が」

「ぐはっ！」

二連敗して、とうとう崩れ落ちた。

「せっかく来たんだ。瀬奈も一緒に遊ぼうぜ」
「はい！」

みんなそれぞれUFOキャッチャーや、アーケードゲームなどを楽しんだ。

「春樹君、一緒にあれを撮りませんか？」

瀬奈はプリクラの場所を指さしながら言った。

「別にいいぞ」

了承すると瀬奈は喜び、俺の手を引っ張り中に入ることになった。写真を撮る瞬間にセラが現れ、三人で撮ることになった。

「どうしたんだ？」

「いえ、あなた達が入っていくのを見たので。ダメでしたか？」

「俺はいいけど、瀬奈は？」

「私も別にいいですよ」

瀬奈は嫌な顔一つせず、三人でプリクラを撮った。

「いやー、楽しかったなー」
「そうですね」

みんなでゲームセンターを出る。俺は軽く伸びをする。辺りを見てみると、突然メガロが現れた。

白色のウサギで、お馴染みの学ランを着ていた。

「うさげっ！ 魔装少女！」

メガロは攻撃をしてこない。攻撃しようと構えている歩を見てただ叫んでいるだけだ。

「春樹君、あれは何ですか？」

「心配するな。ただの着ぐるみだ」

今は瀬奈がいるので、俺は早く帰らそうと思い、セラに近づいた。

「セラフィム、とりあえず瀬奈を家に帰してからまた来るから」

「わかりました。ですが、これならその必要はないと思いますが」
「一応、念のためだ」

セラ達とひとまず別れて、俺は瀬奈を家まで送った。

瀬奈の家まで着き、また歩の所まで戻ろうとした。

「悪い、一度家に帰ってからまた来るわ」

家に帰ると嘘をつき、急いでみんなの所に向かった。

幸い、近くの公園で歩達と出会った。

会ったのはよかったが、歩達の前にいるのは京子だった。

「歩、無事か？」

「俺は大丈夫だ。だが……」

歩はしゃがみながらトモノリ——今はメールか——を見た。
何かによって衣服を引き裂かれている。

「お久しぶりですね、春樹さん」

「俺はお前に会いたくなかったがな」

またしてもこいつに会うとは……、俺もついてないな。

「道端でいろんなメガロが吸血忍者らと戦っていたが、あのメガロはお前のせいなのか？」

「春樹、あれはメガロじゃない。メガロの偽物だ……」

そんなのはどうでもいいが、歩の様子が少しおかしい。

みんなを見ると、みんなが身震いをしている。そんなに寒かったか？

——……いや、違う！ これはあいつらの魔法か！

道路や建物が凍り始めている。これも京子の仕業か？

「やっぱり持つてるじゃないですか——アリエル先生の魔装兵器をつ！」

京子が驚きの声を上げた。彼女の足元も凍り始めたのだ。

——おいおい、その兵器つていうのは無差別攻撃なのかよ。

俺は魔法抵抗が普通よりズバ抜けて高いらしく、寒さも感じないし、足元も凍らない。

だが、みんながヤバイ状況になってきている。

セラはどこかの屋根にに跳んだが、歩は完全に足が凍ってしまっている。

「ハルナ、お前だけでも」

「何言つてんだ！ アユムも早く逃げろ！」

「くそっ！ もう下半身まで凍っているぞ！」

歩とハルナは、既に胸のあたりまで凍り始めた。セラを見えるが、彼女の足まで凍っている。

「くっそー！」

俺にはどうすることもできない。なぜこうなっているのかさえわからない。

「逃げてっ！」

ユーの声が、みんなに響いた。

「あれ？」

気が付くと、俺は瀬奈の家の玄関にいた。

———どうしたことだ？

俺の声が聞こえたのか、瀬奈が玄関までやって来た。

「あつ、春樹君。丁度夕食ができましたよ」

「えっ？」

そういえば、夕飯は瀬奈の家で食べさせてもらってたっけ。

「早く早く」

瀬奈に引つ張られ、そのまま夕食をご馳走になってしまった。

用事があると言って早めに家から出た俺は、急いで歩の家まで行った。

「みんな！ 無事か！」

「おわっ！」

急にやって来た俺にハルナがびつくりした。

「いきなり脅かすなよな、刀の」

「あ、ああ悪い」

どうやらみんな無事だったようだ。

『春樹 あなたは何処に飛ばされた？』

「実は——」

瀬奈の家に着いたことを話すと、ユーはまた新たに何かを書いた。

『やっぱりあなたは魔法抵抗が強すぎる だからあなただけ別の場所に移動した』

やっぱりあれはユーの仕業だったのか。

なにあとめあれみんなが無事で安心した。

もう、帰るのがめんどくさくなったので、ここで泊まることにした。

第十八話

次の日の夜中、俺が寝ているときに歩から電話がかかった。

「……………もしもし？」

『春樹、今から墓地へ行けるか？』

「……………別に、行けるけど……………」

『なんでも、大先生がお前に渡したいものがあるらしい』

「……………何時に向かえばいいんだ？」

『十二時くらい』

時計を見ると、十一時半だった。

一体何を渡すのだろうか？

「わかった、今すぐ向かう」

電話を切り、軽く身支度をした。

「だぁー！　くそっ、ついてねー！」

墓場に向かう途中、俺はメガロに追われている。

竹刀も、あれ以来壊れたままなので今は手ぶらだ。

曲がり角に曲ると、曲った先に誰かがいた。

「危ない！」

「え？　……………きゃっ！」

そのままぶつかり、その子を押し倒してしまった。

「いてて……、悪い、大丈夫か？」

その子の顔を見ると、そいつは京子だった。

周りを見てると変態姿の歩とハルナがいて、どうやらここで京子と対峙していたらしい。

さつきから右手に柔らかくて妙な感触を感じたので、もしかと思いおそろおそろ見てみると、俺は京子の胸を揉んでいたのだ。

京子は顔を赤くしており、今にも泣きだしそうだった。

「うおっ！　悪い！」

彼女から急いで離れ、歩達の元へ向かった。

京子は立ち上がり、俺を怒りの目で見ていた。

「春樹さん、あとで覚えていなさい」

京子は最後にそう言い、何かを持って去っていった。

「……えっと、何があったんだ？」

歩とハルナは笑い出した。

話によると、京子が大先生に渡す魔装兵器を奪ったが、その中身はエロ本だったらしく、そして俺と激突して現在に至ると……。そんな話をしながら、墓場に着いた。

大先生は俺達に気づき、こちらまで来てくれた。

歩はエロ本が京子に奪われたことを話したら、笑い出した。

「アユムさん。いやらしい本が兵器なんて、どう使うおつもりなん

ですかあゝ？ もう、アユムさんのエツチい」

「大先生から預かったものと違うんですか？」

「何処ですかゝ？ どこにも居ないじゃあないですかあ」

どうやら、歩の持ち物には魔装兵器はないらしい。

「もしかしてえ、偽メガ口の大量発生は京子の仕業ですかあ？」

「ええ、本人が言っていました。気づいていたんですか？」

「メガ口はあんなに弱っちくくないですものゝ。それにあの子は私の計画も知って――」

何かを言おうとしたが、咳払いでごまかす。

「あの子ならあ、私が魔装兵器を使うと考えそうですし、それを狙ってるならなつとくですうゝ」

歩達の話が全然わからない。ハルナもわかってなさそうで、二人に馬鹿にされて拗ねている。

「では、私はヴィリエに帰りますねえ。アユムさんもご苦労様でした」

「いあ、ちよつと待てえー！」

俺が大先生に向かって言う。

「あなたは確か、春樹さんでしたね。どうかしましたかあ？」

「どうかしたじゃなくて、あんたが俺を呼んだんだろ！ 何か渡すものがあるって」

「ああゝ、そういえば忘れてましたゝ」

そういつて、大先生は白衣のポケットから刀を取り出す。だが、大先生はなぜか手袋をつけて取り出したのだ。

「これをあなたに差し上げますう」

「はあ……」

刀を受け取る俺を見て、大先生は「やっぱり」と声を漏らした。

「その刀は『花影血桜』かえいちぎくと言いまして、呪いの刀なんですよう」

なんですようってこと言われても、俺の体は大丈夫なのか？

「それは所持者の魔力を死ぬまで奪う呪いの刀。ですが、あなたの能力ならその呪いに打ち勝つことができるでしょう」

「ふーん。なるほど」

刀を抜いて誰もいない場所に刀を振る。

すると、刀から衝撃波が発生し、墓石が割れた。

「……………」

言葉を失った。

「その刀に宿っている魔力は千年はもちますので、大丈夫ですよ」

「えーっと……ありがとうございます」

春樹は新たな武器を手に入れた。

俺は花影血桜を大事に持ちながら、家に帰った。

第十九話

刀をもらった次の日。

時刻は放課後になり、俺は歩と一緒に帰ってる。

「なんでお前が来るんだ？」

「いやー、この刀でもう一度セラフィムと戦ってみたいんだよねー」

「あの刀ならお前が勝てるんじゃないのか？」

「わかんねえぞ。セラフィムの力だってあんなものじゃないと思うけど」

俺は大先生からもらった妖刀——花影血桜を持っている。

誰とも戦うことができないので、夜にセラと勝負したかったのだ。

歩の家に着くと、玄関でハルナが電話の受話器を持ちながら唸っていた。

「何してんだ、お前？」

「あ、アユムに刀の！　いつからそこにっ！」

話を聞くと、ハルナが大先生に謝ろうかと、今まで考えていたらしい。

——あのハルナが謝罪をねえ……。

これには驚いた。いつもは自己中女のハルナが相手に謝ろうとしているのだ。

「だったら、ゲーセンにでも誘ってみたらどうだ？」

「うん！　それだっ！　大先生なら、絶対喜ぶな！」

そう言って、ハルナは大先生に電話を掛けた。

とりあえず、居間で待っていていようとユーと一緒にテレビを見ようとしたら、ユーがテーブルをトントンと叩いた。

『その刀 見せて』

「いや、それは不味いぞ。柄を掴むと魔力を吸い取られるらしいからな」

『私は籠手を着けてるから大丈夫』

どうやら、ユーの鎧や籠手は何か封印効果があるらしい。つてことは、この血桜よりも効果が上回るってことか？ユーに渡してみるが、何も変化はない。

『すごくいい刀』

「へえー、ユーもそう思うのか」

『これには膨大な魔力が入っている 今まで何人の人が死んだんだろっ』

「生々しいこと言っなよ！」

ユーがボケたぞ。しゃべってはいないが、なんだか新鮮味がある。その時、上から二人の声が聞こえた。かなり大声だ。二階へ行き歩の部屋まで行くと、歩とセラが喧嘩をしていた。

「おいおい、一体何があっただんだよ」

「春樹、このメガネを付けながら手紙を見てください」

セラに渡されたものは、なんとエロメガネだった。

手紙のほうを试着みるが、白紙だったので、メガネを付けて見ると文字が浮き上がって来た。

内容は、ユーの抹殺だった。

俺は無言でメガネを取り、セラを見た。

「お前は答えを見つけたのか？」

「はい。歩のおかげで吹っ切れました。私はこの任務を放棄します」
「お前なら絶対そう言うと思ったぜ」

俺は手紙を破り捨てる。

この任務を変更させるには、あの天候を操る装置を破壊すればいいらしい。

「お前と勝負したかったが、とりあえずそれを何とかしようぜ」

ハルナが出ていった後に、俺達三人はあのビルに向かった。

ビルの入り口に着くと、早速誰かが倒れていた。

中に入るとたくさんの吸血忍者が倒れていたが、全員何かで眠らさ
れているだけだった。

やっと例の機械の所まで向かうと、機械の前で倒れている吸血忍
者がいた。

よく見ると、あれはトモノリだった。

声を上げたかったが、殺気が背後から刺さって来たので叫べなかつ
た。

「誰かと思えば、セラフイムか。何しに来た？」

振り向くと、そいつは以前俺にエロメガネを渡してきた学生だった。

「その天候を操る装置を破壊しに」

「それは困る」

「なぜ？」

「人類吸血忍者化計画を円滑に進めるためには必要だからな」

「今、何と言いましたか？ まさかその馬鹿げた計画が我々の派閥から出たものだとは……」

「おいおい、私とやりあうつもりなのか？ 同じ保守派の吸血忍者だというのに」

二人の目が赤く染まる。

「歩、今は下がるぞ」

「ああ」

俺の言葉に従い、数メートルバックした。

「気の合う話は酒を交わしながら、気の合わない話は——剣を交わしながらっ！」

二人の剣がぶつかり合う。

何度か剣を重ねているが、セラのほうが劣勢だ。

「秘剣、燕返し！」

「秘剣、燕尾返し」

また剣が重なり合う。だが、女生徒の攻撃に敗れ、セラの胸元から血が出た。

「セラフィム、強くなったな——三撃も耐えられるとは思ってなかった」

歩には見えなかったかもしれないが、俺にはしっかりと見えた。

さっきの四回目の攻撃でセラは斬られたのが見えた。
俺はセラが戦闘不能になったので、セラの所まで向かった。

「春樹、あなたじゃ勝てません……。早く逃げて——」

「おいおい、俺がやられるとでも思ってるのか？」

セラに向かってニコリと笑う。セラは顔が赤くなりそっぱを向く。

「さて、次は俺の番だぜ」

「はん、たかが人間が私にかなうなど——」

まだ話途中に俺は花影血桜を抜き、ビルを少し斬った。
斬ったと言っても、それはかなりの威力で、外が見えるほどだった。

——まさか、これほどまでの威力とはな……。花影血桜。

女生徒は俺を驚愕の表情で見ている。

「貴様……。ただの人間じゃないな？」

「いいや、ただの人間だぜ。この刀はかなりの魔力が入っているらしいんで」

もう一度刀を振った。丁度いい重さだ。

「いいだろう、貴様の命もここまでだということをお願い知らせてやる！」

俺に向かって突っ込んできた。

第二十話

「貴様、なかなかやるな」

「吸血忍者つてのはみんな強いんだな」

剣が何度も重なり合う。

女生徒の攻撃は見えるので、攻撃を受け流すことは簡単だ。その瞬間に、彼女のスキを見つけて反撃した。

「見つけた！ 藤島流——畏綱^{いすな}！」

スキにめがけて素早い突きを繰り出した。

女生徒が下がったと同時に、刀から斬撃を出して相手を休めさせない。

「くっ！」

俺は彼女に突っ込み、斬りつけようとするが、彼女は背中から翼をだし、空中に避けた。

「おい、ずるいぞ！ 降りて戦え」

「ふん、貴様に勝てればそれでいいのだ」

空中から斬撃を飛ばしてくる。

俺も斬撃を飛ばし、攻撃を相殺する。

だが、最後の一撃も相殺させようと思ったが、体が疲れてしまったので血桜で防御した。

攻撃を受け止めると、片膝をついて休憩する。

——マズイ、俺の体力もそろそろ限界だ。

俺は人間なので、体力も吸血忍者より少ない。
なので、女生徒はまだまだ戦える状態だ。

「ふ、どうやらお前の体力もここまでだな」

「やっぱり分かったか？」

「安心しろ。掟により命は助けてやる」

剣を構える女生徒。俺は血桜を鞘に納め、目をつぶった。

「なんだ？ 春樹のやつ。勝負を諦めたのか？」

「あなたの目は節穴ですか？ あれは居合ですよ」

歩とセラの声が聞こえる。集中しているせいか、はっきりと聞こえた。

「ふん、居合とはな。さっさと終わらせてやる！」

こちらに向かって走る音が聞こえる。

——まだだ。もう少しだ。

音が消えた。きっと足音を消したのだろう。

——ここで慌てたら負ける。相手を感じ取るんだ！

かすかに風を切る音がした。

目を閉じながら攻撃を避け、俺は目を開きそこに刀を振った。

「藤島流——鏡心！」

渾身の一振りだ。だが、浅かった。

女生徒を斬ったと思ったが、彼女の姿が丸太になった。

——やられた、変わり身かよ！

背後から殺気を感じ、俺は急いで反転し、攻撃を防いだ。

「ぐあつ！」

が、力負けして壁に激突した。

——力が出ない。俺の負け……か。

女生徒は俺が戦闘不能になったのを見ると、剣を下した。

突然歩が俺の所に行こうと、物陰から飛び出すが、女生徒が剣を投げ歩の首に刺さった。

——こいつ……歩がゾンビじゃなかったら死んでたぞ……。掟破つてるじゃん。

「ん？　今ので死なないのか？　どういう仕組みか」

「とんこつスーブの雨を降らせるとか、人類吸血忍者化計画だとか、ユーを殺せとか、吸血忍者はどうしてそう、まとまりがないんだ？」

「そこまで思考すればわかることだろう。今、吸血忍者には絶対的な指導者、決定権を持つ者がいないからだ」

女生徒はそう言い、歩に何かを投げる。

歩はそれを直感で避けたのか知らないが、さっきまでいた場所は穴が開いていた。

女生徒が濡らした手で水滴を飛ばしたらしい。

「なるほど、だからユーに頭領を生き返らせてほしいとっ！」

歩が何かを投げる。狙った先は女生徒ではなく、あの機械の方だ。

爆音が鳴り響いた。どうやらあれは、爆弾のようだ。

だが、機械は破壊されず、隣の壁に穴が開いた。

女生徒があの一瞬間にはじいたらしい。

「残念だったな。この装置は壊させない。私が頂いていく」

女生徒の手に、何かが集まり、歩に放った。

「とくと味わえ——飛剣、百鬼漸殺」

歩の体に次々と水の剣が刺さっていく。

俺もやつと力を取り戻し、歩の元へ向かおうとするが、突如、どこからか声がした。

『最終詠唱を確認した。目標地点の重力を10Gに変更する』

その声と共に、歩の周りの水が地面に打ち付けられた。

誰がやったのか見渡してみると、それをやったのはトモノリだった。しかも、何か守護霊みたいのが憑いてるし……。

「スタンドかよ!」

思わずツツコンでしまった。

まあ、このくらい声を出せるならまだ大丈夫だろう。

トモノリに憑いているのは、右半身が人間、左半身が炎で出来ている二メートル近い男だ。

男は攻撃してくる女生徒を、いとも簡単に倒した。女生徒は壁に打ち付けられ気絶している。

それから男は訳の分からない呪文を唱え、あの装置を破壊した。

「友紀、お前どうしたんだ?」

歩がトモノリに聞いてみるが、返事はなく、返ってくるのは男の声だった。

『残存する敵の排除を開始』

——おいおい、俺達まで殺すつもりかよ。

「歩！ 何故戦わないのですか！ 彼女はこのような能力を持ち合わせていません」

あれはトモノリの能力とかじゃないのか？

——もしかして……あれが大先生の言っていた魔装兵器なのか？

あの時、大先生は魔装兵器が『居ない』と言っていた。

つまり、魔装兵器は人に憑いていたということになる。

今の男が魔装兵器ってこともありえる。

「しょうがない」

俺は男に向かって斬撃を放つ。

攻撃にぐらついて、トモノリから意識が戻った。

「あい……かわ。たす——」

また言葉が途切れ、意識を失った。

「凍てつく氷を解き放て」『第一詠唱を確認、術式解放』

また変な呪文を唱えた。

「其は神々の息吹さえも吹雪へと変えるだろう」『第二詠唱を確認、冷却準備完了』

「みんな！ ここから出るぞ！」

俺が叫ぶと同時に、

「駆け抜ける、アブソリュート・フェンリル」 『最終詠唱を確認した、氷結を開始する』

一瞬で部屋中が凍った。

この現象は、ゲーセンの時と一緒だ。

やっぱり、あの男は魔装兵器だったんだ。

どうすればいいのかと考えているときに、歩がトモノリの前まで行き、彼女を抱きしめた。

「やめてくれよ！ トモノリ！」

その瞬間、部屋の氷は解けて男は消え、トモノリは意識を取り戻した。

「と……トモノリ言うなーー！」

最後にそう言い、また意識を失った。

なんとか死の危機は免れ、今はみんな休んでいる。

女生徒とトモノリはまだ目を覚まさず、セラは輸血パックをチューチュー吸っている。

「血を吸わないと生きられないってのも、難儀なもんだな」

「私は吸血忍者になれたことを誇りに思ってますよ」

歩の問いに答えるセラに疑問を感じた。

「なれた？ 生まれたときからじゃないのか？」

「吸血忍者とは、ヘルサイズ殿から不老不死の力を与えられた者のことです。生まれた時からならば、ずっと赤子の姿じゃないですか」

「ごもつとも。」

「ってことは、あいつはユーの血を雨で降らせようとしたのか？」

「ええ、そういうことになりますね」

セラは息を切らしている。それほど血が足りないってことか。

「なんだつたら、俺の血を吸えばいい」

「あなたの血を吸うくらいなら死んだ方がマシです」

歩の親切心をバツサリ切るセラ。そんなに歩の血が嫌なのか？
そのとき、歩に携帯が鳴ったので少し俺達から離れた。

「どうした！ おい、ハルナ！」

一体何があつたんだ？ 歩は携帯を切って俺達の方を向いた。

「春樹、セラ達を頼む」

「ああ、分かった」

歩はビルから飛び降りて、ハルナ達の所へ向かった。
俺も疲れたので、セラの隣に座った。

「おい、大丈夫か」

「はあ、はあ、大丈夫です」

「お前……血が足りないんじゃない」

「輸血パックじゃあ、どうも力が出ません」

「だったら俺の血を吸えよ」

「なっ！」

セラの顔が赤くなる。別に恥ずかしいことでもないだろう。

「俺はお前に死んでほしくないんだ」 春樹は吸血にキスをする
ことを知りません。

「ですが……」 セラは第七話の時に吸血を見られたと思っています。
ます。

「いいから、早く吸えよ！ 心配すんな」 春樹は吸血に――以
下略。

「……わかりました。ですが、目を瞑って頂けないでしょうか？」

セラは第七話の時に――以下略。

「？ これでいいか？」 春樹は――以下略。

今は目を瞑っているので、何も見えない。

突然、俺の唇に柔らかな感触があった。

キスされていたのだ。

「っ！」

唇にセラの歯が刺さり、思考が回らなくなった。

血を吸われているのがわかるのに、何故か気持ちいい。

ハルナが血を吸われた時と同じだ。

吸うのが終わり、セラを見ると、さっきまでとは違って肌がツ
ヤツヤしている。

ただ、顔が真っ赤に染まっていた。

——あれ？

確か吸血忍者は接吻をすると結婚なんだよな？

……まさか……。

「これで私たちの婚儀は成立しました。あなたを愛すると誓います」
朱くしながらも、はつきり言った。

「ええ——————！」

天に向かって叫んだ。

第二十話（後書き）

畏綱——するとい突きを連続で放つ技。

鏡心——相手の攻撃を見切り、そこから反撃する神速の居合。

まさかの展開になっちゃいました。

第二十一話

翌日、俺はグラウンドの隅で体育の授業を見学していた。

「「はあ」「」

隣に座っていた歩とため息が重なった。

「歩、何かあったのか？」

「お前こそ、何があったんだ？」

しばらくの無言。丁度、みんなは体育に夢中なので昨日のことを言おうかと思っただが、歩から先に言いだした。

「実はな――」

どうやら、ゲーセンでは大先生が京子と謎の男にさらわれたらしい。しかも、その男はゾンビだということ。

二つ目に、トモノリに憑いていた男は大先生が彼女にいれたものだという事。

簡単に説明すると、それだけだ。

「で？ お前の方はどうしたんだ？」

「……実は……」

昨日のビルでの出来事を話すと、歩は驚愕の目で俺を見た。

「セラが顔を朱くしていた理由がわかったよ……」

「くそー、吸血方法がキスするなんて知らなかったぞ」

「お前、キスのことを橘には言ったのか？」

「言っわけないだろっ！」

そんなことを言ったら何が起きるかわかったもんじゃない。

「セラフイムと話がしたいから、今日お前の家に行くからな」
「はいはい」

もうその話はここで終了した。

俺は寝っころがり、空を見た。

放課後、瀬奈に今日は歩の家に用があると伝え先に帰らせた。
歩が活動できる夕方まで学校にいと、教室にユーが現れた。

「ユー、どうした？ 一人か？」

歩が尋ねると、ユーは首を縦に振ると、俺達にメモを見せる。

『ごめんなさい』

「何が？」

『私のせいで みんなが大変なことになった』

まだ気にしているらしい。

「心配すんな。俺はこの日常を楽しんでいるから」

俺はユーに本心でそう言う。

「相川ー一緒に帰ろうぜー」

トモノリがやってきて、ユーは歩の背中に隠れてしまう。

「お？　もしかしてユークリウッド？　ヤベー、初めて見た。思いつきり可愛いじゃん」

「怖がつてるだろ？　あまり近づくなよ」

「なんだよ。人を猛獣みたいに言いやがって」

歩がトモノリをユーから離れさせようとすると、また教室から別の声がした。

「アユムーっ！　ゲーセンいこーっ！」

今度はハルナだった。

——もしかして……次は……。

「ゲーセンいくのか？　オレあまりゲームは得意じゃないんだよな」
「全く、吸血忍者たる者、あらゆる技を身につけなければならない
ものですよ」

やっぱり来た。セラだ。

この場に俺がいるのを知らなかったようで、俺と顔を合わせると顔が真っ赤になり、俺から視線を外した。

「しょうがないな。またゲーセン行くか？」

「やったーっ！」

大喜びのハルナ。寂しそうな顔をしていたユーは――

『私は』

結局それだけ書いたが、行かないらしい。

「セラフイム、話があるんだが、いいか？」

「ええ……いいですよ」

ゲーセンに出発する前に、俺はセラを連れて屋上まで行った。

「なあ、掟は絶対なのか？」

「はい、吸血忍者は感情よりも掟を優先しますので」

「俺はセラフイムのことは好きだが、それは恋愛感情じゃない。大事な仲間だと思ってる」

「ですが……」

「だから……このことはナシにできないか？」

セラは無言で俺の話を聞く。

「優柔不断なのはわかってる。でも……だからといってお前の人生をそんな簡単に決めるなよ。お前だって俺のことを別好きじゃないだろ？」

「え？」

「ダメか？」

セラは呆れてため息をついている。

——あれ？ おかしなこと言っただけ？

「……わかりました。しばらく、このことは保留にしましょう」
「保留？」

「ええ、あなたがもし、私のことを好きになったら保留を解きまし

よう」

「お前はそれでいいのか？」

「はい。——それに……あなたは私があなたのことを好いてないと言ってますが、私は春樹のことは好きですよ」

セラはほ笑む顔はとても可愛かった。

俺は照れくさくなり、顔をそらす。

「ま、まあ、これからもよろしくな」

セラに右手を差し出す。

「はい、これからもよろしくお願いします」

セラも右手を出し、俺と握手した。

「それじゃあ、まずは……」

「ええ、そうですね……」

俺とセラは扉の方を見る。扉にはかすかに隙間が空いており、覗いているのは歩とハルナだった。

セラが高速で扉を斬り、俺は花影血桜を鞘に納めたまま姿が見えてしまった歩に思いつきり投げつけた。

歩の顔面に命中し、そのまま階段を転げ落ちた。

「覗き見とは、悪趣味ですね。このクソ虫が」

セラの言葉でやられた歩。

そして俺はハルナに強めの拳骨を下した。

ゲーセンに行き夜遅くまで遊び、歩の家にお邪魔した。

セラは風呂に入り、俺達は居間で休もうかと思いついてみると、ユ

ーは居なくて代わりに置手紙が置いてあった。

ハルナがそれを読むと、悲しい声で歩に手紙を渡した。

読み終えた歩は、手紙を俺に渡し家を飛び出した。

——何が書いてあったんだ？

『さようなら』

そう書かれていた。

俺は驚き、続きを読んだ。

『私さえいなければ 歩もこの街もこんなことにはならなかった』

『セラ ハルナ 春樹 歩も みんな私に優しい言葉をかけてくれる それはとても嬉しくて 私はそれに甘えていた』

『でも 私は一緒に居てはいけない存在 全て 私が悪いのだから ごめんなさい』

『いつも大変な思いをさせてしまつて ごめんなさい このまま私が側に居ると いつかきつと また誰かが悲しむことになる』

『私は死を呼ぶものだから』

『だから さよなら』

——……落ち着け、ここで怒っても意味がない。

俺は拳を爪が食い込むほど強く握り締めた。

探してきた歩が帰ってきて、七夕に飾った竹の前に行く。

そこで短冊を握りつぶして泣き崩れる歩。

なんて願い事を書いたのか見てみると、

『全ての願いが叶いませんように』

だった。

ユーユー泣きながら叫んでいる歩に、ハルナが思いつきり蹴る。

「なにくよくよしてんだよっ！ アユムのバカっ！」

「そうですよ歩。今生の別れでもないですし」

セラがバスタオルを巻いただけの姿で現れる。

「連れ戻そう！ 大先生も！ 根暗マンサーも！」

「でもな、ハルナ。ユーは自分から出て行ったんだぞ？ 俺達が一

一

「知るかつ！ 連れ戻すっていつてんの！」

「そうだな、早くユーを連れ戻さないとな」

俺は歩に短冊を見せる。

「春樹、こんな願い事を書いた俺を笑うか？」

「あいにく、俺は神様なんて信じないんでね」

短冊を破り、歩の前に落とす。

「とりあえず、今は考えよう。俺達は何も情報がないからな」

「ああ……そうだな」

歩は元気を取り戻した。

さてと……これからどうなるんだか……。

第二十一話（後書き）

グダグダですみません。

この話でなんとか二巻分を終わらせることが出来ました。

三巻まで行ったら区切りがいいので、少しオリジナルを入れてみたいと思います。

第二十二話（前書き）

三巻目の始まりです。

第二十二話

「はあっ！ セラフィムの抹殺？」

ユーが去ってから数日、歩の話によると、昨日セラが任務を放棄したせいで殺されかけたそうだ。

セラは任務のことを上に黙らず、正直に話してしまったからだそう
だ。

——ま、正直者のセラらしいな。

「で？ セラフィムは大丈夫なのか？」

「ああ、ハルナの血をもらったから命に別状はない」

よかった。ホッと胸をなでおろす。

そこで織戸がやって来た。ちなみにここは学校なので、その話は後に聞くことにした。

「——俺たちは、トレジャーハンターの心を持っているんだよっ！」

何を言っているのかわからなかった。だが、歩は何か理解したのか、神妙な顔で織戸の話に賛同した。

「わかる。宝物を発見して、胸が熱くならない男はいないからな」

「だが、決してトレジャーハンターになってはいけない！」

「ああ、そうだ。盗みは犯罪になっちまうからな」

二人は女子の腰らへんを見る。

——ああ、なるほど。……パンツか。

言葉と視線だけで分かってしまう俺も相当かもしれない。

男なら当たり前だと思う俺。
あのエロ談義についていけなくなった俺はトモノリとすれ違いに席まで戻る。

放課後、いつもなら瀬奈と一緒に下校するが、今回は違った。

「あ、あの、春樹君。よかったら明日一緒にプラネタリウムに行きませんか？」

珍しい。瀬奈が誘ってきた。

家に帰っても、やることはないのかわかったと返事をする瀬奈は子供のように喜んだ。

「でも、どうしてプラネタリウムなんだ？ お前、星好きだった？」

「実は……これ、友紀さんからもらったものなんです」

「あれ？ お前ってトモノリのこと知ってるのか？」

「はい。体育で仲良くなりました」

それは意外な接点だった。

「友紀さんも相川さんに行くんですけど、二人きりだと恥ずかしいと言っていたので、私と春樹君でWデートしませんかと言ったらくれました」

「そうか……デートか……」

「嫌ですか？」

「別に、楽しそうでいいじゃん」

顔は自然のままだが、内心、緊張しているかもしれない。

話を終わらせ、一緒に下校した。

次の日の体育。俺達はバスケットをやっている。

俺のチームは、歩、トモノリ、平松、瀬奈で俺だ。

見事に顔ぶれのあるチームだ。平松も歩の小学校の同級生らしいし。トモノリは歩と同じチームになったことを喜んでおり、瀬奈も同様に俺と同じチームで喜んでいた。

「がっつはっはっ！　こりゃ勝ったなっ！」

下品な笑い声をするのは、敵チームの織戸だ。

相手チームはバスケット部員が二人もいる。

隣のクラスの三原に、下村こと、アンダーソン君だ。しかもかなりのイケメン。

「じゃ——いくぜっ！」

トモノリがジャンプボールを上げ、歩と織戸がジャンプする。

足元を見てみると、織戸が歩の足をふみ、あからさまなファールを取っていたが、俺以外のみんなはボールに視線が向いているので見えなかった。

織戸はバスケット部の三原に速攻パスを出して、三原がゴールまで向かう。

そして、アンダーソン君にパスを出し、彼がダンクする。

——ただでかいんだよ……。

トモノリがボールを取り、相手のゴールに向かって走っている歩にロングパスをした。

「甘いぞ相川っ！」

レイアップを決める步だったが、織戸のタックルで吹っ飛ばされた。

——おい、おかまいなしだよ。

三原にパスがまわり、俺と対峙する。

——しょうがない。

俺を抜き去る三原だったが、俺はうまくディフェンスをする。

「藤島——なかなかやるじゃん」

「そいつはどうもっ！」

伊達に剣を振っているわけではない。三原のドリブルだって遅く見える。

俺は一瞬で三原のボールを取り、そのままドリブルした。

「歩っ！」

正確に歩の胸元に百六十キロは出てるロングパスをすると、歩は反則しようとする織戸をおかまいなしに高く飛び、 Dank した。

……おい、思いつきりゾンビの力出してるじゃん！

あのジャンプを買われ、バレーボール部員やアンダーソン君にスカウトされる歩であった。

さて、時刻も四時ころになった。

プラネタリウムへは、そのまま行けばいいじゃんとか瀬奈に言っただが、待ち合わせのほうでデートっぽいとか言いだして、結局着替えて行くことになった。

駅前まで行くと、既にトモノリと瀬奈が来ていた。

「遅いですよ」

「……時間通りだろ」

瀬奈の格好は、少し飾りのついたピンクのインナーが、瀬奈の豊かな胸が強調されてしまう。その上には白のカーディガンを着こなしていて、通りかかる男のだれもが彼女を見ていた。

しかも、よく見るとカーディガンは俺が以前買ってあげた服だった。それを着てくれたのは、少しうれしかった。

しばらくすると歩もやってきて、トモノリが瀬奈と同じことを言いだした。

「相川おせえよ」

「いや、指定時間より早いけど」

俺と似たようなことを言う歩。

四人がそろったことで、みんなでプラネタリウムへ出向した。

第二十三話

プラネタリウムにやって来た俺達。

星には興味のない俺だが、意外と楽しめた。

瀬奈も星をじーっと見つめており、俺も静かに楽しむことが――

「あーっもうっ！ 赤い彗星はいつだよっ！」

……できなかった。

「それに、なんだあの北斗七星！ 死兆星が足りないじゃん！」

――お前ほんとにくつだよ！

今どきのガキなんて、そんなの知らないと思うぞ。

「ハルナ、少し落ち着いてください」

「だって！ ナメック星のことすらいつてないじゃん！ こんなこともあろうかとナメック語を専攻したのにつ！」

マジで？ 何？ ヴィリエってナメック語教えるの？ 少し教えてもらいたいかも。

――って、セラまでいるのかよっ！

はあ、と、ため息をつき、静かにしてもらいたいことを願う俺だった。

結局、静かに終わることはなく、俺達はそのまま食事に行くことにした。

適当に何にするかとレストラン街を歩いているが、後ろから二人の気配がひしひしと伝わってくる。

「歩、気づいているか？」

「ああ、プラネタリウムからいたな」

「あの……春樹君」

「瀬奈、気にしたら負けだ」

どうやら瀬奈とトモノリも気づいたらしい。

しびれを切らしたのか、歩がセラ達の方へ向かった。

しばらく待っていると、歩がセラ達を引き連れてやって来たと思っ
たが、歩がセラに引きずられてやって来たのだ。

「お、屋上で飯を食おう」

——なにやってんだ、アイツ？

仕方がないので、セラ達についていき、屋上に行った。

屋上にはやはり誰もおらず、貸切だ。

「で、何を食べるんだ？」

「それについては心配するな。ハルナが弁当を作ってきてくれたら
しい」

「春樹君、実は私もお弁当もってきたんですけど」

何？ 瀬奈の弁当は最高だからな。それならレストランに行く前に
言ってくればいいのに。

「じゃあ、俺は瀬奈のを食べるわ」

「よかつたら、皆さんも食べてください」

少し多めに作った瀬奈の弁当は見事に鮮やかだった。
ちなみに、ハルナの弁当は、……ゼリー？ と猫缶だった。

「フグとかフォアグラを宇宙食っぽくしてみたんだ！」

も、もつたいない。それなら普通に味わせろよ！

猫缶の方はバハムートのフォアグラ、訳すと竜王の脂肪肝だ。

ヨダレをじゅるりと垂らしているトモノリは早く食べたいといった表情だ。

トモノリはハルナの宇宙食を食べると、至福の表情を浮かべ、ハルナに尊敬のまなざしを向けた。

「すんげーっ！ 師匠って呼んで良い？」

「ししょ——あ、あたしに言ってるのか？」

「師匠！ 俺に料理を教えてください！」

「ほえ？ まあ……別に……いいけどにや」

師匠と呼ばれて、顔を緩めるハルナ。そんなにうれしかったらしい。

「やったぜ相川！ これで俺も相川を唸らせる料理が作れるぜっ！」

「やっぱりダメだっ！ ダメに決まってるー！」

どうやら、歩をとられるのがいやらしい。ほんとに素直じゃないな。

「それじゃ、瀬奈のを食べてみるか」

俺は瀬奈の弁当から卵焼きを取る。

「はあ、ふんわりとした触感、程よい甘さ、瀬奈はいいお嫁さんになれるなー」

俺の好みに合わせてくれたのがいい。瀬奈の夫になる人は幸せだろうなー。

「え、そ、そんな」

顔を赤らめ、俺から視線を外す。

「それじゃあ、春樹君が私の――」
「次は私ですね」

瀬奈の言葉を遮り、セラが今度は大きな風呂敷から壺を出した。

「さあどうぞ」

――……え？　もしかして……俺？
みんなに聞くと一斉にうんと頷く。
瀬奈だけ心配そうな表情で見ている。

「な、なあ、ちなみに……これって何だ？」
「何を言っているのですか？　どこからどう見ても餃子です」

――餃子かよー！
くそっどうすればいい。このままだと俺が死ぬ。

「やっぱり、嫌ですか？」

そういう悲しい顔はやめてくれ。罪悪感が残る。

「わわわわわかったたたたよ」

「春樹、がんばれ！」

「春樹君、無理はしない方が……」

歩のやつ、他人事だからって。

とりあえず、壺——餃子を持つ。さわり心地は間違いなく陶器だ。ゴクリ、生唾を飲み込む。

後三十センチ、二十、十……、あと……——

「うわああああああっ！」

「ぐはあっ！」

耐えられず、隣にいる歩の口にめがけて壺を入れた。

思わず破片を食べてしまった歩は白目をむいて倒れた。

——お前のことは忘れない……かもしれない。

比較的症状は軽く、すぐに目を覚ました。

絶対、普通の人間が食べたら死ぬだろ、あの殺人兵器は。

「餃子はダメでしたが、続きまして——」

まだあるのかよっ！ まあいい、次も歩に食べさせれば問題ないしな。

「タコさんウィンナーというものに挑戦しました。瀬奈より少し劣りますが、よくできたと思います」

なんだか一般的なのが出たな。

と思ったのもつかの間。風呂敷から出てきたのは本物のタコだった。

しかも生きている。

「……セラフィム、お前、なにやってんだ？」

「ハルナが、料理とは作ることが目的ではなく、食べてもらうことが目的なのだと——ですから、私は春樹に食べてもらいたくて」

セラは照れながら俺に言った。

——はあ、そんな顔見せられたら食べるしかないだろ。
幸い、これには手をつけていないそうだし。

「しょうがない、セラフィム、切り分けてみんなで食べようぜ」
「はい」

セラは、瀬奈には見えないように木の葉を剣に変える。そのままさばこうとしたが、タコは逃げだした。

「セラ！ 捕まえろ！」

歩がセラに言うが、セラは歩に木の葉のナイフを歩の額に投げた。
俺は瀬奈の目をふさぎ、見えないようにした。

「外しましたね」

涼しい顔で言うセラ。歩には罪悪感なんてものはないらしい。
ぶっちゃけ、俺もそうだが。

歩だけタコを探しに行ったので、しょうがないから俺も一緒に建物の中へ入った。

適当に探すとペットショップの店員に抱えられていたのを見た。

「あ、すみません」

店員に謝ろつと前に出ようとしたが、歩に止められた。

「春樹！ そいつに近づくなっ！」

そんな声を聞くのは初めてかもしれない。
しかたなく、歩の隣に戻った。

「やあ、奇遇だね」

「なんで、お前がいるんだ？ ——夜の王」

え？ この男が、例のゾンビ？

第二十四話

「君達は動物が好きかい？」

夜の王はバイトが終わったらしく、エプロンを畳みながら笑顔で言ってきた。

「嫌いじゃないけど」

「実は、メガロを動物にしようと言ったのは俺なんだ」

へえー、それは意外。

「そんなことより——大先生は無事なんだろうな？」

「彼女は俺を殺してくれる可能性がある人物だ。殺したりはしないさ」

歩が大先生の無事を確認すると、夜の王が俺の顔を見てきた。

「君も、俺を殺してくれる可能性のある一人だ」

……もしかして、あの刀のことを言っているのか？

花影血桜。その刀には何百人、何千人の魔力が溜まっている。

その魔力を放出すれば自分を殺せるかもしれないと考えているのか
もしれない。

「魔装兵器とやらは出来たのか？ どんなすごい力なのか、一度お目に掛かりたいもんだが」

「もうすぐさ。この世界を混沌に墮とすものを発注しているよ」

歩の質問に、夜の王は笑顔のままどこかへ去って行った。

「なあ、どうすんだ？」

「決まってるだろ。奴を捕まえる」

「あ、居た居た。アユムに刀の、何やってんの？」

ハルナがこちらにやって来た。奥の方を見ると、瀬奈達全員がいた。

「友紀、すまんが俺のために働いてくれ」

歩はトモノリに真剣な表情で言った。

俺達は夜の王をストーキングしている。

奴は駅の方へと向かっているようだ。

「あの、春樹君。いったい何をしているんですか？」

「あー……、知り合いの人の動きを探っている」

瀬奈は人を疑わない。なので、俺は瀬奈に申し訳ない気持ちになる。とりあえず、駅に着いたら瀬奈を先に帰らせよう。

大先生を一番に尊敬しているハルナは、我慢の限界が訪れて来た。

「あたしもう待てない！」

「バカ！　ここで逃がしたら、また大先生の手掛かりが――」

ハルナは飛び出した。

「大先生はどこだ！　こんの変態！」

ハルナが叫ぶと同時に、夜の王は消えた。瀬奈は人ごみに紛れたと思っっている。

「歩っ」

「わかってる。行くぞ」

「春樹は瀬奈を送ってあげてください」

「ああ、分かった」

俺は瀬奈の手を掴み、駅まで向かった。

最後まで瀬奈は「？」と、首をかしげていた。

ひとまず電車に乗り、地元の駅まで着いた俺と瀬奈。
ここまでなら、誰も来ないだろう。

「セラさん達はどうしたんですか？」

「……ちよっと、事件があつてな。あいつを追うことが、事件を解決するために必要なんだ」

少し遠まわしに言ってみたが、瀬奈は見事に騙されてくれた。

「そうだったんですか。セラさんも大変ですね」

「あ、ああ。そうだな」

——スマン、瀬奈。

心の中で謝る俺だった。

その時、瀬奈が誰かに延髄をチョップされ、気絶した。

「なっ！」

瀬奈は誰かに担がれ、そいつは俺の前に立った。

「こんばんは、春樹さん」

「京子」

京子だった。

「あの時以来ですね」

「ああ、俺がお前の胸を揉んだ——」

「いちいち言わないでください！」

よほど恥ずかしかったのか、顔を赤くして叫んだ。

「で、何の用だ？」

「コホン、実は、春樹さんが持っている刀がほしくてですね」

俺が担いでいる花影血桜を見る。

血桜を出し、構える。

「なるほど、魔力か」

「ご名答です。その魔力を使えば、魔装兵器がさらに強力になる。

あの人からのまれたんです」

あの人とはきつと夜の王のことだろう。

「ですので、彼女と交換しませんか？」

「やだね」

「は？」

「だって、瀬奈はもう、俺の所に戻るからな」

京子の足もとから黒い影みたいなものが出てきて、瀬奈を掴んだ。
京子は何もできず、瀬奈から離れた。

「え？」

黒い影は俺の元に戻り、瀬奈を俺に渡して消えた。

「春樹さん、まさかコントロールできるのですか？」

「ああ、そういうことだ」

吸血忍者の女生徒にやられてから、俺は考えた。

血桜を使って分かったが、もしかしてこれにはまだ力を出し切れていないんじゃないか。

だから、イメージすれば魔力が放出されるんじゃないかと思った。
そして案の定、魔力は放出された。

「そのあと、適当に訓練したらこんなのがつかえた」

「なんですか、その才能」

「だから、次、瀬奈に手を出したら——容赦しない」

殺気と魔力を込めて京子に発した。

京子はそれにやられ、後ずさった。

「安心しろ。お前を殺したりはしない。だから、早く消えろ」

「っ！ 覚えていなさい」

京子は姿を消した。

瀬奈はスヤスヤ眠っている。

「しょうがない」

俺は瀬奈をおんぶして、彼女の家まで送って行ってあげた。

電車で寝てしまったと瀬奈の両親に言い瀬奈を渡した後、俺は歩の家に行った。

既に歩達は帰ってきており、俺は家に入り居間に行く。

居間には歩とハルナだけで、セラは部屋にこもっているようだ。

「何があつたんだ？」

「実は――」

あの後、夜の王と戦うことになり、ボロ負けだったらしい。

そこをトモノリが集めてきた吸血忍者によって助けられたのはいいが、セラと同じ派閥の女生徒――名前はサラスバティらしい――や仲間たちに冷たい言葉をかけられたせいで部屋に引きこもってしまったそうだ。

俺も、歩達と別れた後のことを簡潔に話すと、歩達は花影血桜を見た。

「どうやら、これを奪われるとまずいらしい。だから、ちゃんと持つていないとな」

「お前、すごいな」

いやー、それほどでもあるぜ。

「ハルナ、セラと話したか？」

「ほえ？ まあ——ちよつとだけ」

「どうだった？」

「しおしおくとしてたな」

「だってさ、春樹、お前勇気づけてきてくれないか」

「なんで俺が」

「セラを元気づけられるのはお前が一番適任だからだ」

「……しょうがない」

正直、セラのことは心配だ。

でも、どうするか？ どうやってセラを元気づけられるのだろうか。

——……やっぱり、コレかな。

血桜を持ち、セラの部屋に向かった。

「セラ、俺と勝負しないか」

「は？」

俺は部屋に入るなりそう言うと、セラは困惑していた。

「勝負すると、嫌なことも忘れるしさ」

「……わかりました」

「じゃあ、いつもの墓場でいいな？」

俺はセラを連れて墓場に行った。

第二十五話（前書き）

グダグダですみません。

第二十五話

勝負と言っても、別に本気でやろうとは思っていない。

墓場では俺とセラの二人だけだ。

セラに近づき、軽く攻撃する。

「お前の気持ちは分からないでもない」

「どういうことですか？」

「俺だって、昔は友達が瀬奈くらいしかいなかった。しかも親は海外に出かけてるし、いつも家では一人だ」

セラは俺の刀を受けながら聞いている。

「正直、一人でも楽だと思った。でも、あの時から俺の人生は変わった。お前らが来てからな。それからは、俺の生活は普通の人とは違うが、楽しい日々だ。今でも俺はお前らを仲間だと思ってる」

「……………」

「俺達がいるだろ。なんて言えばいいのか——ただ、一人で無理はするなって言いたいんだよ。もっと俺達を頼れよ。そうすればきっと、吸血忍者も認めてくれるかもしれないし」

「ふふっ」

「な、なんだよ？」

「いえ、春樹は素直じゃないと思ひまして。勝負しながら話すなんて」

「ばっ、勘違いすんな。お前が落ち込んでいると、飯が不味くなるからな」

自分でも素直じゃないとわかってしまう。

俺とセラは剣をおろし、近くの木の下に座る。

「でも……私はもう——吸血忍者として認められないでしょう。自分から決意して、名誉よりも友を選んだのに——なのにまだ私は……吸血忍者として生きたいと感じている。私の決意など、まだまだ甘ったれていた！　それが——何よりも悔しい！」

横で悔しがるセラの頭に手を置き、撫でる。

「俺はお前が強いつてことは知ってるぞ。きっとなにかなるさ」

「曖昧ですね」

「今はそれでいいんだよ」

セラは俺の胸に飛び込んだ。

「お、おい！」

「これはサービスですよ」

俺のシャツを握り締めながら泣いた。

俺は彼女を抱きしめてあげることしかできなかった。

歩の家に戻ると、居間にはヴァイオリンが置かれていた。

「何だこれ？」

「ああ、それか？　実はハルナがスパゲティと間違えてヴァイオリンなんかを——」

「スパゲッティだっ！」

ハルナ大声が聞こえた。ちなみに、俺もスパゲッティ派。

「おや？ ストラドモデルですか。懐かしいですね」

「確か、ストラディバリウスの」

「はい。これはその寸法を真似た一般的なヴァイオリンです」

ふむ……全然わからない。とにかく、いいヴァイオリンってことだろう。

机に置いてあった明細を見ると、『アントニオ・ストラディバリ』になっている。

そして、その値段を見ると、六万ミヤーンだった。

「なんだよ、ミヤーンって！ ヴイリエって単位がミヤーンなのか！」

明細を叩きつけた。ヴィリエに行ってみたいと思った。

「セラフイムは弾けるのか？」

「ええ。昔——里の仲間と楽団をやってましたから」

やべー、地雷踏んづけちゃった。

申し訳なさそうな表情にすると、セラは明るい表情を作った。

「あー、それじゃあ、聞かせてくれよ」

「またいつか、聞かせてあげますよ」

なんだ。ちょっと聞いてみたかった。

「お前は何か弾けるのか？」

歩が聞いてきた。

「ふつ、俺の弾ける楽器は……カスタネットだ」

「ただ叩くだけだろ！」

「じゃあ、口笛」

「楽器ですらない！」

「しょうがないだろ。楽器なんて使ったこともないし」

そもそも、音楽苦手だし。

「だったら、私が教えましょうか？」

「まあ、気がのつたらな」

あまりやる気のない返事をして、客間——すでに俺の部屋になってしまった——に戻って寝た。

余談だが、朝の五時くらいになると、セラがヴァイオリンを弾いている姿を見てしまったのは内緒だ。

朝の六時、歩が学校に行った。俺は七時半に学校へ行き、今日は調理実習があつたのを思い出し、瀬奈の家に行き、食料をもらった。そのまま二人で学校へ行くことになった。

「春樹君、昨日の電車に降りた時からの記憶がないんですけど」

「心配すんな。お前、あの後寝ちゃったから俺がおぶって家まで行ったんだ」

「そ、そうだったんですか」

記憶がなくなってたのは幸いだ。瀬奈はそのまま信じてくれて、そのときには校門に着いていた。

調理実習の時間になり、俺達の班は歩、トモノリ、織戸、平松、三原、アンダーソン、瀬奈、そして俺だ。

「織戸、お前なんだそのエプロン」

「これか？ 通販で買ったんだ。セラさんに着て貰おうと思ってな」

「裸エプロンか？ やめた方がいいぞ。東京湾がお前の血で染まる」

裸エプロンか……。思わずセラの裸エプロン姿を想像してしまう。

「いてっ！」

瀬奈に足を踏まれてしまった。

「春樹君、なにか変な妄想してませんでしたか？」

「い、いや、してないぞ」

鋭い奴だ。

「えー、単刀直入言うが、今日予定していた先生がドタキャンしちゃいました」

俺達の担任、通称『無個性タイフーン』がクラス全員に伝えた。

ええ。と不満の声が上がるが、先生が咳払いをすると、改めて言った。

「そこで、臨時に誰か頼めないかと悩んでいたところ、吉田が紹介してくれた」

同じ班のトモノリが胸を張る。

——ったく、吸血忍者でも呼んだのか？

「では、先生どうぞ」

扉から入って来た人物は、ハルナだった。

第二十六話

ハルナが先生か。何か嫌な予感がする。

「いいか、卵焼きには魂を吹き込め！ その結果、たとえ百年以内に死ぬとしてもだっ！」

——人間は百年以内に死ぬんだがな。

そこで、歩とハルナについて聞いてきたやつがいた。

「センサー」

「なんだ！」

「もしかして、センサーは相川に卵焼き作ったことあるんですか？」

「そりゃ、あるに決まってるだろっ！ 一緒に——」

「いいから早く始めろっ！」

歩はアンダーソン君を盾にしながら言うが、カミングアウトを調理室のみんなに聞かれたのもう遅い。

女子はハルナの所に、男子は歩の所に集まり、緊急記者会見を行った。俺とアンダーソン君は後ろで歩達を眺めている。

「で、相川はどっちが本命なわけ？」

「うるせーよ」

本命の候補はハルナとトモノリのことだろう。

「そついえば前に、ものすごく綺麗なお姉さんが弁当届けに行ってたよな——」

「あ！ そうだよ！ 顔もスタイルも半端なかったよな」
「ゲゲエーっ！」
「その人はセラさんだ」

なんか偉そうにメガネをかけなおす織戸。

「し、知っているのか織戸！」
「セラもハルナも——ただの家族だ」
「じゃあ、本命はトモノリかよ！ くうく、俺トモノリ狙ってたのになー」

「お前、トモノリ好きだったんか？」
「だって、見るよあの足。たまんねーよな」
「トモノリはああ見えて、隠れ巨乳だ」
「し、知っているのか織戸！」

「ゲゲエーっ！」
「でも巨乳なら、相川の本命にはならないんじゃないか？」
「そうだよな」
『だって相川はロリコンだもの』

思わず俺まで言ってしまった。
それを聞いた歩は、俺を仕返しにあることを言ってきた。

「実は、セラは春樹のことが好きなんだぞ」
『何イーーーー！』

今度は俺の周りに人ばかりができた。

「なんでお前はモテるんだ！」
「橘さんもいるってのに」
「二人の巨乳を一人占めかよ」

「別に、瀬奈は幼馴染だし、セラフィ——セラは仲間だ」

「幼馴染がいるだけで羨ましい」

「何がきっかけで好かれたんだ！」

あれが原因とは言いたくもない。

『リア充爆発しろ』

全員の声がハモツた。

もう助けて……。

ひとまず騒動は終わり、俺達は卵焼きを作り始めた。
俺の作る卵焼きは、いつも焦げたりしてしまっ。

「お前、料理下手だな」

「いいんだよ。料理できる人と結婚すれば」

「じゃあ、もしセラが嫁だったらどうするんだ？」

「……………俺がつくるかも」

「妥当な判断だな」

当たり前だ、アイツの作る料理はゲテモノを超えている。

「春樹君、食べてみてください」

瀬奈は俺の前に完成した卵焼きを見せる。それを箸でつかみ俺の口に向ける。

「あーん」

卵焼きを食べさせてもらうと、男共の舌打ちが聞こえた。

「はあー。昨日の弁当よりもあったかくて、風味が出ておいしい。お前の料理は毎日食べても飽きないな」

「それじゃあ、春樹君の料理は毎日私が作りましょうか?」

「それはいいよ。お前が大変になるだろ」

「別にいいのに……」

声が小さくてよく聞き取れなかった。

班のみんなが俺を見て、やれやれ、と首を振る。

こうして、調理実習は何事もなく終わった。

「はい。アユムのぶんな」

ハルナは歩に卵焼きを渡した。それを食べた歩は——吐いて死んだ。

「おい、お前何喰わせたんだ?」

「あれ? あたしちゃんとコレの通りに作ったのに」

俺にその本を見せる。題名は『これでターゲットもイチコロ』だった。

——イチコロの意味違エー!

歩は保健室に連れていかれた。

六時間目開始のチャイムが鳴ったので、俺は自分の教室へ戻ろうとしたが、何か違和感を感じたのでその方向を見てみる。

遠くなっていく。そう感じたので、その違和感の所へつい足を向け

てしまった。

誰もいなくなつた廊下には、京子が立っていた。

「こんにちは、春樹さん」

「京子か……お前とはほんとによく会つな。なんか気が合うな」

「なんでそんなにお気楽なんですか」

俺のボケにツツコむ京子。

「あー、もしかして魔装兵器？」

「……なんで慌てないのかわかりませんが、やっと完成しましたよ。春樹さんと相川さん、見たがついていたんでしょ？ あの方が言っていました」

相川さん？ 後ろを振り向くと、歩が立っていた。

「うおっ！ いたのかよ、ゾンビみたいなやつだなー」

「いや、俺ゾンビだから」

そういえばそうだった。

「こんにちは、相川さん。お元気そうで残念です。あの時の恨みは死んでも忘れません」

「恨み？ いつのことだか俺は忘れちゃったよ」

「——忘れたとは言わせません。エッチな本と兵器をすり替えるなんて」

「ぷっ！」

「笑わないでください！」

そういえば、そんなこともあったな。

「だってその日って、俺がお前の胸を揉ん——」
「いちいち言わなくていいです!」

怒らすと怖いんで、ここまでにしておこう。

「兵器は、既に発動させました。残り時間はあと六分程度です」

マジ?

「春樹さんには効かないのが残念ですが、まあ、せいぜいがんばって探してくださいね」

歩は我慢の限界にきたのか、京子に一步踏み出した。

「ヒントを差し上げま——」

京子の制服を掴み、逃げられないようにする。

「お前だけは絶対に逃がさない。たとえ——何が起ころうとな」
「——最っ低ですね」

歩は京子を殴ろうとするが、京子の出した竜巻により、阻まれてしまふ。

「春樹、お前が京子を押さえてくれ」
「ああ、わかった」

竜巻で見えなかった京子は、俺が突撃してきたことに驚き一步下がるが、制服を掴まれていたせいで逃げられない。

「しばらく、おとなしくしてな」
「くっ」

俺には魔法が効かないのを知っているため、それ以上抵抗はしてこなかった。

「残念ですね。私には生体の宝珠があります」

生体の宝珠。確か、死を一度だけ無効にするチートくさいやつ。兵器を発動しても、自分は生き残れるってことが。

瀬奈や学校みんなを救えないじゃないか。

「ハルナ、こいつから生体の宝珠を奪え」

ハルナ？ また後ろを振り向くと、ハルナがいた。

——お前らはスニーキングスキルでも持つてるのか？

「あははは！ 無理ですよ。ハルナにそんな技術はありません。いいですか？ 生体の宝珠は物体じゃなく——」

大笑いしていた京子は、突然驚愕の表情に変わる。

「ない——生体の宝珠が——一つもっ！ やられた！ 全部あの女——」

怒りをあらわにした京子だったが、次は明かり笑顔を見せた。視線の先には、青い霧が現れた。

——これが歩の言ってた霧。

以前、夜の王と戦闘したとき、霧によって姿を消していたらしい。

霧の中から声がする。

「君はもう、用済みだ」

「嘘——なんで——」

それだけを言つて、霧は消えた。

京子は悔しそうに唇をかみしめている。

「あー、どうやら見捨てられたらしいな」

「——アリエル先生が、交渉でもしたんでしょうね」

全ては大先生のおかげらしい。

そのとき、教室の方から騒がしい声が聞こえた。

京子を押さえながらみんなと行くと、全員奇妙な姿をしていた。

俺たち以外の人間が、動物の耳が生えていたのだ。

第二十七話

「なんじゃこりゃ」

廊下にいる人全員が動物の耳が生えていた。

「これは——大先生の使う魔法で最も恐ろしいって言われてる呪いだ」

「ずいぶん可愛らしい魔法だな」

「いいや、この呪いは——人間をだんだんと動物に変えていくんだ」
「マジかよ!」

動物になるとか、俺はなりたくないな。

「音楽を聴かせれば動物は元に戻る。早くなんとかしないと」

「わかった。春樹、音楽室に行くぞ」

「了解」

俺達のクラスは三階にある。ついでに瀬奈を避難させないと。

歩が先にクラスへ行き、俺達は京子を担いでいるので遅めにいく。

「ちょっと！ 春樹さん！ おっぱい触りすぎです」

「うるさいな。俺と一緒に感染源まで行くか？」

「それだけはやめてください」

俺の勝利。

「で、どこまでの人間が感染してるんだ？」

「私が仕掛けたのは一階です。恐らく、一階の人間はすべてアウト」

「おいおい、どんどん呪いが広がっていくってことかよ」
「まあ、そうですね」

とんだバイオハザードだな。

三階へ上がりクラスに入ると、その時にはすでに遅かった。
クラスの人たちは動物の耳が生えていた。

「瀬奈！　大丈夫か――」

瀬奈を見ると、彼女にはウサギの耳が生えていた。
――なんか……可愛いな。

「ちょっと、春樹さん！」
「はっ！」

京子の叫びに俺は我に返った。

「春樹、音楽室に行くぞ」
「くっ、名残惜しいが、しょうがない」

瀬奈のウサギ耳を最後に見た後、音楽室に逃げた。
鍵のかかっている音楽室を、歩が蹴り破る。

「春樹、お前なんか弾けるか？」

「俺ができると思うか？」

「……だよな」

「あはは！　私ならピアノ弾けますよ」

「はいはい」

適当にスルーする。ハルナが別の教室に楽器を探そうとしたが、出

た瞬間感染してしまった。

「アユム……あたしはもうすぐ理性を失う。その前に言っておきたいことがあるんだ」

「ハルナ……」

「絶対に忘れるな！ ジャガイモは、ナス科の植物だってことを！」「どうでもいいこと言ってるじゃねえー！」

俺はハルナの頭を叩く。ハルナはもう、動物の耳や尻尾を生やしていた。

歩は最後の手段にセラへ電話を掛ける。

「イヤです」

それだけがはっきりと聞こえてしまった。

「春樹、頼む」

「しょうがない」

歩から携帯を受け取り、耳に当てる。歩は隣で聞いている。

「セラフイム、どうしてもダメなのか？」

「学校には――友が……保守派の吸血忍者もいますので」

「頼む、瀬奈にハルナやトモノリ、あとついでに歩も助けてやってくれ」

「俺はついでかよ！」

「最後のでやる気が失せました」

「ひどっ！」

「冗談です。少し、考えさせてください」

電話が切れた。

——頼むぞ、セラ。お前しかいないんだ。

「ここ、暑いですね。ちょっと脱がしてくれませんか？」

「よし、それなら俺が更衣室まで連れて行ってやるっ」

「やっぱりいいです」

まったく、それなら言っなよ。

「俺、ちよつと見てくるよ」

「ああ、頼む」

俺は音楽室から出た。

適当に自販機で飲み物を買ったが、やっぱり違和感がある。

右を向けば半動物、左を向けば半動物。正直疲れてきた。

俺は魔法抵抗が強いので何ともないが、そいつらはこのまま動物になってしまうっ。

「はやくセラに来て貰わないとな」

ジュースを三本持ち、音楽室に戻った。

途中瀬奈を見つけたが、ウサギの姿があまりにもかわかったので、少し見入ってしまった。

「はっ！」

危ない危ない。早く戻らなくちゃ。

音楽室に入ると、まだ感染はしていないようだ。

「ほらっ、飲み物買ってきたぞ」

「サンキュー」

「京子の分もあるぞ」

「私、縛られてるんですけど」

「心配すんな。紙パックのやつだから」

歩に飲み物を投げ渡し、京子にはストローをさして口元に向ける。

「ほらっ」

「あ、ありがとうございます」

チューチュー吸う京子は可愛らしかった。口元にこぼれた滴を手で拭う。

「何か話したのか？」

「ああ、少しな」

その話とは、大先生のことだった。

大先生は京子の生体の宝珠を回収するためにわざと捕まったらしい。そして、大先生が魔装兵器を作った理由が、ヴィリエの女王を倒すためだったそうだ。

「ふーん、なるほど。どうやらお前は、罪を償うつもりなんだな」

「はい……。あなたは私を恨んでいないんですか？ あの子が動物になりかけているのに」

「もし、瀬奈が動物になったら、俺はお前のことを一生許さない。だけど、まだ生きているんだ。何も外傷はなさそうだし、それなら恨むつもりはない」

「やさしいんですね」

「そうか？ 別に、歩がゾンビになったのも今じゃどうでもいいし」

「おい！」

「あはは」

空気が良くなったような気がする。

ふと視線を窓に向けると、セラが家の屋根に立っていた。ヴァイオリンを持って。

「歩、そこをどいてろ」

歩を窓から離し、俺が窓開けた。

セラは窓から入り、俺の前に立った。

「ありがとうな、セラフイム」

「か、勘違いしないでください。私は、あのクズでゴミな虫の動物の姿を見に来ただけですから」

「そうか」

俺は相川を掴み、開いた窓の前に寄らせる。
すると、たちまち歩の鼻が象の鼻になった。

「だははは！」

「てめえー」

「ふふっ、これは傑作ですね」

セラはヴァイオリンを弾いた。歩の体は速攻で治った。
音楽室の扉がどんどん叩かれた。そろそろ時間だな。

「いくぜ、セラフイム」

「ええ、いつでもどうぞ」

扉を開けると、一斉に動物たちがなだれ込んできた。

セラはヴァイオリンを弾き、その音色を聴いた人たちは人間に戻った。

俺はセラと一緒に廊下を歩いた。

「セラフィム」

「なんですか？　今、弾いているので手短にお願いします」

「綺麗だな」

「なっ！」

ヴァイオリンの音がずれ、嫌な音が俺の耳に入る。

「つつ」。俺はセラフィムの音色が綺麗って言おうとしたんだが

「……それならそうと、早く言ってください！」

顔が赤くなったセラは先に廊下を歩く。

俺はそのあとをついていくだけだった。

第二十八話

次の日、学校は本日でしばらく終了だ。

全校集会と通知表を配るだけだった。

京子から得た情報だと、メガロもどきの発生源は何十か所に分かれていた。

それを今、ヴィリエの人たちがその場所を潰す作戦に出て、ハルナはヴィリエに行っている。

俺は歩の家で二人の特訓を寝っころがりながら見ている。歩がセラに斬られた。

「手加減しろよっ！ なに真剣でざっくり切り刻んでるんだよっ！」
「つい、調子が出てしましまして。すみませんね、調子に乗っていて」

結構楽しんでるセラだった。

「で、今のはなんという技にしましょうか？」

セラが俺を見ながら言う。その期待の目はやめてほしい。

「そうだなー。飛燕瞬連斬……とか？」

「それ、ゲームだろ！」

やっぱりバレたか。セラもこの技名を気に入っていたが、すごく残念そうにしていた。

「じゃあ、お前は何かあるんか？」

「燕返しにかっこいい名前を足して——絶氷、燕返し——とか？」

「ほう」

セラが気に入ったようだ。

「天上下下、燕返し——とか」
「ほほう」

ご満悦だ。

「神技、ニーベルン燕返し！」
「「はあ……」」

俺もガツカリだ。

「「今すぐ斬り殺したい」」
「二人してハモってんじゃねー！」

俺も花影血桜を取り出す。

「ただ斬るだけじゃ地味過ぎるよな。なんかこう、レーザー的なものとかでないのか？」

レーザーを出すとか、なんかカッコいいかも。

「レーザーが出るなら、剣は不要ではないですか」
「確かに」

「まあ、お前の最強の武器はそのポインだしな」

歩がバカな発言をすると、歩の体に電流が走った。

「レーザー……出るじゃん」

「ただの雷撃ですよ。忍術です。——私は得意ではないですが」
「忍術って、かけーな！」

ヤバい、吸血忍者になりたくなつたかも。

そこで、俺はあることを思いつく。

「それなら、斬った後に雷撃を落とすとカッコよくないか？」
「こっ、ですか？」

歩の背中を斬りつけた後、電撃を流す。容赦ないセラだ。

「名前はどうしましょうか？」

「よしっ、獣爪雷斬にしよう」

「それもゲームだろ！」

やっぱりダメか。あのRPGの技っていつもカッコいいよなー。

「それなら、なんか龍とか神みたいな文字がはいるとカッコよくなるよな」

「それなら、龍牙雷神衝——とかは」

「ほほう」

歩がつけた技名に決まった。

そのあとはずっと『龍牙雷神衝』をマスターするために、歩は斬られて電流を流されまくった。

「ただいまー。アユム——なんだか日焼けしたな」

ハルナが帰ってきて、やっぱり歩の焦げ姿を先に言ってきた。

「で、どうだった？」

「刀のもいたのか？ まあ、メガ口の偽物は、ヴィリエの人間だけで駆逐できそうだって話だった」

「つてことは、俺達の出番はないってことだな。」

「大先生は？」

「見つからないみたい」

「歩は大先生のことを聞くが、何も手掛かりはないそうさ。」

「ハルナ、二人で探しに行くか」

「二人つきりで？ で、でデートなんかしないからなっ！」

「トモノリでも呼ぶか？」

「やだ！ し、しゃーなしだから……二人だけでいってやる」

「ハルナは急いで身支度をして、歩と一緒に出て行った。」

「居間には俺とセラの二人きりだ。」

「騒がしい奴がいないので、しばらく無言が続く。」

「吸血忍者に会いたくなかったから、行かなかったのか？」

「はい、その通りです」

「また沈黙が訪れる。」

「——だあー、もう！ 我慢できない。」

「よしっ、俺達もどっか行くぞ！」

「はい？」

「見つかなければいいんだろ。なら、見つからないように気を付

ければいいだけだ!」

俺はセラの手を掴み、強引に立たせる。

「行くぞ!」

「……強引ですね」

「なんとも言え」

俺達は歩の家を後にした。

「さて、出たのはいいが、どこに行くか」

「なるべく、仲間たちのいない所がいいのですが」

適当に見回す俺。そこで、一つの大きい建物が目に入った。

「よし、デパートに行こう」

「そこなら、安全かもしれませんね」

デパートの中に入る。

「今思うと、お前と二人で出かけるのって初めてじゃね?」

「……そうですね」

セラは微かに頬を赤くしている。

「さてと、お前、何か欲しいものとかあるか?」

「なんですか、急に?」

「いや、せっかく来たんだ。なにか買ってやるよ」

「……それなら、服がほしいですね」
「じゃあ、早速行くか」

婦人服売り場に直行した。

デパートには三階と四階に服が売っている。

俺達は四階に移動した。

セラは服を目の当たりにすると、すぐに服を選び始めた。

「彼女さんですか？」

店員にそう言われた。

「い、いえ、違います」

セラが否定する。

「二人ともお似合いですよ」

店員に言われ、顔を赤くするセラ。なんだか微笑ましい。

「セラ、決まったのか？」

「ええ、それじゃあ、これをお願いします」

セラの選んだ服は、五千円だった。

それくらいなら、許容範囲内だ。

レジまで向かおうとすると、俺はある人物を見かえた。

「ユー？」

ユーだった。あんな籠手とアーマーを付けているのはユーしかないな

い。

「どうかしましたか？」

「悪い、これ、またにしてくれ」

セラがユーを見ると、すんなり了承してくれた。
俺とセラは、三階に降りるユーの後を追った。

第二十九話

三階に降りた時に、歩とハルナが俺達の後をつけていた。今はユーを追いかけているのであまり気にしなかった。

デパートを出て、だんだん人気のない場所に連れてこられると、いつの間にか住宅街へ入っていた。

「ヘルサイズ殿！」

セラが叫ぶ。それと同時に空からシロクマが降って来た。俺とセラはシロクマを斬るが、手応えはない。

「この変態シロクマ——」

「シロクマじゃなかと。アルビノパンダじゃけえ」

「しゃべるのかよっ！」

歩達もシロクマを目撃して、ハルナが体を震わせた。

「アイツ——AAA級メガロ『連邦の——あ、白い熊』クマツチだ！ あ、クマツチじゃないや——え〜」

——迷うなら言つなよ！ 心の中でツッコむ。

「あー熊……男爵！ あー熊男爵だっ！」

わかなくなったら『男爵』と付ける。あー熊男爵って……。

「ユーっ！」

歩が叫ぶが、ちらりとこちらを見るだけでまたどこかへ行ってしまう。

「歩、先に行け！」

「すまない」

歩はユーを追いかけるが、またもやメガロに立ちふさがれてしまう。しかも、今度はホワイトタイガーだ。

「ちつ。とつととやられろっ！」

花影血桜の力を発動し、黒い影で『あー熊男爵』を切り刻む。やられかけて、シロクマは逃げ出した。

血桜を鞘に納めると、さっきまでの影は消滅した。

セラを見るが、どうやら血が不足しているようでフラフラだ。

「セラフィム、大丈夫か？」

「血が足りませんね。早くハルナの元に」

セラはフラフラなので、俺がおんぶする。セラも素直に受け入れてくれた。

「ハルナっ！」

少し走ると歩とハルナがホワイトタイガーに足止めされ、俺達がやってくると思座に逃げた。

「ハルナ、すまないがセラに血を分けてくれ」

「お前ら、二人でユーを探していたのか？」

「……まあな……」

デパートで偶然見かけたとは言えなかったので、嘘をついた。

「ハルナ」

「わかった。しゃーなしだからな」

セラはそのままハルナにキスをした。

相変わらず、これにはなれない。つい、前のことを思い出してしまう。

ユ一を最後に見たマンションの六階に着いた。

「あそこかつ！」

歩が入り口から入ろうとするが、セラが翼を羽ばたかせみんなを制止させる。

「飛びますよ！」

ハルナと歩を両脇に抱え、俺はセラの足を掴むしかなかった。

「春樹、絶対に上を見ないでください」

「上？」

そう言われるとじっくり見てしまうのが人間。

見上げると、セラのショーツが見えてしまった。

色は影がかかってよく見えなかった。

「見てませんよね」
「見てないぞ」

俺は六階に上がるまで、ずっと下を見ていた。下の景色はかなり怖かった。

窓から侵入すると、そこには倒れているホワイトタイガーとシロクマ、大先生が縄で縛られている。

そして、ユーの首を掴んでいる夜の王だ。

「ユーを離せ」

歩が声を荒げて言う。

「ダメだね。手を離せば、どうせまた冥界へ帰ってしまうだろ。――ね？」

夜の王はユーに顔を向かるが、ユーはただ鋭い視線をぶつけているだけだ。

俺とセラは剣を構え、ハルナは大先生の下に走る。

夜の王はめんどくさそうに霧を放出する。

――あいつ、逃げる気か？

ユーが手を払うと、霧が弾き飛ばされた。

どうやら、ユーのガントレットには魔法を打ち消す効果があるらしい。

――だから、血桜の効果も効かなかったのか。

以前、ユーに渡したときに何事もなかった理由がわかった。

「ユークリウッド、いらないことをしてはいけないよ」

消えることのできなくなった夜の王に、セラが剣を突き刺す。

だが、ゾンビなので痛みも感じられない。

「君のせいで——逃げるために魔装兵器とやらを使わざるを得なくなってしまうた」

霧の中から時限爆弾のようなものが現れた。

ユーを抱えたまま、窓の外から飛び出す夜の王。

セラは夜の王を追って行った。

「大先生にも——爆弾ついてる……どうしよう」

ハルナが珍しい言葉を口にした。どうしよう——と。
くそっ、どうすればいいんだ。

「魔法爆弾はあ、攻撃呪文の一つを盛り込んだものです。魔装兵器はあ、アユムさんみたいな魔法の才能がない人間にい、大量殺戮用の呪文をたくさん盛り込んだものです」

そんな長い説明はいいから、いったいどうすればいいんだよ！

俺は何か方法がないか考えていたが、全然思いつかなかったので窓の方を見してみる。

まだ新しいマンションだ。爆発すれば、死人も出るだろう。

「その魔装兵器とやらは、誰が作ったんだ？」

「私の友人ですよ。生体の宝珠もお、実はその友人が作ったものです」

「ああ、もう！ 何言ってるのかさっぱりわかんねえ！」

「この爆弾を何とかするにはあ、春樹さんの魔法無効化で取りはずした後にい、その刀で斬れば問題ありませんよあ」

それならそうと、早く言ってくれよ。

大先生についている爆弾を触ると、すんなり取れることができた。俺達は急いで屋上に行った。

「歩、思いっきり投げしてくれ」

「ああ、——六〇〇パーセント！」

爆弾が上空に投げ飛ばされた。小さくて見えにくくなっている。

「——鏡心・朧！」

奥義の鏡心に、花影血桜の力を使った強力な技。上空で切られた爆弾は、大きな規模の爆発だった。

第二十九話（後書き）

鏡心・朧——居合の鏡心を離れた場所でもその場から動くことなく
相手を斬ることの　　できる技。花影血桜の力を使う。

第三十話（前書き）

やっと三十話です……

第三十話

爆発を受けずに済んだ俺達は、一旦歩の家に戻った。
居間には既にセラもいた。

「何とかなったのはいいんですがあ、私はあの魔法爆弾を十四個作らされましたー」

居間に座りながら大先生が言う。

「ってことは、あと十二個もあるのか」

「はい、それを見つけないことにはあ、追いつめても大変なことになりますねえ」

「じゃあ、まずはそれを見つけることから」

「それはあ、私が魔装少女を招集して当たることにしますう」

「私も――吸血忍者に報告書を出しておきました」

セラは疲れている様子だ。

「そんじゃ、俺達も――」

「そこでご相談ですがあ、全ての魔法爆弾を探し出す間、アユムさんと春樹さんを鍛えようと思うんですよあ」

「大先生自ら！　すごいぞアユムに刀の」

ハルナの目が輝いている。

「あー、悪いが俺はパス」

「どうしてですかあ？」

「特訓とか……夏休みだけでいいし……」

思い出すだけでも忌々しい。

俺は毎年夏休みになるとじいちゃんから特訓の命令が下る。

一週間くらいだが、その特訓内容は地獄だ。

軽くトラウマになりかけているので、思い出すのはよそう。

明後日の方向を向いている俺を見て、大先生は「しょうがないですねえ」と引き下がってくれた。

俺達は、次の日に備えて早めに寝た。

朝五時、二人の足音と共に目覚めた。

玄関から出ようとしているのは歩と大先生だ。

「もう特訓するのか？」

「ああ、まあな」

「春樹さんも特訓、見てみますかあ？」

見るくらいならいいかと思い、血桜を持って三人で墓場まで行った。

「さて、アユムさん。聞きたいことがあるんじゃないですかあ？」

わざわざハルナを遠ざけたところを見るとお、——私が何を企んでいるか、ですかねえ」

「あんたは何のために魔装兵器を作って、どうしてそれを友紀に入れて、それを使って何をするつもりだったのかだ」

歩達の会話を、墓石に座りながら聞いている。

「一つ目の答えは、作ったのは私ではなく、私の友人です。二つ目はあ、戦いで傷ついた彼女を救う術になると思ったから——三つ目

「はあ」

少し考えた後、俺達を見る。

「ヴィリエを倒すためですよ」

あれ？ ヴィリエって大先生が住んでるところじゃあ。

「どうして？」

「私はもう——戦争したくないからです」

大先生の説明によると、ヴィリエと冥界では昔から戦っているらしい。

ヴィリエは、他の世界を取り込んで国を栄えている。

つまり、ヴィリエはこの世界も侵略する可能性もあるということだ。

「目的は分かった。それは応援したいと思う。——で、その凄腕の友人は何者なんだ？」

「私の幼馴染です。聞いたことありませんか？ 悪魔男爵って」

悪魔男爵って実在してたんだ。それには驚かされた。

「さあ、そろそろ始めましょう。彼のスピードはたいしたことありません。まずはそれに慣れるところから——」

やっと修業が始まった。

「ではあ、全部かわして下さいねえ」

いきなり歩の顎を蹴り上げられた。

その後も連続で殴る。見えないことはない。集中すれば見れるくらいの速さだ。

「春樹さん、今の連打は見えますかあ？」

「普通に見えますよ」

「マジ！」

近くにいる方がよく見えると思うのだが、歩にはよく見えならしい。

大先生はいきなり小石を投げてきたので、俺は顔を曲げてかわす。

「確かに、見えてますねえ。それならこの特訓は必要ありませんね」

俺は素振りをしながら、大先生が時々投げてくる小石をかわしたり叩き落したりしながら特訓を受けてしまった。

疲れ果てた歩を引きずりながら家に戻った。

歩を家に置いていくと、俺は急いで自分の家に戻った。

シャワーをして、着替えに来たのだ。

夏休みなので、今日は何もすることがない。

俺は居間でウトウトし始め、終いにはそこで寝てしまった。

「春樹君、起きてください」

幼馴染の声がする。目を開けると、そこには瀬奈がいた。

瀬奈の隣にはエコバッグが置いてあり、中には野菜が入っていた。

「こんなところで寝てると、風邪をひきますよ」

「大丈夫だ、今は夏だし、別に寒くもないぞ」

時計を見ると、もう夜の七時になっていた。
携帯を見ると、着信履歴が瀬奈で埋まっていた。

「今日は、私がご飯を作りますよ」

「いいよ、なんか食べに行こうぜ」

「ダメです。ファミレスは栄養が偏ってしまうし、それに……太っちゃいますから」

太るって……。お前の体のどこが太っているというんだ。

太っているのはお前の胸だけだ！　と言おうとしたが、殺されそうなので言わないでおく。

「しょうがない。じゃあ、何か手伝うことはあるか？」

「春樹君、疲れてますからテレビでも見ててください」

めっちゃええ子やなあー。久しぶりの安息にうつすら涙が出てしまった。

料理ができるまで、俺はベランダで花影血桜を見ていた。

——これにはまだ、隠されている力があるかもしれない。
今までの戦いで使ってきたが、まだ完全ではないと剣士の直感でわかる。

——明日、大先生に聞いてみよう。

そろそろ瀬奈の料理が出来上がっている頃だ。

俺は血桜を鞘に納め、瀬奈と一緒に夕食を食べた。

その後は瀬奈を家まで送り、自宅に戻った後、そのままベッドにダイブした。

第三十話（後書き）

三十話まで書けました。二巻目もあと少しです。

第三十一話

翌日、俺は昨日と同じ時間に墓場へ行った。

そこでは既に特訓は始まっており、歩はあのコスプレ姿になっていた。

魔装少女になっても大先生にはかなわず、肩で息をしていた。

「春樹さん、いいところにきましたあ。アユムさん、春樹さんの動きをよく見てくださいね」

いきなり大先生が俺の元に現れて、咄嗟に俺は大先生の繰り出す拳を受け流して、後ろに回り込んだ。

「な、何すんだよ！」

「さすがは春樹さんですねえ。アユムさん、あなたは力がありますけどお、技術が足りません」

「つまり、俺はもう少し技を工夫しろっていうんですか？」

「そういうことです」

「たく、いきなりなんなんだよ。」

特訓が終わったらしいので、大先生に花影血桜のことを聞いてみた。

「大先生、花影血桜のことで聞きたいことがあるんだが」

「春樹さんは、どこまで使いこなしましたかあ？」

「影を少しだけ操れるのと、魔力を遠くに放出するくらいだけど」

「すごいですねえ、もうそこまでいくなんて」

大先生は感心している。

「ですがあ、あまり力を使いすぎないでくださいねえ」

「どういうことだ？」

「魔法抵抗力が高いあなたでも、力に飲み込まれてしまう可能性がありますからあ」

飲み込まれる。その言葉を聞いて思わず唾を飲んだ。

「わかった。でも、もしの時は使わせてもらうぜ」

「気を付けてください」

大先生は二人を見た。

「もし、あの霧が男を包む量あればあ、アユムさんと春樹さんの勝つ確率はゼロです」

「逃げられるからか？」

「いえいえ」。あの霧にはあ、物体を移動させます。つまり、体を覆われたらざ、どんな攻撃も通らないでしょう」

「で、どうすればいいんだ？」

「わかりませんねえ。私なら風で払いますけどあ、風の魔法は難しいですよ」

——霧を何とかしないとイケないのか。

それだけ聞いて、俺は家に帰った。

次の日の夜、自宅で携帯が鳴った。

「もしもし」

「春樹、大変です。一千ほどの妖怪が出現しました！」

「……お前は行くのか？」

「——さすがに、事態が事態ですので」

しょうがない。いつもの口癖を言ってから携帯を切った。
急いで動きやすい服装に着替えて、電車に乗った。

都心では、車道にメガロがたくさんいた。

一般人は撮影をしているのだと思い込んでおり、中には吸血忍者が
手を出せないでいた。

一般人に被害がでると思ったのだろう。

「くそつ。夜の王はどこにいるんだ！」

辺りを見回すが、そんな奴はどこにも居ない。

空を見上げると、流星が降って来た。

よく見ると、そいつ等は魔装少女だ。

隕石が降って来たと思う一般人は、すぐさま逃げた。

——さてよ。もしかしたら……。

高い建物を見てみると、一際デカいものがある。

東京タワーだ。

——もしかしたら、夜の王は俺達を見下ろしているんじゃないか。
俺はそれに賭けて、東京タワーへ向かった。

人は誰もいないが、入り口は開いていた。

「春樹？」

振り向くと、歩も東京タワーに入ろうとしていたのだ。

「お前も気づいていたか。きっと、夜の王はここにいると思っぜ」

「お前もいくのか？」

「ま、乗りかかった船だしな」

それ以上の言葉を交わすことなく、俺達はエレベーターで展望台に上った。

やはり、特別展望台にユーはいた。

「よく来たね」

後ろから声を掛けられ、歩はボストンバッグからチェーンソーを、俺は竹刀袋から花影血桜を取り出して構える。

「見ててごらん、やっとやりたかったことが始まるからさ」

突如、外から爆音が聞こえた。

窓の外から見てみると、どうやら規模の小さい爆発らしい。

規模の小さい爆発でも、東京は燃えていた。

「思ったより早かったね。相変わらず魔装少女は血気が盛んだ」

「どういうことだ？ 何を言っている？」

「まさか……お前」

歩はまだ気づかないが、俺ある一つの答えが見つかった。

「戦争でもするつもりかよ！」

「話が早くて助かる。メガロ、魔装少女、吸血忍者。そのうちの誰

かが起こしたと思ったら、どうなると思う？」

最悪だな。

「ちなみにメガロを呼んだのはユークリウッドだ。俺が呼ばせた」

ユーは泣いていた。焦るなよ、俺。

「俺の作ったメガロはまだ残っている——まだまだこの街を焼けるんだ。ユークリウッド、俺を殺したくなっただろう」

『憎い 殺したいほど』

「そうだろう！ そうだろう！」

『でも 私は あなたを もう友を殺したくない』

「——そう、か。相変わらずだね。鎌で痛めつけるのは出来ても殺すまではしない。いつも上辺だけ。——だったら、その気になるまで君の美しい顔を楽しむでしょう」

我慢の限界だった歩が、飛び出した。

「ユーの笑顔を、一番可愛い顔を！ お前は見たことがないのかよっ！」

「おい、待てっ！」

チエーンソーを投げた歩は、そのまま走り出した。

夜の王が見えなくなっているすきに、拳を懐に入れたが、夜の王はそれをくらいながらも歩にアップパーカートを繰り出した。

そして、地面に着く前に追い打ちをかけられ、俺が歩をキャッチする。

「ユークリウッド、今——反応したね？」

確かに、歩が殴られた後微かに表情が揺らいだような気がした。

「どうやら、君らを痛めつければ、ユークリウッドは悲しんでくれるだろうね」

「ちっ」

俺は舌打ちを打つ。

「大先生、悪いが早速使わせてもらっぜ」

あまり使うなと言われていた花影血桜の力を解放した。
俺の周りに黒い影が現れる。

「歩、二人で戦わないとあいつには勝てないぞ」
「わかってる！」

歩は呪文を唱え、コスプレ姿になった。
二人で夜の王に突っ込んだ。
俺が後ろに回り込み、歩が前で攻撃をする。
歩が殴られると同時に俺が斬りつける。

「——地衝！」

地面すれすれから刀を打ち上げる。それに血桜の力を加えて衝撃波を放つ。

当たるかと思つたら、夜の王は霧で消え、衝撃波は壁に当たった。

「くそっ！」

俺は影を集中して辺りに張る。
影が一瞬揺らいだ。

「そこだっ！」

手応えあり。夜の王の手は斬れた。

「なかなかやるね。その影を結界にして、動きを探知する。君なら俺を殺せそうだ」

「咄嗟の思いつきだったけど、なんとかあったな」

歩が俺の後ろから突っ込み、夜の王の服を掴んだ。

「くらええええっ！」

まさかの頭突きだった。

怒った夜の王は歩を蹴り飛ばし、距離を離れた。

「ユークリウッドに見てもらうのは——やめだ」

そう言っ、部屋中に霧が充満した。

『もし、あの霧が男を包む量あれば、アユムさんと春樹さんの勝
つ確率はゼロです』

大先生が言っていたことを思い出した。
おいおい、マズくねえ。

第三十二話

夜の王は霧の中に消えた。

俺はさっきやった結界を周りに張ったが、反応はない。
反応はしていなかったのに、俺の腹に拳が入った。

「がっ！」

相手の攻撃が早すぎたのだ。まだ、この力をコントロールしきれていなかった。
遠くまで吹っ飛ばされた俺は壁に激突した。

「春樹っ！」

「三〇〇%の力で殴らせてもらった。もう死んだかな？」

歩は春樹の元へ向かおうとしたが、夜の王によって阻止される。
夜の王は歩を霧に隠れながら攻撃をし、膝を折られてしまった。
彼はもう動けない。このまま夜の王に体を潰されてしまうのか、そう思った。

「アユム！」

突如、よく聞く女の子の声がした。

「秘剣、燕返し！」

そして、別の人が叫んだ。

「アユムっ！ 居るんだろっ！ アユムっ！」

「ヘルサイズ殿を確保しましたっ！ 歩、逃げますよっ！」

「待ってくれ、まだ春樹が中に！」

二人を呼び止めると、セラが大きく反応して歩に近づいた。

「どこにいますのすかっ！ 早く言いなさいっ！」

「彼なら死んだよ。普通の人間が三〇〇%の力で殴り飛ばされたのなら、死ぬのは当たり前だ」

夜の王が三人に近づく。

セラはそれを聞いて、剣を持つ手に力が入った。

「貴様ああああ！」

セラが攻撃するが、夜の王はそれを霧で消えてセラの後ろに回り込み殴る。

吹っ飛ばされたが、なんとか着地することができた。

「歩、ヘルサイズ殿を連れて逃げてください」

「ダメだ。俺がこいつを倒す」

「耐えるね。よし——君が意識を失ったら、後ろの二人を殺すしよう。すぐに、あいつみたいに殺してあげるよ」

「——あいつつてのは……誰のことだ？」

夜の王は後ろを振り向いた。

そこには、死んだと思っていた春樹の姿だった。

「なぜ、生きているんだい？」

夜の王の問いかけに、俺は上を脱いでみんなに見せた。

「なるほど……そういうことか」

俺の体には黒い影が張り巡らされている。

俺はあの時、結界を張っていただけじゃなくて、自分にも防御壁を張っていたのだ。

そして案の定、夜の王の攻撃をまともにくらって意識を少し失ったが、今俺は生きている。

「春樹、よかった」

「心配してくれたのか？」

「あ、当たり前です！ みんなだってそうです」

セラと歩はボロボロだった。さて、この状況をどうすればいいか。

「春樹、頼みがある」

「何だ？ 俺だってもう体力の限界だぞ」

歩は夜の王には聞こえない程度の声で言う。

「——なるほどね。しょうがない、お前を信じてみるか」

その策はいいと思う。だが、その作戦は一度きりだろう。次は二度と使えないだろう。

俺が先頭に立ち、夜の王に向かう。

夜の王は霧で消えるが、すぐさま、影を張り探知した。

「そこだっ！」

手応えあり。

「俺はゾンビだ。そんなのは通用しない」
「いや、これでいいんだ」

俺は夜の王を掴んだ。俺の魔法抵抗により霧に逃げ隠れることができない。

俺を殴ろうとする瞬間、歩が夜の王の前に現れ右手を突き出す。

「シャラララランっ！」

手から光を発した。

俺もモロにくらい、目が見えなくなった。

——なんだよ、その呪文はっ！

もう少しカッコいい呪文かと思った。

歩が夜の王を殴り続けている音が聞こえる。

「うあああああああっ！」

殴りながら叫ぶ歩。血がビチャビチャと飛び散る音がする。

しばらくすると、歩の動きが終わった。

やっと目を開けるようになった俺は、開いてみると歩がユーに抱きつかれていた。

きつと、ユーが止めたのだろう。

「ユー、ク、リ——ウッド」

血を吐きながらユーを呼びかける。彼はもうしゃべるのもやっただろう。

「死なせて——くれ」

夜の王は懇願した。このような姿でも生きているのだ。死ぬより辛いだろう。

ユーは考えた後、強くうなづいた。

「ユークリウッド、俺が死んだら、ペンギンのメガロにしてくれないか？」

ペンギンなんて、また可愛いメガロを。

「俺は、ペンギンが好きなんだ」

夜の王の笑い声が聞こえた。そこで、久しぶりに聞いたような声をする。

「ええ、知っている」

ただ、それだけを言った。歩は少し不機嫌そうな面だった。

「やっと終わりましたね」

セラが俺の隣に立つ。俺はもう立つのがやっとだ。夜の王の体は白い粒子となって空气中に散った。ユーは何かを持ってこちらにやってくる。

『兵器の起爆装置』

目覚まし時計の形をした装置だった。

「ちょっと貸して」

ハルナが奪い取る。それを見てふむふむと頷く。

「これが起爆で、こっちが解除だなっ！」

天才はポチッと解除ボタンを押した。

……時計は止まらない。

「まさか、壊れているのか？」

「……あ、やばいかも」

「うおおい！」

「だ、大丈夫だ！ 爆弾の位置ならわかるから！」

ハルナはそう言いながら窓の外へ指を向ける。

「あのへん」

「あのへんって——どこだよ」

「あの辺りは、我々保守派の吸血忍者が妖怪と戦っている場所ですね」

「しょうがない。んじゃ、行きますか」

「春樹も行くのですか？」

「もし、爆弾が間に合わなかったら、前みたいになるかもしれないからな」

大先生に着いていた爆弾を取り除いた時のことを話した。それを聞いたセラは納得してくれた。

「しっかりつかまっけてください」

ハルナと俺を両脇に抱え、東京タワーから跳んだ。
落ちるときは結構怖かった。

第三十三話（前書き）

やっと三巻の終了です。

第三十三話

爆弾の近くまで行くと、ハルナが爆弾を見た。

「ダメだ、解除する時間がない！」

「それじゃあ、どうすればいいんだ？」

「この爆弾は雷撃呪文に弱いから、それさえ使えば」

ハルナは現在魔法が使えない。ユーに魔力を奪われているからだ。

俺はとりあえず、爆弾をそこから取り外す。

爆弾を持つて、どうすればいいかと考える。

そこで、あることを思い出して、セラを見る。

——そういえばセラって雷撃使えたじゃん。

あの時の修行で新技を習得したんだっけ。

「爆弾を渡して、私から離れてください」

俺は爆弾を渡して、ハルナと一緒に離れる。

セラが高くジャンプする。

丁度歩とユーもこちらにやって来た。

「龍牙雷神衝っ！」

歩が名付けた技だ。そのまま引用するとは思わなかった。
歩はそれを聞いて激しく悶えている。それには同情する。

「天使」

翼をはためかせゆっくりと降り立ったセラを見て、誰かが言った。

俺はその光景に見惚れてしまった。おそらく、歩もハルナもそうだろう。

ユーは手を挙げる。すると、地上にいたメガロたちが一斉に空へ登って行った。

我に返った者たちが、メガロを追いかけようとしたが、

「追う必要はない！」

「放っておきましょう」

その声はどちらも聞いたことのある声だ。以前戦った女生徒——サラスと、大先生だ。

「撤収です」

大先生の命令に従って、魔装少女たちがキラキラと発光して消えた。

「奴らは何者なのだ？ 我々よりも——遥かに強い」

サラスが俺の隣にいる歩に聞いてきた。

「って、なんで俺に聞くんだよ」

「同じ格好をしているからだ」

ごもつとも。サラスは汚物を見るような目で歩を見る。

「お前らと同じ——怪物退治の専門家だよ」

「戯言で誤魔化すつもりか。——まあ、良いだろう——セラフィム！」

視線を向けずに声をかける。

その名前を聞かれたと同時に周囲からヒソヒソと、嫌な単語が聞こえたりする。

サラスはセラが前に来ると、セラに向かって片膝と拳を地面につけた。

「感謝する——助かった」

「セラフィム——本当にありがとうっ！」

トモノリもやってきてセラにお礼した後、サラスと同じように膝をつく。

それに続き、吸血忍者全員がセラに向けて膝をついた。

「頭をお上げください！ 私は吸血忍者の掟を破ったも身——」

サラスはすつと立ちあがると、何故かセラに冷ややかな視線を送る。

「勘違いするなっ！ 私は吸血忍者に膝をついたのではない。命を救ってくれた天使へ膝をついたのだ！」

「ツンデレかよっ！」

俺がツツコムと、サラスは顔を赤くした。

「ええいうるさいっ！ 殺されたいのかっ！ 総員撤収だっ！ さっさとしろっ！」

「じゃあな、相川！」

トモノリが大きく手を振りながら去っていく。他の吸血忍者は既に見えない。

「最後にセラフィム、一つだけ聞いておきたい」

「なにか？」

「何故、我々を助けた？ 貴様を殺したい連中も居たのだぞ？」

「あなたにしては愚問を投げつけてきますね——仲間だからですよ」

「愚問ではない。以前の貴様ならば、そこで市民を守るのが吸血忍者の掟だからと答えていただろう」

「そう、ですかね」

「ああ、そうだ貴様が少し羨ましく思うよ。任務や掟より、友のために行動できる貴様が——」

俺達がいるのをやっと気づき、はつとした顔でこっちを見る。

「貴様——私を愚弄しているな」

「いやー、お前素直じゃないなあと思って」

「いや、サラスも案外、可愛いなって」

言い終わる前に、俺と歩に水の手裏剣が飛んできたので歩の後ろに隠れる。

「なにしゃがる！ 俺に当たったら死んでたぞ！」

「あの戦いで生きていくくらいなら、これくらいでは死なん！ それに、貴様に愛称で呼ばれたくない！」

でた、ツンデレ発言。

「じゃあ、なんて呼べばいいんだ？ お前、学校の生徒だろ」

顔を赤らめて、口ごもりながら言った。

「星川……輝羅々……だ」

「あははははっ！」

思わず笑ってしまった。

「キララっ！ 可愛すぎるだろっ！ 漫画家かよっ！」

歩も笑っている。顔を赤くしたサラスは、叫んだ。

「ええい！ 愚弄するなど言っておるだろう！ 殺してやる！ 今すぐ！ 総員！ 撤収準備をやめろ！ 今、優先順位が変わった！」

げ、マズイ。

俺達は一斉にこの場から逃げた。

翌日、俺は自宅のベッドで横になっている。

「……痛い」

あの後、リアル鬼ごっこを必死で逃げたのはいいが、家に帰って眠ると、翌日に動けなくなってしまった。

「筋肉痛だ……」

夏休み中でよかった。今日は一日寝ていよう。
俺はまた眠りに入った。

プルルル。

着信音によって目覚め、電話に出る。

「……もしもし？」

『春樹、お前も今すぐ来い！ みんなで演奏をするぞ！』

歩の声だ。なんだろう、俺を道連れにするかのような誘いは。時計を見ると、もう夜の八時だ。

「悪いが、筋肉痛で動けないんだ。またにしてくれ」
『ちっ』

「おいお前今舌打ちしたろ」

『まあいいや。お前、しばらく携帯つけたままにしてろよ』

よくわからないが、とりあえずそのままにしてみる。

すると、携帯から音楽が聞こえてきた。

グダグダだったが、みんなは歩の家で楽しくやっているんだろう。少し羨ましいと思いつつも、ちよつとの間その音楽を楽しんだ。

第三十三話（後書き）

やっと終わりました。

次はオリジナルでいこうと思いますので、投稿が遅れるかもしれませんが。

これまでの話を、不満な点があったら、感想に書いたりしてください。

第三十四話（前書き）

オリジナル編、書いてみました。
おかしなところもあると思いますが、そこは見逃してください。

第三十四話

夏休みも中盤にはいり、俺は机の前であるものを見ている。

「うーん……どうするか？」

毎年恒例の、じいちゃんからの修行の誘いだ。

「……行きたくねー」

行きたくないけど、行かなくてはいけない。

中学の頃、その誘いを無視したらじいちゃん自らやってきて俺を拉致したことがあった。

その時の修行が人生で一番辛かったりする。

「どうかしたのですか？」

「実は、じいちゃんの家に行くことに——って、セラフィム、いつの間に！」

セラが隣で手紙を読んでいた。
いきなり現れてびっくりした。

「ほお、修行ですか」

「そういうこと。これがまた地獄で……」

「面白そうですね。あなたをここまで強くした師が気になります。
私も一緒にいてもいいですか？」

「……別にいいけど、つまらないぞ」
「かまいません」

そこまで言っならしょうがない。

「とりあえず、瀬奈にも言っておくか」

「瀬奈も毎年呼ぶのですか？」

「といっても、今じゃ行きたくないって言っけどな」

携帯で瀬奈に電話すると、一コールで出た。

「もしもし？」

「あー瀬奈。今年の修行は来るか？」

「え、あそこにですか？」

「……そうだけど」

「今年もいいです」

「そうか……セラも来るけ——」

「やっぱり行きます！」

言い切る前に瀬奈のさっきまでとは違う声で言ってきた。
セラと行くのが楽しみなのか？

「そ、そうか。なら、明日の九時に俺ん家来てくれ。着替えとか持
って来いよ」

「わかりました！」

携帯を閉じると、セラがこちらを見ていた。

「どうして瀬奈は露骨に嫌がっていたのですか？」

「あー、実は、俺のじいちゃん、以前瀬奈と行ったとき瀬奈にセク
ハラして、それ以来行きたくなくなっちゃって……。別に嫌いじゃ
ないんだけど、じいちゃんのが苦手になっちゃって」

「なるほど。それなら、私が守ればいいですね」

「悪いな。——そういえば、なんで俺ん家来たんだ？」

「用事がなければ来てはいけないのですか？」

「別にそういう意味で言っただんじゃないけど」

まあいいかと思い、セラは夜まで家にいた。

やはり、一人より誰かがいた方が楽しい。

セラが帰った後は、行きたくない地獄の修行の準備をした。

「……で、なんでお前らまでいるんだ？」

「すみません。ハルナ達に話してしまいました」

駅前では、瀬奈とセラのほかに、ハルナ、ユー、歩がいた。

「刀の、あたしたちをおいていくなよな！」

『春樹の力の源 気になる』

やかましい奴らだ。歩はハルナに引きずられていて、しゃべること
もできない。

本日は晴天。ゾンビにとっては残念な天気だ。

「しょうがない。みんな、行くぞ」

みんなで電車に乗った。

「で、どこに行くんだ？」

「都会の外れにある場所だ」

「ふーん」

それ以上は聞いてこなかった。
俺達は三十分くらい電車で座っていた。

「着いたー！」

ハルナは電車の中でも騒いでいた。元気な奴だ。

ユーはこの暑い中、鎧と籠手を身に付けている。それでも表情を崩さないあたりさすがだと思う。

歩はセラに引きずられている。日陰もない場所じゃ、歩くことさえできない。

瀬奈は俺の隣で水を飲んでいる。暑いからしょうがないだろう。

「飲みますか？」

「ああ、ありがとな」

瀬奈からペットボトルを受け取り、口に着けて飲む。

「……間接キスだな」

『間接キス』

「いちいちそんなの気にしてられるか」

ハルナとユーは俺達を見てそう言う。

子供じゃないんだし、そんなのどうでもいいだろう。

瀬奈は顔を赤くし、セラの方はムっとした表情だ。

「春樹、私のも飲みますか？」

「別にいいよ、さっき飲んだし」

何故か残念がるセラ。みんなはセラに同情している。おかしいこと言ったか？

駅から十分ほど歩くと、都会から外れた大きい和風の家が見えた。

「あそこがじいちゃんの家だ」

その家を指差す。瀬奈以外のみんなは目を見開いていた。

「でけー！」

「でかいな」

『でかい』

まあ、普通の家より三倍はでかいからな。

玄関に入ると、誰も迎えてくれなかった。

みんなを居間まで案内した後、早速道場に行ってみた。

道場の真ん中で誰かが座禅を組んでいた。

「おい、じいちゃん」

俺が近づいてじいちゃんの前に回り込むと、それは人間ではなく人形だった。

「しまった！」

急いで瀬奈達のいる居間まで戻るが、既に遅かった。

「春樹、誰ですか、この人は？」

居間ではじいちゃんがセラに殴られて倒れていた。おそらくセクハラでもしようとしたのだろう。

「悪いな、こいつが俺のじいちゃんだ」

「「ええーっ！」」

ハルナに歩、そこまで驚くことはないだろう。

「おい、じいちゃん。起きろよ」

「ほっほっほ、久しぶりじやの、春樹」

肩を揺すると、むくりと体を起こした。

ダメージをくらっていないかのようにケロリとしている。

「ところで、あの美人さんは誰じゃ？ かなりの強者じゃが」

「とりあえず、紹介しとく。男が歩でチビがハルナ、銀髪がユーで、美人さんにがセラだ」

「そうかの」

じいちゃんはセラの後ろに一瞬で回り込み、セラの尻を撫でた。その動きにみんなは驚愕している。

「なっ！」

「ええ尻じゃのう」

「この、変態！」

セラの回し蹴りを見事にクリーンヒットしたじいちゃんは何事もなかったかのように着地した。

「いい蹴りじやのう。お主ならこいつの嫁にしてもええぞ」

いきなりの発言にセラは赤面した。

「ああ、瀬奈ちゃんは特別じゃぞ。春樹の面倒をいつも見てくれるからの」

「あ、ありがとうございます」

じいちゃんは俺の肩に腕をのせ、俺にしか聞こえない声で話した。

「で、本命はどっちじゃ？ どちらとも美人で巨乳じゃぞ」
「う、うるさいな、どちらでもいいだろ！」

顔を赤くして言う。

じいちゃんは歩達の前に立つ。

「まあよい、お前さん達、何もないとこじゃがゆっくりしてけ」

「ありがとうございます」

「ありがとな！」

『ありがとうございます』

みんなでお礼をする。

「明日から修行を始めるぞ。今日は街でも行って来い」

明日から修行か……。

とりあえず今日は、みんなで街で遊ぶことにした。

第三十四話（後書き）

オリジナルなんて初めて書いたので難しかったです。

第三十五話（前書き）

感想の書き込みがユーザーのみになっていたので制限なしにしました。

第三十五話

「みんな別々に行動しないか？」

日陰のある場所で歩が提案する。

みんなはそれでもかまわないようで、別々にこの街を楽しむことにした。

「春樹君、一緒に行きませんか？」

「いいぞ」

「春樹、私もご一緒してもよろしいですか？」

瀬奈とセラがにらみ合っている。

「んじゃ、三人で行くか」

セラはほっとし、瀬奈はがっかりしていた。

歩の方も、ハルナとユーの三人で行動するらしい。

そして、三人で適当に遊ぶことにした。

瀬奈とセラは一緒に先に歩いている。俺はその後をついていく。先ほども、男性の視線が二人に集まっている。

それはそうだろう。二人はかなりの美人の部類に入るのだから。

「春樹君、早く行きましょう」

「そうですよ。日が暮れてしまいます」

前を歩いていた二人が俺の所に戻ってきて、俺の腕を組む。
左右から胸の感触が凄まじい。
しかも、男性の視線がかなり痛い。

「ちっ、二股かよ」

「男の敵だな」

などの怨嗟の声が俺の耳に入ってくる。

結局、街にあるデパートに入るまですっとうろついていた。

このデパートはいつも行っているところよりもかなり広い。
一日では回りきらない。

「せっかく来たんだから、服でも買うか？」

「そうですね。買ってもらおう約束をしましたので」

「む。どういことですか、春樹君」

セラの言葉を聞いた瀬奈は俺のに近づいた。

「いや、以前二人でデパートに行つて……」

「まさか、デートしたんじゃ」

「いや、そういう意味はなくてだな。遊びのような感じで」

「どういことですか？ あれはデートではなかったのですか？」

「セラフィムも余計なことを言わなくていいから！」

結局、この口論は入り口で十分くらい続いてしまった。

瀬奈にも買ってあげると約束をしてこの場を収めることができた。
現在、二人は服を選んでいる。

ここのデパートは品揃えがよく、今でも二人は迷っている。
俺は適当に座って二人の姿を眺めている。

「平和だなあ」

思わず口にしてしまった。

明日からこんな日常もしばらくおさらばだもんなあ。

「はあ」

ため息をこぼす。

「じゃーん。どうですか、春樹君？」

「どうですか？」

試着室のカーテンを開けて俺に見せる。

「ああ、可愛くていいぞ」

「「か、可愛っ」「」

二人して顔が赤くなった。よく見ると、スカートも新しくなっていた。
た。

——もしかして、上下とも買うのか？

予想通り、二人合わせて四着買わされてしまった。

俺の財布はあと一万円もない状態だ。

その後はファミレスで昼食をとり、適当に遊んでから集合場所に戻
ろうとしたが、道を歩いている途中、俺の知り合いに会ってしまっ

た。

「あれ？ お前、春樹じゃね？」

「ちっ、虎鉄か……」

「てめー、今舌打ちしたろ！」

こいつの名前は武田 虎鉄。織戸みたいなやつだがこれでも剣士だ。遠い親戚の人が剣士なので、その人の弟子になっている。

「お、瀬奈ちゃん、久しぶりっ！」

「お久しぶりです、武田君」

礼儀正しくお辞儀をする瀬奈。

虎鉄は隣にいるセラを見て俺に近づいた。

「おい、なんだよあの美しい女性は？」

「ああ、彼女はセラ、四月に知り合ったんだ」

虎鉄は俺を突き飛ばし、セラに向かった。

「初めまして、俺の名前は武田 虎鉄。セラさん、これからお茶でもしませんか？」

「気持ち悪い。消えてください、このゴミ虫が」

「ぐはあっ！」

出会い頭に罵られて、地面に手をつける。心に深刻なダメージを負ったかもしれない。

「やばい、何か新しい性癖に目覚めてしまったかも」

——そうでもなかった。

「春樹、お前どういうことだっ！ 彼女の瀬奈ちゃんがいるっていうのに」

「別に、瀬奈は彼女でもないんだが……」

「チクショー！ お前だけ羨ましいぞー！」

やかましい奴だ。通行人がお前を見てるぞ。

セラは虎鉄をゴミを見るような目で見ている。

「春樹、早く行きましょう」

「みんな待っているかもしれませんよ」

この場から早く去りたい二人は俺の手を掴み、移動しようとする。

「あー、虎鉄、また会おう」

「てめー、覚えてろよー！」

そんな捨て台詞を残してこの場から去って行った。最後まで騒がしい奴だ。

「……織戸みたいな人でしたね」

「なんか……すまん」

一応セラに謝っておいた。

その後、みんなと合流して虎鉄のことを三人に話した。

「織戸みたいなやつ……ぶっ、一度会ってみたいわ」

歩が笑いをこらえながら言った。

夕食は瀬奈と歩の合同料理だ。

二人とも料理がうまいので、全員が満足していた。

「春樹や、お主明日から修行じゃが、一週間後の大会にも出てもらうぞい」

ご飯を食べながら、じいちゃんが懷から一枚の紙を取り出して俺に渡した。

内容は、剣術大会だった。

「これ……なんだ？」

「じゃから、この大会で優勝でもしてこい。丁度コンビで参加じゃから、セラさんとペアで出場じゃ」

よく見ると、参加条件が二人一組になっていた。
しかも、参加年齢が高校生以上なので今まで知らなかったのも頷ける。

「セラ、一緒に出場してくれるか？」

「面白そうですね、別にかまいませんよ」

セラは少し喜んでいる。他の人と戦えるのがうれしいのだろうか。

「ということで、明日は五時から修行を開始するぞい」

「げっ、五時！　せめて六時くらいから」

「……四時にでもしようかの」

「ぜひ五時からでっ！」

俺はじいちゃんに一度も勝てないだろう。

第三十五話（後書き）

新キャラを登場させることができました。
そのうち、オリキャラの設定でも作っておきます。

第三十六話

翌朝、俺とセラはじいちゃんに連れていかれ、近くの山まで来ていた。

「よし、まずはこの山の周りを一周してもらおうかの」

「おいちよつとまで、一周何メートルあるんだよ？」

「……ざつと二十キロくらいはあるぞ」

もうやだ、帰りたい。

「あと、コレを付けてもらっぞ」

今まで引きずっていた袋から何かを取り出す。
それを持ち上げると、俺の腕に付けた。

「重っ！」

右手が地面に着いてしまった。この重り、五キロはある。

「まだまだあるぞ」

どさどさつと袋から重りが顔を出した。

それを俺の両腕、腰、両足に計五つの重りが俺の体に装着された。

「全部で二十キロ。優勝するためにはそれくらいがんばってもらわないとな」

「この……くそジジイ……」

立っているだけで疲れてしまう。

「セラさんは必要はないのう。お主、春樹より強いじゃろ。もしも
の時、春樹を助けてやってくれ」

「わかりました」

セラは心配そうにこっちを見てくる。

立ち上がり、山の周りを走る。隣でセラも走ってくれている。

「悪いな、こんなことに付き合わせて」

「気にしないでください。春樹と一緒に走れてうれしいですから」

俺の顔が赤くなるのがわかる。よくこんな恥ずかしいことを言える
な。

やはり吸血忍者だからなのか、十キロ走っても息が乱れていない。
俺の方は、この重さに慣れていないため心臓が爆発しそうだ。
時間が早朝でよかったとしみじみ思い知らされる。

「ハア、ハア、ハア……」

「春樹、大丈夫ですか？ 少し休憩でも」

「気にすんな、ここで休んでいたらじいちゃんに笑われる」

セラは持つてきていた水を俺に差し出した。

「飲みますか？」

「ああ、ありがとな」

水を受取り、二、三口飲む。飲んだ後に気づいたが、ペットボトルは既に開いていたのだった。

「あれ、セラフイム、先に飲んだのか？」

「ええ……まあ」

顔を少し赤くさせて言う。セラに返すと、自分も水を飲み始めた。その後も二十キロの重さに耐えながら、一時間半かけて二十キロを走りぬいた。

「つ、疲れた……」

一周走り、自分の重さに耐えきれず地面に寝っころがる。隣にいるセラは凜とした表情で立っている。これが人間と吸血人者の違いなのだろう。

「……おい、これ外れないぞ」

重りを外そうとしたが、一向にとれない。

「ああ、言い忘れておった。そのカギはわしが持っておる」

じいちゃんは俺の目の前に鍵を見せる。

あいにく今の俺には疲れのせいで腕が上がらない。

「大会が進むにつれて、重りを一つずつ外してやるわい」
「くそジジイ、地獄に堕ちろ」

風呂に入るときも重りをつけるのかよ。

「春樹、捕まってください」

セラが寝っころがっている俺に手を差し伸べた。

重い腕を上げ、セラの手を掴んだ。

疲れも少しはとれたようで、なんとか家まで歩くことができる。

「七時までもう少し時間がある。その間は素振りでもするんじゃない」
「……わかったよ」

しぶしぶ頷き、家まで引き返した。

「そういえば、優勝商品ってなんだ？」

今まで聞いたことがなかった。ついなので聞いてみた。

「優勝賞品は、ある刀じゃ」

「刀？」

「詳しくはわからんが、なんでも、かなりの業物らしいぞ」

刀か。どういふのか見てみたいかも。

「それじゃあ、もしセラが来てなかったらパートナーは誰になるんだ？」

「そのことじゃが、たぶん虎鉄君になっておったじゃろ」

「よかったー、セラが来てくれて」

安堵している俺を不思議がっていたセラが聞いてきた。

「あの人は弱いのですか？」

「ああ、少なくとも俺の相手にならないかもな」

セラはなるほど頷いて、また帰り道の方に視線を戻した。

「春樹と一緒に戦えて、私は嬉しいですよ」

顔を向けないまま、言ってくる。セラに顔を向けると、頬がほんのり赤く染まっていた。

俺の顔はたぶん赤くなっているだろう。

家に着いた後、すぐに道場に戻り七時くらいになるまで素振りをしていた。

今日の朝食は瀬奈の作った和食だ。

みなでおいしいご飯を食べる中、なかなか食べられないでいた。茶碗を左手に、箸を右手に持つ体感トレーニングはかなりつらい。つらくなると茶碗をおき休む、それを繰り返しているうちにみんなが食べ終わってしまった。

「春樹君、あーん」

右隣に座っていた瀬奈が俺の口元におかずを運んでくれる。

少し躊躇ったが、このままじゃ食べられないと思ったので口を開けてそれを食べる。瀬奈の料理はほんとにおいしい。

「春樹、あ、あーん」

左隣に座っているセラも恥ずかしそうに俺の口元におかずを運ぶ。

同じようにセラが運んだおかずも食べる。

「——む！」

「……」

瀬奈とセラは睨み合っている。

その視線に耐えきれない俺は急いで腕を動かし、残りのものを全部食べた。

第三十七話

「アユム、早くいくぞっ！」

玄関でハルナが歩を急かす。ハルナの隣ではユーもいる。朝食を食べた後、ハルナとユー、歩の三人は今日も街へ行くようだ。

「わかったわかった」

歩は玄関で靴を履いた。

「夕方ころには戻ってくる」

「お前は楽でいいな」

見送りに来た俺は歩をちやかす。

「……楽なわけないだろ——太陽があるんだからな」

本日も快晴、歩は玄関に立てかけてあった日傘を持った。そして、トボトボと自分の体を守りながら街へ向かった。

——悲惨な奴だ……。

心の中で同情した。

ちなみに、ここの街はすべてを周るのに一週間以上はかかるので、ハルナの性格からして毎日行くだろう。その一週間も晴れ、歩もついていない。

俺は重い体を引きずりながら道場に行き、修行を開始した。

「し……死ぬ……」

「まったく、だらしがないのう」

修行を始めること三時間、昼飯の時間なのでしばらく休憩だ。

じいちゃんは今後からやることがあるので昼飯を食べず外へ行ってしまった。

「春樹、昼食を持ってきました」

「昼食はおにぎりにしました」

瀬奈とセラがおにぎりを持ってきてくれた。……セラ？

「おい、まさかセラが料理をしたんじゃ……」

「安心して下さい、私が見てましたので」

瀬奈はちゃんとわかっていたようだ、セラの料理を。

「そんじゃ、いただきます」

並んでいるおにぎりを見ると、どれも同じだ。

瀬奈が見てくれたので心配はいらないが、つい抵抗してしまう。適当に取り、食べてみると、瀬奈が作る味ではなかった。

「それはセラさんが作ったものですよ」

「マジで！」

爆弾かと思ったら、普通にイケた。若干塩が多いが、それでもうまい。

「セラ、これからは誰かが見てる時に料理を作れ」

そう言った俺に納得がいかないセラだったが、一人で作った料理と比べて頷くしかなかった。

三人だったが、それなりに昼食を楽しめた。

さて、午後の特訓は自主練だが、サボると嫌な予感しかしないのでセラと試合をしていた。
もちろん木刀で。

「秘剣——燕返しっ！」

木刀だから切れ味はないが、当たったら痛い。

俺はなんとか斬撃を受け流して、セラから離れた。

「やはり春樹は直感力がかなり高いですね。この重さで燕返しを受け流すなんて」

「どういうことだ？」

「今まで、春樹は深い傷を負ったことがない。それは自分がどうすればやらなくなるのか瞬時に感じ取っているからです」

言われてみれば、今までの戦いで骨折とかしたことがない。

深手を負ったと言えば、初めてセラと戦った時くらいだろう。といつても、あれはユーが治してくれたけど。

「だけど、あまり実感がないな」

「そうですか……」

セラはいきなり木刀を投げてきた。

「うおっ！」

俺は無意識に体を倒した。

「……あ、危ねえ」

「それが直感です」

なるほど、これが直感。

「さすがセラだな、俺のことがわかってるみたいだったぞ」

「……優勝したいので、そのことを教えただけです」

素直じゃないなあ。

微笑ましく見てるとセラは顔をさらに赤くした。

「オホン」

俺とセラはびっくりして声のする方を見た。

そこには正座をして特訓を見ていた瀬奈だった。

「二人とも、練習はしないんですか？」

ニッコリと笑っているが、中身は笑っていない。

「わ、わかってる」

俺とセラは急いで練習を始めようとするが、突然道場の入り口から男の声がした。

「やつほーっ！ 練習付き合いに来たぜーっ！」

いきなり道場から入って来たのは虎鉄だった。

「あれっ、セラさんじゃないですかー。俺の練習を見てくれるんですか？」

「ちっ」

明らかにいやそうに舌打ちをしている。

「あれ？ どうして武田君が来たんですか？」

「え、だって俺とお前が大会のタッグなんだろう？」

えー、何、じいちゃんそのこと話していなかったの？

セラは不思議そうに俺を見てくる。

「虎鉄、そのことなんだが——」

「心配するな、お前の力を借りずとも優勝してやるさ」

……ウゼーっ！ 何こいつ、自分が俺よりも強いと思ってんの。
今までこいつと戦って一度も負けたこともないぞ、俺。

「あー、虎鉄、実はタッグのことなんだが——」

「セラさん、俺があなたを守りますよ」

聞いちゃいねー。虎鉄はセラに夢中だ。

「春樹のペアは私です。あなたは用無しです」

「へ？」

セラが代わりに言ってくれた。虎鉄はポカンとしている。

「虎鉄、俺はセラとペアを組むからお前とは出場しない」

俺は虎鉄の肩を叩く。

「え、なに、セラさんって強いのか？」

「ああ、俺よりもな」

虎鉄は昨日と同じように俺を突き飛ばしてセラに近づいた。

「セラさん、俺と一緒に——」

「とつとと帰ってくれませんか、犬はとつとと犬小屋に帰りなさい」

グサツと刺さったな、ありゃあ。

虎鉄はダイレクトアタックを受け、心に傷を負ったままフラフラと帰って行った。

「早く始めましょう、時間が惜しい」

「なあ、セラは虎鉄が嫌いなのか？」

「……織戸みたいなやつなのでウザイです」

納得。

俺達は夕飯まで練習をした。

結局じいちゃんも帰って来なかったが、有意義な特訓だった。

第三十八話

地獄の修行も一週間が経ち、本日は剣術大会の日だ。大会は二人一組で行い、トーナメント形式だ。俺達は武闘館の入り口で立っていた。

「うおー、でけーっ！」

ハルナが驚きの表情で言う。

それもそうだ。会場は有名な武闘館でかなり広い。過去にも有名な大会が開かれていたというほどの認知度だ。人はたくさんいる。

「春樹にセラさん、お前さんたちに渡しておくものがある」

じいちゃんはさっきから肩に担いでいた竹刀袋から二本の刀を取り出した。

よく見ると模造刀だ。

「ありがとな」

「ありがとございます」

刀を受け取ると、いまだに重りをつけていた俺でも普通に持ち上げることができた。

これで二十キロ分の重りを取り外したらどうなるのだろうか。

「トーナメント表もらってきたぞ」

歩とユーが対戦表をもらってきてくれた。

俺達の試合は第一試合だった。

『男女のペアは春樹とセラだけ』

ユーに言われた通り、ほかの人のペアを見ると男女のペアは俺達だけだった。

「なんか、嫌な予感がするな」

俺は思わず口にしてしまった。

男から妬みの視線を受けてしまいそうだ。

「春樹、そろそろ時間なので」

「ああ、そうだな。それじゃ、俺達は控え室に行くから」

「がんばれよ」

「がんばれよな」

『がんばって』

「がんばってください」

「がんばるのじゃぞ」

みんなから応援のエールを受取り、俺とセラは控え室に向かった。

大会ではユニフォームなどはない。

自分の動きやすい服装で戦えばいいのだ。

俺の服装は上下とも側面にラインの入った黒いジャージだ。中にはTシャツを着ている。

「セラ、お前、それでいいのか？」

「ええ、これで大丈夫です」

セラの服装はデニムのローライズにキャミソール。
俺や歩達と初めて会った時の服装だ。

「まあ、お前が大丈夫なら構わないんだが」

これ以上言うのはやめにした。

セラはその服装で俺と戦ったからな。

「春樹、二人で優勝しましょう」

「ん、おお、そうだな」

時間になったので二人で試合場に向かう。

『ええー、それでは、第一試合を始めます。両ペアは出てきてください』

放送が会場内に響いた。

俺とセラは一緒に試合場の中央に向かった。
リング内では既に相手ペアがいた。

「こいつがああ藤島家の——」

「あんな美人さんが出るなんて羨ましい」

相手も観客も全員がセラに釘付けだ。

セラだけ私服なのだから目が行ってしまうのは当たり前だろう。
それでもセラは凜とした姿で立っている。そのあたりはさすがと言

つたところだろう。

そして俺に飛び交う嫉妬の視線。

視線で人が殺せるのなら俺は何回死んでいるのだろうか……。

「春樹くん！ がんばってくださいーい！」

瀬奈の声がしたのでそちらの方を向く。

歩とハルナ、ユーもそこで応援してくれていた。

「刀に葉っぱの、負けたら承知しないからなっ！」

『がんばって』

「がんばれよー」

俺は応援に応え、瀬奈達に手を振る。

『ちっ、あんな可愛い子までいるのかよ』

『憎い、あいつが憎いっ！』

『セラさんっ！ がんばってくーださーいねーっ！ 春樹は死ねっ！』

最後のは虎鉄だろう。よし、この試合が終わったらぶっ飛ばそう。

『えー、あなたが妬ましいのでとっとはじめてください』

放送と共にカーンっ、と会場に鳴り響くゴングの音。

——おい、そんな理由で試合開始するなよ！ まだ準備もしていないぞっ！

相手は開始と同時に二人がかりで俺に向かう。

「死ねええええっ！」

悪いが、その程度のスピードなら俺の相手じゃないな。この重さでも勝てそうだ。

セラが一人を抑え、俺はもう一人の方の刀を抑えた。

「おいおい、それだけかよっ！」

俺は相手の刀を打ち上げ、相手を無力化した。

セラの方を見るが、とっくに終わっていたようだ。

『勝負ありっ！ 藤島、セラペアの勝利ッ！』

勝負あり、と放送がはいってもみんなは啞然としていた。

一瞬で終わったからなのか、それともセラがあまりのも強かったのか、それは分からない。

これで俺達は要注意ペアになったのだった。

控え室ではみんなが待っていた。

「春樹君、やりましたね！」

瀬奈が俺にタオルを渡してくれた。その後にセラにもタオルを渡した。

「春樹、一勝したから重りを一つ外すぞい」

じいちゃんは懐から鍵を取り出し、腰に付けた重りを外してくれた。

「おおーっ！　なんだか体が軽くなったぞ！」

重りを一つ外すだけでこうも違いが出るとは思わなかった。

「次は二勝したら足の重りを外すからの」

確かに、片足だけ軽くなってもバランスが崩れてしまっただけだ。それなら二勝して一気に二つ取り外した方が楽だろう。

「春樹、お前体は大丈夫なのか？」

歩が俺の体を気遣う。

「……どうしてだ？」

「お前、昨日の夜中也練習してただろ」

歩がゾンビだから、夜には敏感なのだろう。だから俺が外へ抜け出したのがバレたのか。

「大丈夫だ、体はちゃんと動く」

「それならいいが」

「とりあえず、次の試合でも見に行こうぜ」

「そうですね、ほかの人の戦いも気になります」

よし、それじゃあみんなで出発だ。

みんなで一回戦の試合をすべて見た。セラは、虎鉄の試合だけウザそうに見ていた。

第三十九話

俺達は順調に勝ち進め、ついに準決勝までいった。
そして次の相手というのが、なんと虎鉄ペアだった。

「あの男なら楽勝ですね」

「いや、準決勝まで勝ち進んだんだ。気を抜いたら負けそうだ」

虎鉄も強くなったのだろう。

まさか、あいつがここまで強くなったとは思わなかった。

『それでは、両ペアは前に出てきてください』

虎徹の隣は異様なオーラを放っている人物だ。

この男はさっきまでの試合ですべて一撃で相手を倒していた。
要注意人物はこの男だ。

「……てつとり早く終わらせるよ」

俺に向けて男は言うと同時に俺の前まで一瞬で現れ、腕をめがけて
斬りつけた。

「うおっ！」

ギリギリのところでもバックしてかわすことができた。
それも、俺の直感のおかげだろう。

「セラ、虎鉄の相手は任せた！」

「わかってます」

これで俺とあの男とのサシとなった。

「お前、名前はなんていうんだ？」

「……犬飼いぬかいきょうや恭弥」

犬飼…… よし、覚えた。

「よし、いくぞっ！」

今度は俺から仕掛けた。

相手の首めがけて突きを放つ。それを犬飼は横にかわし反撃する。俺は反撃される時に直感でしゃがみ、犬飼の足を蹴って体制を崩させた。

犬飼は片手で受け身を取り、俺の切り上げを後ろに飛んでかわした。

「……なかなかやるね」

「そいつはどうも」

「……君は強い。だから俺も本気を出すよ」

犬飼は自分の剣を投げて、懷から二つの刀を取り出した。俺の刀の半分くらいの長さで使い勝手がよさそうな刀だ。どうやら、犬飼は二刀流らしい。

「……準備運動は終わりだ。いくよ」

「上等だ、俺も飛ばしていくぜ！」

両者が突っ込む。

春樹の攻撃は、腕に十キロの重りをつけていながらも速い。一秒に三回は斬りつけているだろう。

対して犬飼の方はその攻撃をややすと受け流している。

春樹の一振りを犬飼が片方の刀で軌道を変える。

その瞬間に反撃を試みるが、春樹の方も外された瞬間に態勢を変え、攻撃を防ぐ。

両者とも一歩も退いていない。

どちらかが体力がなくなったほうの負けになるだろう。

体力面でいうと、若干春樹の方が不利だ。

腕に十キロの重りをつけているので一撃の重さは春樹が勝っているが、その一撃を受け流している時点で勝負は見えてしまった。

重りを外せば勝機が見えてくるかもしれないが、生憎その力ギは春樹の祖父、藤島 彦一が持つておるのでダメだ。

この戦いを、観客は静かに見守っている。

誰もがその戦いに見惚れていたのだ。

騒がしいハルナでさえも静かにしていたのだ。

「……」

「っ！」

両者の間合いが離れる。

犬飼は息を切らしているが、春樹の方はもっとすごい。

腕をダランと下げて肩で息をしていた。

重りに耐えきれなかったのだろう。

両者とも相手を睨みつけている。

今は体を休めて、次の攻撃に備えているのだ。

「ハア、ハア、ハア……」

ヤバい、腕が疲れてきた。

片腕五キロずつ付けているので、腕の感覚がなくなってきた。

——せめて、この重りを外せれば……。

腕の重りを見る。相手からはリストバンドのように見えるので、何も思われないと思う。

「——ん？」

よく見ると、カギがかかっていない。

——……まさか。

あのかそジジイ。準決勝前に鍵を外していたのかよ。

心の中で愚痴っていたとき、回復した犬飼が迫って来た。

「ちょ、ちよつとタンマ！」

「……………」

俺の願いが通じてくれたのか、犬飼は攻撃をやめてくれた。

「重りでも外すのかい？ それなら早く外してくれないか」

「気づいていたのか？」

「まあね、後半から腕が下がり始めてきてから違和感を感じたんだ」

俺は言われた通りに、十キロの重りを外して壁際に投げた。
やっと軽くなった。

これなら勝てるかもしれない。

セラと虎鉄をチラリと見ると、既に終わっていた。

余裕でセラの勝ち。虎鉄はのびている。

「春樹、私は手を出しませんので勝ってください」

「ありがとな、セラ」

「汚い真似はしたくないだけです」

セラは俺から離れてこの勝負を見る。

「さて、これからが俺の本気だ。いくぞ！」

「いいね、はやく始めよう」

犬飼が迫って来た。

俺は息を吐いて心を落ち着ける。

構えながらゆつくりと進んでいく。

犬飼が両手で斬りつけてくる。

「藤島流——松風」

歩きながら犬飼の攻撃を受け流し、その隙に反撃をした。

両者とも敵に背後を見せながら動かない。

犬飼が倒れる音がした。

俺は振り向いてこう言った。

「俺の勝ちだ」

観客の歓声が聞こえた。

「終わりましたね」

「ああ、勝った、ぞ」

セラに体を預け、そのまま眠りに落ちた。

目を開けると、視線の先にはセラが見えた。

「気が付きましたか？」

「ここは？」

「控え室です。もう少しで瀬奈達も来ると思うのですが」

俺は立ち上がろうとするが、セラに止められる。

「もう少しこのままでいなさい。春樹は疲れてるのですから」

よくよく考えてみると、俺はセラの膝を枕にして眠っていたのか。これが男たちの憧れる膝枕。膝のやわらかさが心地いい。

「春樹君っ！ 大丈夫ですかっ！」

パンツとドアを開けて、瀬奈がやって来た。

この状況を見た瀬奈は恐ろしい殺気を放った。

「何をやっているんですか、春樹君？」

「い、いや、これはだな」

「春樹は動けないので私がこうしているだけです」

別に、動けないわけじゃないんだけど……。

「なら、私が代わります！ セラさんは疲れているので休んでください！」

「これが一番休めますので大丈夫です」

バチバチと睨み合っている。

そこで、歩達がやってきて俺は起き上がった。
セラは少し残念そうだ。

「やったな、春樹」

「すげーな、刀の！」

『さすが』

「ああ、どう——いててっ！」

ハルナに肩を叩かれ、あまりの痛さに思わず声を上げてしまった。

「まったく、あの重さであんな連撃をやったせいじゃの」

じいちゃんが俺の前に立ち、指で肩を突いた。

「いてっ！」

「麻酔のようなものじゃ。少しは動けるようになるが、今日はもう休めておけ」

お、確かに少し動けるようになった。

「決勝は明日行こうじゃ。それまでに体を全快にしておけ」
「わかったよ」

じいちゃんは先に帰ってしまった。

「さて、俺達も帰るか」

「はい、今日の夕食は豪華にしますね」

「お、いいな、早く帰ろうぜ」

今日の夜は賑やかになりそうだと俺は思った。

「そういえば、虎鉄の試合はどうだったんだ？」

俺は見えていなかったのだからなかった。

「一瞬で終わりました」

「……へ？」

「気持ち悪かったんで、一瞬で終わらせました」

虎徹、哀れな奴。

第三十九話（後書き）

松風——相手が突っ込んで来た時、相手に向かって進み攻撃をかわしながら一撃を放つ反撃技。

第四十話（前書き）

四十話までいけました。

ここまで書けたのは正直うれしいです。

第四十話

「え、この会場の他に別の会場があったのか？」

「うん、ユーちゃんが帰りにこれを見つけて」

瀬奈から一枚の紙を渡された。

その紙にはBブロックと書かれていた。

「そういえば、準決勝はお前達のしかやらなかったもんな」

歩がそのことに気づく。確かにそうだった。

自分のブロックの紙を見るが、Aブロックなんて書いてなかった。

『印刷が消えている』

ユーの言った通り、目を凝らして見ると微かに文字が見えた。
ほとんどが空白なので気づかなかった。

「で、決勝は誰なんだ？」

ハルナがBブロックの紙を取り上げ見てみるが、書かれた後は何もなかった。

「わからないじゃんっ！」

ハルナは紙を叩きつけ、俺がそれを拾う。

「つまり、決勝の相手は明日のお楽しみですね」

今度はセラが声を出した。

「ま、今日はゆっくり休むか」

その時、ピンポンと家のチャイムが鳴った。
瀬奈が玄関に向かおうとするので俺が止めた。

「いいよ、じいちゃんが出るから」

「はあ」

二、三分後、居間からじいちゃんがやって来た。

「春樹、お前さんにお客さんじゃぞ」

「客？　なんでこんなところに」

「えらい美人さんが二人も来とったぞ」

「「美人？」」

瀬奈とセラが目を見くして睨みつけてくるが、俺は本当に心当たりがなかった。首を激しく横に振った。

じいちゃんの背後から二人の女の子が出てきた。

……同じ顔が二つ。

どうやら双子らしい。

「あなたが藤島　春樹さんですね？」

髪を後ろで束ねている子が俺に尋ねてきた。

「あー、そうだけど……」

「すみませんが、セラさん以外の人は席を外してくれませんか？」

「なんで？」

「お願いします」

「……しょうがない。悪いが、お前ら居間から出てくれないか？」

人払いをさせてまで重要なことを話すのだろう。

瀬奈は最後まで不満だったが、なんとか出て行ってもらった。

この居間では俺とセラと双子だけとなった。そうなった途端、今まで口を開かなかった子がしゃべりだした。

「あなた、明日の試合で負けてくれないかしら？」

長い髪を左右に分けている子が棄権しろと言ってきた。

「試合って……まさか、あんたらが決勝の」

「そういうことです。自己紹介がまだでしたね。私が月山つきやま 一葉かずはです」

「私が二葉ふたは」

顔が同じでも髪を束ねている数を見れば覚えやすそうだ。

「で、なぜあなた方が私達に試合を負けろと言つのですか？」

当事者のセラが理由を聞いてきた。

「実は……優勝賞品の刀のことですが――」

「あれは私たち一族の刀なのよ」

一葉の言葉を遮って双葉がざくつと答えてくれた。

「は？」

それしか言えなかった。なんで一族の刀が大会の優勝賞品になっているんだよ。

「私たちが生まれるよりも昔、ある盗人が刀を盗んだんです」

「その刀の刀身には月山一族の家紋が入っているの。大会当日に私たちの会場で主催者が刀を抜いて、それで分かったのよ」

一葉、双葉の順で詳しく説明してくれた。

俺達の会場では刀は見なかったので、本当かどうかはわからない。

「聞いたことありませんか？ 『刀は所有者の元に引き寄せられる』って」

一葉の言葉には少しだが聞いたことがある。

刀には魂が宿っており、その所有者に永遠につながっていると。つまり、月山家の末裔である彼女らが、あの刀に引き寄せられたのも必然だということ。

「だから、決勝を棄権してほしいの」

「お願いします。棄権をしてくるのなら、なんでもしますので」

なんでもしますって……魅力的な言葉を簡単に言うなよ。

セラの目も怖いし……。

「なんでも、してくれるのか？」

「はい」

「不本意だけど、仕方ないわよ」

「——だが断る！」

みんながズッコケた。

まさか、あの漫画家のセリフを口にできるとは思ってもみなかった。

「そんなにあの刀が欲しかったら、試合に勝つことだな！」

「ええ、私もそれに賛成です。それに、あなた達は決勝まで勝ち進んだほどの実力なんですから頼むほどではないと思うのですが」

それは思った。実力はあるのに、なぜ棄権を勧めるのかを。

「……わかりました。明日の試合では全力で戦いますので、怪我をしたらすみません」

「あんたたちじゃ、私達二人にかなうかわからないけど」

なるほど、彼女らは強すぎるから棄権を勧めたのか。

「上等だ。こんなガキに負けてられねえ！」

「ガキ、ですってー！」

双葉の方が俺の言ったことに腹を立てた。

「私たちは高一ですっ！」

一葉が声を荒げて言った。どうやら二人とも怒っていたようだ。

「え？ そうだったの？」

驚いた。胸はそこそこあるが、身長は一六〇くらいだから、年下だと思っていた。

「藤島 春樹！ 絶対に潰すわ」

双葉が立ち上がり俺を見下すように指差して言う。

「双葉、そろそろ行きましょう。ホテルで早く休まないと、明日の試合に支障が出るわ」

一葉も立ち上がり、二人で玄関へと向かう。
とりあえず、セラを残して二人を玄関まで送る。

「送らなくてもいいですよに」

「ま、日本じゃ見送るのは常識だからな」

玄関まで行くと、そこには刀が二本置いてあった。
たぶん、試合で使った模造刀だろう。

「では、明日の会場で」

「あんたに負けるほど、私たちは弱くないけど」

「はいはい、道中気をつけろよ」

それだけ言い、彼女らに背を向け、瀬奈達のいるところまでは行かず、道場で練習をした。

彼女たちは強い。人の体を見ればわかる。

——気を抜くと負けるな。

夜は、素振りをずっとやり、結局道場で寝入ってしまった。

第四十一話

翌日、決勝にはまだ時間があるのに人が大勢いた。

ただの剣術大会に、なぜこんなにも観客がいるのか。

優勝賞品である月山家の刀。あれは国宝レベルのものだという。そんな価値のあるものが優勝賞品になるのだから、観客全員が一目それを見てみたいと思ったのだろう。

決勝戦が近き、俺はその前に主催者に会いに行った。

主催者を見つけるが、なぜか人気のない廊下で倒れていた。

容態を調べると、なんだか疲れているような感じがした。

俺は頬を叩いて目覚めさせた。

「い、一体ここは……」

「試合の会場だけど」

「試合？」

なんだろう、主催者なのに話が分かっていないようだ。

「何かあつたんすか？」

「……思い出した。あの時、友人から刀をもらって……しばらくしたら意識が」

刀には魂が宿っている。

どうやら、刀の霊——たぶん、月山家の先祖——が主催者に憑依たらしい。

ってことは、刀の霊がこの大会を開いたってことか。

——待てよ。

この大会を優勝した者はまた刀に憑依される可能性もあるのか。盗んだ家系を殺すなんて大惨事になりかねない。

「刀、見てみるか」

まだ時間があるので、俺は一足先に試合場へ足を運んだ。

優勝賞品の刀は試合場の端に置いてあった。

周りを見ると、観客がたくさんいる。

俺は気配を消して刀の柄を掴んだ。

ドクン！

「なっ！」

触れた瞬間に違和感を感じた。

刀の中に何かがいる。

それはきつと刀に憑りついている魂なのだろう。

俺の体の中に入ってきたきそうだったが、何かで遮断されている。

——魔法抗体……か？。

幸運なことに、俺には憑依できなかったらしい。

魔法抗体か、それとも俺の精神力が強かったのか、どちらかわからない。

刀の中で動き回っているのがわかる。

強者じゃないと、この刀に打ち勝つことができないだろう。

とりあえず刀から離し、試合場から出た。

「……ユーに相談してみるか」

魂のことに詳しくそうなので、みんなの元へ向かった。

五分も走らないうちに、みんなはすぐに見つかった。

「ユー、ちよつといいか？」

ユーは首を縦に振り、二人で人気のないところに行った。

「あの刀のことなんだけど、刀に憑依している霊をなんとかできないか？」

『刀に憑りついている霊もメガロと一緒に 冥界に返すことはできる』
なるほど、そういえばメガロも死者の魂を使っているんだっけ。

「よかった。それじゃあ、刀を手に入れたらやってくれ」

コクンと頷いたのを見て、みんなの所にもどった。

「ヘルサイズ殿と何を話していたのですか？」

戻って早々、セラが問いかけた。

別に、セラになら話してもいいか。

「実は――」

刀のことについて簡単に説明した。

刀に霊が憑りついていることには驚いたようで、少し足が震えていたのが見えた。

――武者震いか？

「わかりました。そういうことなら、あの二人には負けてもらわないといけませんね」

「そういうこと。歩達には話してもいが、瀬奈には話すなよ」

「わかってます」

試合時刻がせまり、俺達は控え室に向かった。

『ついに、決勝戦が始まりましたー！　まずは、両ペアをご紹介しますぞー！』

アナウンスと共に俺達の紹介が始まった。

『まずは月山ペア。この二人は双子で、B会場ではさまざまなコンビプレイを見せてくれたぞー！』

月山家の紹介が簡単に終わると、男共の声が会場に響き渡った。

「がんばれー、一葉ちゃん！」

「双葉ちゃん、俺のために優勝してくれーっ！」

「俺と付き合ってーっ！」

おかしな声援だ。

体つきを見ると、剣士っぽい体格をしているので、どうやら負けてしまった選手のようなのだ。

昨日見かけなかったので、B会場の人たちだろう。

月山姉妹は俺達しか見ていない。他の人は眼中にないようだ。

『もう一つのペアはー、唯一の男女ペア、藤島ペアだーっ！』

……え、それだけ？

俺達だけ紹介それだけなのかよっ！

「ブーブーっ！」

「藤島、やられちまえ」

「そーだそーだっ！」

やかましい。俺だけ批判かよ。

「セラさんサイコー！」

「あの人に踏みたい」

「結婚してくれーっ！」

最後のは虎鉄だった。

セラはその声を聴いた瞬間に、誰にも見えないように何かを取り出して虎鉄に向かって投げた。

「ぶはっ！」

額に当たった虎鉄はそのまま倒れこんだ。斬れない葉っぱを投げたように見えた。

この状況を見た観客は静かになった。

視線を月山姉妹に向け、その時一葉が俺に話しかけた。

「どうしても、棄権はしてくれないのですね」

「悪いな、戦わずして負けるのは大嫌いなんだ」

「ふん、後悔することね」

「後悔するのはあなたたちですよ」

「言ってくれるじゃない」

四人全員が刀を構える。

『それではー、開始ッ！』

試合開始のゴングが鳴った。

第四十二話

開始から五分、どちらも攻防を繰り返しているだけだ。

春樹は姉の一葉と、セラは妹の双葉と戦っている。

吸血忍者であるセラは、力を使わずとも有利な状況だった。

「くっ、このぉ！」

「甘い！」

焦ってきた双葉が連続で突きを繰り出すが、セラは刀をかすめて軌道をそらさせる。

突きの嵐がやんだ瞬間にセラは反撃に出るが、双葉はなんとか後ろに下がることができた。

「はぁ、はぁ、あなた、何者？」

「どういうことですか？」

「あんたみたいな剣士は見たことがないわ。人間離れしてるもの」

「……あなたが知る必要はありません。あなたはここで敗れるのだから」

セラは双葉の前に寄り、自分の得意とする必殺技を出した。

「秘剣、燕返し！」

「っ！」

三方向からの攻撃。双葉は二つまで防御ができたが、最後の一つは防ぎきれなかった。

「っ！」

片膝をつく。模造刀を杖にして立ち上がろうとするが、燕返しを受けたせいか刀が折れてしまった。
そのまま倒れこみ、勝負が決まった。

「さて、春樹の方は――」

セラは春樹の勝負を見ると、春樹はかなり傷ついていた。

――いったい何が……。

彼の動きを見るが、いつもとは違って見えた。

どこが悪いのだろうか。そう思ってしまったが、地面を見てなるほど、と少し笑った。

セラはこのまま春樹の試合を眺めていた。

「……双葉が負けましたか。セラさんは強いんですね」

「まあな。俺よりも強いぞ」

「では、早く終わらせてあの人と勝負したいです。あなたの力も、その程度ですから」

一葉は見下すかのように言うが、俺は言い返せなかった。

ハッキリ言おう、一葉は強い。

俺の攻撃をややすと躲し、その隙について攻撃をする。

攻め続けているのに、まともに当たった攻撃は二、三回くらいだと思っ

彼女は素早いのだ。

――焦るなよ、俺。もう少しだ。

刀を地面に刺し、目を閉じて深呼吸をする。

俺は一気に一葉の元まで走った。

「どんなに抵抗しても無駄です——っ！」

一葉は俺の攻撃に危険だと察知して構えなおした。
一葉の前で急ブレーキをし、ジャンプした。

「——紫電っ！」

俺は飛び上がり、彼女の頭上へ縦の回転斬りをした。
うまく着地し、一葉の背後に追い打ちをする。
だが、それはうまくいかず、防御されてしまった。

「驚きました。まさかあそこで跳び上がるなんて」

不意を突いたせいか、ちよつと息が乱れていた。

「ですが、次は効きませんよ」

「そうだな。だけど、これでお前の負けは決定した」
「え？」

少し間が抜けた声を出す一葉。

「だってお前、俺しか見てないだろ」

「……どういふことですか？」

「下」

「？——なっ！」

実は、この試合場は動きやすくするため、土でできているのだ。
今、この地面は足場がデコボコしている。

「もしかして、あなた今までの攻撃——」

「そういうこと。あんたの攻撃をただ受けているわけじゃない。あんた、礼儀正しいからこんな整備されていない地面で練習したことはないだろ」

「うっ！」

「やっぱり……。俺は攻撃を受けているときも地面を崩すために刀を地面に刺したりしていたんだ。あんたは強い。正攻法じゃ勝てなさそうだったから、この手段をとったんだ」

「こんなの、どうってことも——きゃっ！」

足を崩すくらいの落とし穴に見事ハマり、足を崩してしまう一葉を俺は見逃さず、彼女の元まで向かった。

このくらい、じいちゃんの修行の方が足場がひどかったぞ。

簡単に彼女の前行まで行き、攻撃しようとする一葉を——刀で振り切り、刀を飛ばす。

そして、どこかに一葉の刀が突き刺さった。

「勝負ありだな」

「……こんなのずるいわっ！ 審判、再戦を要求します！」

「ずるくはありません」

セラがやってきて、一葉に言う。

「な、なぜですか」

「あなたはいつも床やコンクリートで戦うのですか？ 剣士なら、この地面くらいどうってことはないと思いますが」

「うっ！」

子供っぽく狼狽える一葉。少しだけ、彼女のことを分かったような気がする。

『えーと、この試合っ、藤島ペアの勝利ーーーーっ!』

大半がセラの歓声、俺には死ねコールが会場内に響いた。

「まさか、あそこで地形を利用するとは思いませんでした」

「いやー、あのまま戦ってたら負けてたのは俺かもしれないし」

俺とセラは表彰台の上に立っている。

その両隣には月山姉妹と虎鉄ペアが立っている。

どうやら、虎鉄と犬飼が三位になったらしい。

主催者がいないまま表彰式が始まった。

『えー、それでは、優勝賞品の刀です』

俺とセラの前に出された一つの刀。

——早くユーに渡しとくか。

前に出て、置いてある刀を持つとするが、その瞬間、俺の視界が真っ白に染まった。

「くっ、閃光弾!」

「やっぱり渡せませんっ!」

一葉の声がした。

ヤバイ。早く刀を取らないと。

「ダメっ!」

双葉が俺の体に抱きつき、動きを封じた。

「やめろっ！ その刀に触れるなっ！」

「なんでよっ！ あんたがその刀を欲しいだけでしょ」

「違う！ ああ、もうっ！ セラっ、頼む！」

「……どうやら、遅かったようです」

やっと目を開けられるようになり、刀をみるが、既に一葉の手に渡ってしまっただ。

双葉が俺から離れ、一葉の所に寄ろうとする。

「やめろッ！ 近づくな！」

「え？ ——きゃっ！」

一葉が刀を振り、風圧で双葉を飛ばす。

ちょうど俺の前に飛んできたのでしっかりとキャッチすることができた。

「い、一体何が——って、離しなさいよっ！」

キャッチしたのはいいが、そのキャッチがお姫様抱っこだったので恥ずかしかったようだ。

「……憑りつかれたんだよ」

それだけ言い、彼女を降ろした。

「瀬奈、そこにある竹刀袋を投げてくれ！」

「は、はい」

投げられた竹刀袋を受け取り、その中から花影血桜を出した。

「セラ、彼女から刀を取り上げる——って、セラ？」

「え、ど、どうかしましたか？」

「いや、だってお前、足が——」

「武者震いです。心配無用です」

……大丈夫なのか？

周りを見ると、寝始めているものが増えていた。
どうやら、歩達が何かしたのだろう。

「ねえ、お姉ちゃんは」

「心配すんな。俺がちゃんと元に戻してやるから」

「……あんたに頼むのも癪だけど、お姉ちゃんを助けて」

そう言って、眠りに落ちた。

「つたく、世話の焼けるお嬢さんだな」

隅で寝かせて、一葉の方を向き、血桜を構える。

「行くぞ、セラっ！」

「は、はい」

二人で一葉に向かって走り出した。

第四十三話

憑依した一葉の攻撃は凄まじかった。
まだ花影血桜の力は使っていないため、一葉の攻撃の一つ一つが重く感じた。

「春樹、大丈夫か」

「ああ、こっちは大丈夫だけど」

魔装少女になった歩が観覧席から飛び降りて、俺達を駆けつけに来てくれた。

今、大丈夫じゃないのがセラであつた。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫です。幽霊なんて存在しません」

……大丈夫じゃなかった。

まさか、セラって幽霊がニガテなのかよ。

「あー、疲れてるなら休んでろよ。俺と歩で倒しておくから」
「……すみません。少し休みます」

セラは俺達から離れた。

「よし、二人で何とかするか」
「あまり近づくなよ、変態が」
「まだ気にしてたのかよっ！」

なかなか慣れないんだよ、お前の服装が。

一葉が向かってきた。

左右に分かれて、相手を惑わせようとしたが、標的は俺に絞られた。

「げ、マジかよ」

刀が振り下ろされる。

すかさず防御をとるが、重さに耐えられない。

——しょうがない、使うか。

俺は血桜の力を解放し、影がサポートしてくれた。

一葉は俺から離れ、体制を整えている。

ドクン！

「っ！」

さっき、月山家の刀を持つときに感じた感覚と一緒にだ。

だが、アレよりもすごい強い。

体の感覚がなくなっていくような感じた。

——大先生、この刀、すごいヤバくないすか。

まるで、封印が解けていくような、そんなふうに思ってしまう。

だから、この力をあまり使うなと大先生は言っていたのか。

「あぶねっ！」

突如、俺の首を斬ろうとした刀を防ぐことができた。

「——四〇〇パーセントっ！」

俺が防御しているときに、歩が一葉の刀を折るようにチェーンソウを振りかざした。

だが、一葉はチェーンソウを持っている腕を足で蹴り上げ、刀の切断を阻止した。

「くっ、なんて力だ」

一葉は標的を歩に変え、腹を蹴り飛ばした。壁に激突し、歩は出ようとしたが、一葉は懷に持っていた小刀で歩の掌に投げた。

奥まで刺さった小刀は歩の動きを封じた。そして、無表情のまま顔を俺に向けた。

「いいかげん、目を覚ましやがれっ！」

一葉に言っても返事はない。返ってきたのは振り下ろされる刀だけだ。

しばらく、俺と一葉の攻防が続いた。疲れてきたが、彼女の方も同じはずだ。これ以上やると体が壊れてしまうかもしれない。

「ちっ！」

舌打ちをする。

——こうなったら……。

俺は刀を地面に刺し、地面に影を出して一葉の動きを封じた。

ドクン！

——ヤバい、また、さっきの……。

何かに憑りつかれそうな感覚がまた出てきた。

「頼む、セラッ、お前しかないっ！」

「わ、わかりました」

そう言つて、木の葉から剣を作り出した。
若干震えているが、なんとか動けるようだ。

セラは一葉の持っている刀を斬ろうとするが、刀が意志を持っているかのようにその攻撃を防いでいた。

――力が、足りない。

歩は依然と動けずにいる。

ハルナは使えない。

ユーはなんとかなるかもしれないが、痛みの代償もあると思う。
くそっ、力が、力があれば……。

ドクン！

「がつ！」

今までとは違う、鋭い痛みが俺の体に走った。

集中力が乱れると、また動かれてしまうので、なんとかこらえる。
痛い。

だけど、影の力が増し、一葉の腕しか見えないほどに包まれた。
今だ、と思ったセラがもう一度剣を振り下ろした。

刀はとうとう一葉から離れ、地面に落ちた。

「お、終わ——っ！」

また、さっきの痛みが出てきた。

なんとかみんなにばれないようにする。

一葉が崩れ落ちるのが目に入り、俺は彼女を受け止める。

「まったく、余計なことしゃがって……」

すやすやと眠っている一葉に文句を言った。

「う、ううん……ここは……」

「お姉ちゃんっ!」

双葉が抱きついた。安心したのか、双葉は泣いていた。
時刻は深夜、みんなが寝静まっている頃だ。

「まったく、やっと目が覚めたか」

「え、……藤島さん!」

やっと俺に気づいてくれたようだ。

「ここは俺のじいちゃんの家だ。あの出来事、覚えているか?」

「……いいえ、藤島さんから刀を奪った時に、意識を失って」

「あのあと、藤島達が助けてくれたのよ」

一葉が俺を見る。

「ええと、刀は……?」

「心配すんな、一応無事だ」

後ろに置いておいた刀を一葉に渡す。

さすがにあんなことがあったため、受け取るのに時間がかかった。

「……でも、私たちは負けたのに——」

「いいよ、俺達は賞品のために戦ったわけじゃないし」

「でも――」

「いいんだよ。そもそも、あの刀を置くところがないし。邪魔だから、捨てるよりあげた方がいいだろ」

やっと手を伸ばしてくれたが、双葉が刀を取ってしまった。

「ねえ、刀に入ってるアレは……大丈夫なの？」

「大丈夫だ。知り合いに除霊して貰ったから」

実際はユーがあの後、刀に入っている霊を冥界に返したんだけど、彼女たちには黙っておこう。

「さて、もう寝とけ。大会の疲れを回復させないといけないからな」

俺は立ち上がり、自分の部屋に戻ろうとした。

「「あ、あのっ！」」

「ん？」

「……あ、ありがとうございます」

「……ありがとう」

彼女らに背を向け、片手を振りながら部屋に戻った。

第四十四話

今日でこの家からオサラバだ。
夕方の電車に乗るつもりだ。

「もう、行っちゃうのか？」

「はい、いろいろありがとうございました」

そして、朝一に月山姉妹が実家へ帰ろうとしていたのだ。
玄関では全員が見送りに来ている。

「お前さん等の親父にもよろしく言っといてくれ」

「お父さんを知ってるの？」

「うむ、昔戦ったことがあっての、返り討ちにしてやったわい」

お父さんがボコボコにされた光景が浮かんだ二人はドヨンとしていた。
た。

「は、はい」

「また、飲みにも行こうとも言っておいとくれ」

じいちゃんは今に部屋へ戻ってしまった。

「藤島さん」

「な、なんだ？」

「今度は正々堂々と勝負しましょう」

一葉の顔は、ニッコリとほほ笑んでいた。

「ぜ、善処します」

はあ、次までになんとかしなきゃ、勝てないかも。

「……………」

「どうかしたのですか？」

じつと俺を見ている双葉に、セラが聞いてみた。

「えっ、別に、なんでもないわよ！」

慌てて俺達に背を向けて、荷物を持って戸を開ける。

「お姉ちゃん、早く行くわよ！」

「はいはい。では、みなさん、またいつか」

双葉の後を追うように、一葉も出て行った。

「暑い！」

月山姉妹と別れてから数時間、ハルナが叫んだ。

しかも、扇風機を独り占めしている。

確かに、今日はものすごく暑い。三十八度以上はあると思う。

「ユー、大丈夫か？」

『大丈夫』

歩が心配してみるが、ユーはいつものように平然としている。

「だあああつ！　この世界は暑すぎる！　涼しい場所はないのか
っ！」

「あるにはありますが……」

「えっ？　俺？」

セラが歩を見ている。

——…まさか。

歩はゾンビ。

ゾンビは光に弱い。

つまり、外で涼しいところへ行くのだろう。

外で涼しくなるところ……100パーセントアレだろう。

「海ですね！」

瀬奈が目をキラキラしながら言った。

「ええ、帰るついでにみんなで海水浴でもしましょう」

「悪いが、俺は先に帰ってるよ」

「「えっ？」」

二人して俺を見るな。つか、瀬奈は知ってるだろ！

「あ、そういえば、春樹君って確か……」

「ああ、そうだよ。俺はカナヅチだ」

恥ずかしくなったので、背を向けて寝ころぶ。

「だから、お前らだけで海水浴を満喫してくれ」

「そうですか……なら——」

「はい、そうですね」

二人が団結したらしい。説得しようとしても絶対に行かないぞ。

「春樹君、ちよつと立ってくれませんか？」

「ん？ なんだ――ぐあつ！」

い、いきなり延髄を、強く強打……しやがって。

「セ、セラ……い、いかねえ……ぞ」

「強くやったのですが、ならばもう一度」

もう一度くらい、俺の意識は途絶えた。

……暑い……ここ……は。

「はっ！」

体を起こし、辺りを見回すと、大勢の人間がいた。

全員水着姿、前には海。

とうとう来てしまった。

「ん？ なんだこれ？」

隣に置いてあったトランクを開けると、中から人が出てきた。

「って、お前かよっ！」

歩だった。つーかよく見ると、このトランク、じいちゃん家にあつたやつじゃん！

とりあえず、生きた屍を日陰に運ぶ。

「す、すまない」

「はあ、泳ぎたくねえ……」

あぐらをかき、ぼーっと海を眺める。

「お、おい、見ろよ！」

「ん、なんだ、よ」

歩の示す方向には、瀬奈達が出た。

「おお」

思わず感嘆の声を上げてしまった。

ハルナはいつものように縞々の水着だ。

ユーはなぜかスク水。

あの二人は可愛い格好だ。

だが、可愛いとは違う、すごい怪物が二人いた。

瀬奈とセラ、二人合わせて四つのアレが飛び出ている。

もう凶器だろ、アレは。

「あ、春樹君だ」

瀬奈が俺を見て走る。

あまり走るな。揺れてるぞ。

瀬奈は青い水着にパレオを付けている。

「どうですか、コレ？」

「あ、ああ、似合いすぎてて可愛いぞ」

顔をほころばせる瀬奈。その顔が非常に可愛らしかった。

「やっと起きましたか」

セラとハルナがこちらに来て、歩の顔面を蹴りつけた。

——って、なんでビデオカメラ持ってるんだよっ！

データがあつたら、後で見せてほしかったりする。

セラの水着は黒一色。大人びていて、セラにはやはりこちらの方が似合っていた。

「春樹は着替えないのですか？」

「う、そうだ、俺には水着が——」

「さっき買っておきました」

瀬奈、余計なことをしないでくれよ。

「じゃ、じゃああれだ。今からじいちゃん家にいってちゃんとあいさつしなくちゃ——」

「それなら大丈夫です。おじいさんからは来なくてもいいと」

くそ、あのジジイ。逃げ道をふさぎやがったな。

「はあ、しょうがない。瀬奈、水着を出してくれ」

半ばあきらめて、水着を受け取ると着替えに行った。

第四十五話（前書き）

日付が変わってしまいました。明けておめでとうござい
ます。なるべく三日に一つは投稿したいと思います。

第四十五話

「はあ、暑い……」

着替えた後、みんなの所へは戻らずに、海の家で焼きそばでも食おうかと考えていた。

「すみません、焼きそば一つ」

「はい、焼きそば——って、春樹？」

焼きそばを作っていたのはなんと虎鉄だった。

「なんでお前が働いてんだ？」

「そういうお前は泳げなくせに海にいるんだよ」

虎鉄は俺が泳げないことを知ってたんだっけ。

「……みんなと来てるんだよ」

「マジでっ！　ってことは、セラさんも……」

「やっぱリイラね。じゃあな」

「おいおい、ちょっと待てっ！」

机越しに俺の腕をつかむ。

力が入っていて逃げられない。

「なんだよ」

「俺も行く。だからちよつと待ってる！」

「はあ？　お前、バイト中だろ」

「もうすぐ休憩時間だから、それまで」

「……なにか見返りは？」

「焼きそば奢るから」

「……はあ、しょうがない」

承知しないと離しそうもないからな。

虎鉄からタダで焼きそばをもらうと、近くの円形のテーブルで食べた。

若干、量が少ないようにも感じたが、タダで食べられたので文句は言えない。

「すみません、このテーブル、いいですか？」

食べている途中に声をかけられた。

他のテーブルは満席だったのだろう。

「別にいいですよ——ってアレ？」

声をかけられた人物を見ると、見知った双子の女性だった。

「こんにちは、藤島さん」

「やつぽー」

「なんで月山姉妹が？」

「ここって結構有名なところだから、帰る前にちょっとね」

妹の双葉が向かいに座り、訳を説明した。

「短い別れでしたね」

ニツコリと笑う一葉は俺の右隣に座った。

それにしても、こんな場所では会いたくなかった。

泳げないなんて知られたら、双葉あたりに笑われそうだ。

「よー、またせたな！」

いやなタイミングで虎鉄がやって来た。

「ひょっとして、セラさんと春樹に負けた月山姉妹じゃん！」

二人の体が固まった。

「ヤベツ、近くで見るとメチャクチャ可愛いじゃん！ 電話番号教えてくれない？」

二人の間に入り、べちゃくちや話す虎鉄。

一葉と双葉は目を合わせて頷き、左右からパンチとキックの挟み打ち攻撃をした。

「ぐばあっ！」

左右からの攻撃により吹っ飛ぶことはなく、そのまま崩れ落ちた。虎鉄に合掌。

「ところで藤島さん、よかつたらこの後一緒に遊びませんか？」

「ああ、悪いな。あつちでみんなを待たせてるんだ」

「え、もしかして、あの家にいた人たち？」

「そうだけど」

焼きそばを食べ終わると瀬奈が迎えに来てくれた。

「もー、遅いから心配しましたよ」

「悪い悪い」

「な、何アレ……」

「お、大きい……」

瀬奈の姿を見てしまった月山姉妹は、自分の胸と見比べながらうなだれてしまった。

別に、二人のの胸は見るからには標準サイズだと思うけど。

「あ、こんにちは、一葉さんに双葉さん。さっきぶりですね」

「「こ、こんにちは」」

瀬奈の威力に委縮してしまった姉妹。

「そういえば、さっきチラシで見たんですけど、一時間後に早食い大会があるそうですよ」

「なんだよ、焼きそば食べなけりゃあよかった」

空になったケースをゴミ箱に投げ入れる。

「早く行きましょう。セラさん達も待ってますよ」

「はいはい」

泳がなけりゃ別にかまわないさ。

「一葉さんたちも来ますか？」

「え、はい」

「あ、ありがとう」

結局、月山姉妹も一緒に遊ぶことになった。

俺は気絶している虎鉄を引きずりながらみんなの元へ戻った。

「遅いつ！」

「……スミマセン」

ハルナに正座をさせられながら説教を喰らっている。
待ってくれたあたり、優しいところもあった。

「で、その物体はなんですか？」

もう人間扱いすらしてくれなくなった虎鉄。未だに目を覚まさないでいる。

「あ、そうだ。瀬奈がこれを見つけてくれたんだ」

持っているチラシをハルナに見せる。

「これなら歩でも参加できるだろ」

「これならできそうだな」

「なっ、こ……これはっ！ モフモフ枕」

優勝賞品が枕だと目を付けたハルナは急いで会場に向かった。

「……俺達も行くか？」

「だな」

歩はユーを連れ、ハルナを追いかけに行った。
俺も瀬奈達と一緒に会場へ向かった。

会場はたくさんというほどの数ではないが、結構な人数がいた。

「お、おい、あれって」

歩が俺の肩を叩き指差す方向を見ると、あの吸血忍者がいた。

「「トモノリ！」」

「トモノリって言うなあ！——って、なんで相川たちがいるんだ？」

「それはこっちのセリフだ。なんでお前がここにいるんだ？」

「それは、この早食い大会に出るためだろうっ！」

早食い大会のためにここに来るなんて……。

やっぱり、アホだ。

「アレ？　なんか知らない人たちが」

「ああ、紹介するよ。最近知り合った月山一葉と双葉。そして、こいつが武田虎鉄」

「「初めまして」」

「よろしくっ！」

虎鉄はなぜか平然としている。

トモノリはどちらかというと美人の部類なのに。

「珍しいな、お前が興奮しないなんて」

「俺はバカは守備範囲外なんだ」

「バカっていうなー！」

早くも打ち解けてしまう二人。

織戸との会話を聴いているみたいだ。

『それでは、これより早食い大会を始めます』

放送が鳴り、みんなの声がなくなった。

賞品はいらないけど、タダで飯を食べるのはうれしい。

『一回戦はかき氷だーっ！』

早食い大会が開始された。

第四十六話

時間が経つのも早く、決勝戦になった。

ここまで勝ち残って来たのはハルナ、トモノリ、俺、虎鉄の四人だ。

「ふっ、どうやら俺の勝ちのようだな」

虎鉄が早くも勝利宣言をきめている。

それもそうだ。

なんせ虎鉄は、この大食いの中で全が一番に終わっており、未だに腹が半分満たされたって言うくらいなのだから。

『最後の早食い対決は——っ！ とんこつラーメンだあああッ
！』

ハイテンションな司会の言葉をなんとなく聴き、目の前にとんこつラーメンが置かれた。

『それではあ——、開始ッ！』

初めにスープを飲もうとするが、熱くて飲みづらい。

この戦いで最も難関なのは、熱いスープなのだから。

周りを見てみると、虎鉄はそんなのは気にしないで麺を豪快に啜っている。

ハルナも同様に熱さに負けず食べている。

そして、トモノリは……。

——なぜ、ドレッシングをかけるっ！

コイツ、スープにマイドレッシングをかけてスープを冷ましやがった。

俺も自分のペースの遅さに気づいて、なんとか麺を啜った。

「よっしゃーっ！ これで、俺の勝ちだああああ！」

虎鉄は既に麺を食べ終わり、残りはスープのみとなっていた。

アツアツのスープをごくごく飲み続け、飲み終わる瞬間にハプニングが起きた。

「おい、なにやってんだ」

「ぶはあっ！」

誰かに肩を叩かれてスープを吐きだしてしまった。

「なにすんだっ、犬飼っ！」

「もう、休憩時間は終わっている」

「えっ？」

犬飼は虎鉄の服を掴み、引きずりながら海の家へと戻って行った。つつか、犬飼って、外じゃあんな感じなの？

試合場の時と雰囲気違っていた。

『おおおっと、ここで一名脱落だーっ！』

あと少しで優勝だったのに。残念。

俺も麺を食べ終わり問題のスープに移るが、まだ熱かった。

トモノリはドレッシングをかけた栄養が悪すぎるスープを簡単に飲んでいる。

ハルナは俺と同じ関門で悩んでいる。

「こうなったら、奥義を以て応えよう！」

ハルナはラーメンを高く放り投げ、自分も跳んだ。

「見るがいいっ！　これが――空中大回転スープ飲みだっ！」

……なにをやってんだ、あのバカは？

空中で回転しながらスープを飲んでるように見えるが、俺の目では誤魔化されない。

――全部飲めてないじゃんっ！

着地した後にみんなが気付いた。

「全身びちゃびちゃだーっ！　絶対失敗してるだろそれーっ！」

歩が声を張ってツツコんでくれた。

『優勝』

「「勝ったーっ！？」」

俺と歩の声がシンクロした。

優勝はハルナになり、あのモフモフ枕をゲットすることができた。早食い大会が終わった後、みんなを見てみたが、二人だけ少なかった。

近くを探してみたら、道路の橋で二人が私服姿で車を待っていた。

「月山姉妹、みんな探してたぞ」

道路沿いに立っていたのは一葉と双葉だ。

「そろそろ迎えが来るので」

「迎え？」

「あれよ」

双葉の指差した車を見ると、その車が目の前にやって来た。

「リ、リムジン」

「そうよ」

『お帰りなさいませ、お嬢様』

燕尾服を着た老人が車から降りて出迎えた。

「つてことは、お前ら、お嬢様！」

「はい。ですので、このことは内緒にしてください」

一葉のお願いに俺は黙ってうなずいた。

「それでは、またいつか会いましょう。刀、ありがとうございました」

「じゃあね」

リムジンに乗り、窓越しに俺を見つめている。

『それでは』

老人が俺に頭を下げた後、運転席に乗りリムジンを走らせた。
俺は我に返るまで、三分位かった。

これ以上やることはないので、みんなで帰った。

月山姉妹のことはみんなには黙り、ただ帰ったと伝えた。

「はあ、疲れた」

「大丈夫ですか？」

帰り道、今は俺と瀬奈の二人で帰っている。みんなとは別の道なのでさつき別れた。

「今日は私がご飯作りますよ」

「ん、ありがとな」

「いえいえ」

正直、瀬奈が作ってくれるのはありがたかった。
家に帰ると寝るだけだったと思ったから。

「……………」

「どうかしましたか？」

「いや、大丈夫だ」

俺は、決勝戦で起きたことを思い出していた。
花影血桜の力を使った時、今までとは違う感覚が俺を襲った。
何かに憑りつかれそうな、そんな感じだった。

——大丈夫なのかな、俺。

まだ自分の体には何も起きていないが、あの力を使うといずれは一葉のようになってしまうのだろうか。
竹刀袋に入っている血桜に目をやる。

——大先生に会ったら、相談してみるか。

あの先生は少し苦手だけど、この刀をくれたのは大先生なのでしようがない。

俺は先に歩く瀬奈の後姿を見ながら家に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1115y/>

これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～

2012年1月5日22時45分発行